

陋であり、卑俗である。スターンは千七百六十八年に死んだが、死ぬ三四年前衰へ始めた健康を恢復しようとして、フランスやイタリアに旅行したことがある。さなくとも、フランス文學には親んでゐたから、ラベレイは讀んだに違ひない。その道の達人はスターンをラベレイの模倣者であると言ふ。けれども、縦令ラベレイの模倣者であらうと、模倣者であらうと、スターンはスターン丈の見識がある。スターンに特有の新機軸がある。フランスにはラベレイの流を汲んだ一人の大家オノレ・ダ・バルザック (Balzac, Honoré de) を出してゐるけれども英國にはスターンの後継者は未だに出ない。

スターンは二度大陸旅行を企てた。その大陸の見聞が小さな二巻の小説「多威の旅」"A Sentimental Journey through France and Italy" となつて現はれてゐる。此小説を書きながらも、俺は感情の爲に軀をだいなしにこはして終つたと言つたやうに、殉情主義を標榜した作家であつて、旅の空の浮氣沙汰ばかりでなく、高貴な婦人、商店の賣り娘、宿屋の亭主、旅客、乞食、僧侶、軍人といつた工合に、觀たまゝの人間を、上品で滑稽な筆に縮圖して、謂はゞ十八世紀のフランスやイタリアの實世間を忠實に描寫したものである。スターンの特徴を知るには「トリストラム・シャンデイ」より此方が短い丈手取り早いかも知れない。二つの小説の外に「説教集」"Sermons" や「書簡集」"Letters" があつて、ミスタ・ヨリック (Mr. Yorick) の名を用ゐてゐる。「多威の旅」も同じミスタ・

ヨリックが書いた體になつてゐる。ヨリックは勿論スターン自身である。嘘か真か知らないけれども、スターンはポンド・ストリートの下宿屋で頓死をし、持ち物をあらひざらひ、その家の奴婢達から掠め取られたのはまだしも、死體まで墓から掘り出れて、ケンブリッジの一教授のメスにかゝつて、解剖に附せられたとは、死んでまで人並外れた経路を辿つてゐる。

第六節 巨匠に追蹤する群小作家

スターンの後に小説家として擧ぐべき作家は極めて少ない。勿論リチャードソン以下の四大家の成功が一時小説熱を煽つて、雲の如くに群小説作家の輩出を見ただけでも、今は殆んど忘れられて、十八世紀の前半期にはフィールディングの妹のサラ・フィールディング (Sarah Fielding) (1710—1768) にデヴィッド・スインブル "David Simple" があり、ロバート・ポールトック (Robert Paltock) (1697—1767) にダフォウの「ロビンソン漂流譚」やスヰフトの「ガリブ旅行記」を模倣した「ビータ・キルキンズ」"The Life and Adventures of Peter Wilkins" があり、後半期にはチャールズ・ジョンストウン (Charles Johnstone) (?—1800) に「クリサル」"Chrysal, or the Adventures of a Guinea" の佳作があつて注目を引いた。一片のギニー金貨が手から手へ移つて行く間に、その人々の性行や、その當時の歴史的事實を寫した諷刺小説である。然しそれが此作家の創意になつたものでなく、既にアデイスンがタトラ誌上に載せた「一志銀貨の奇談」"The Adventures of

"a Shilling" から想ひついたものらしい。十九世にダグラス・ジェラルド (Douglas Jerrold) の言ふ人の作で、帽子を飾る駝鳥の羽根が、それからそれへ貴婦人に買はれてゆく間の経験を記してゐると同様のものである。日本にも屑屋の籠とか、質屋の藏などの題で同じ行き方を取つた作家もあつたやうである。「クリサル」はスターンの「トリストラム・シャンデイ」の出版の年に現はれたものである。後半期にはジョンスンや、ゴウルドスマスや、ホラス・ウオールボウルや、クララ・リーヴやアン・ラトクリッフや三四記すべき作家があるけれど、實に小説の隆昌を見たのは十八世紀の末から十九世紀にかけてであつて、リチャードスンや、フィールディングや、スモリットの如き大家の輩出後四五十年の間は、小説壇は甚しく振はない観がある。後半期の小説はジョンスン時代に入つて、ジョンスンやゴウルドスマスの述作と共に之を調べて見る。

私は筆をボウブ時代の詩に起さねばならない。

第三章 技巧派の詩人アリゲザンダ・ボウブ

ドライデン時代の詩と散文を通じて古典的精神が漲溢し、鍛冶と洗練を経た高雅な作物を出し、又人間及び萬般の事象に對し、批評的雰圍氣を形成しつゝあつたことは既に述べた通りである。ボウブは殆んどドライデンの追蹤者であつて、文學的作物はその同じ精神と雰圍氣の中に醗酵された

ものである。さうしてドライデンやボウブの如き一代の巨匠の手に依つてこそ、その精神の精華を發揮し得たけれども、稍々降れる作家の作物に至つては、唯機械的に形式の整ひたるのみにて、何等の餘韻なく、餘情なきものの多き恨みがある。但ボウブばかりはドライデンと殆んど伯仲の間にある古典派詩人の驍將である。

アリゲザンダ・ボウブ (Alexander Pope) は彼革命の年の千六百八十八年ランデンのロンバード・ストリート (Lombard Street) に生れた。父はローマ舊教徒で富裕な呉服商人であつた。ボウブが十二歳ばかりの時、井ンザに近いビンフィールド (Binfield) に移つたので、彼井ンザの森の明媚な風景に親昵し、後年爰處を題として一篇の美しき詩を作ることを得たのは、ミルトンがホートン時代に、數多ホートンを背景とした優秀な詩篇を書いたのに似てゐる。ボウブは病身であつた。身長僅に四尺餘り、殆んど侏儒に等しき片輪であつた。感冒を引きやすく、冬など褌衣の下に毛皮の胴衣をきこみ、裏毛の靴下を三つも重ね、奴婢の手を借らないでは、衣服の着こなしが覺束ないほど厚着に馴れてゐた。手足の細い割合に頭が圓抜けて大きく、惻發さうな頗る特徴のある顔をしてゐた食事の時など、頭ばかりがやつと食卓の上に出てゐた位であつたと言ふし、體も曲りくねつて the interrogation point をいふ妙な字名も、まづ根柢のないものではなかつた。ローマ教徒が一般に賤まれた關係もあつたらう、暫時學校にもしたけれど、十二歳の時に廢めて終つた。立派な家庭

教師にも就いて、ラテン語やギリク語の手ほどきをうけたが、多くは文法書や辭書と首つ引きで、その上翻譯書の助を借りて、イタリア語も、フランス語も獨習で仕上げたさうである。彼が極めて早熟の人であつたことは、十二歳の時に書いた "The Ode on Solitude" に見てもわかる。片輪には由來天才が多い。然し片輪は兎角神經が過敏で、怒りつばいものである。ボウブも神經質でむかつ腹を立て易く、ちつとでも他人から不親切なことをされたり言はれたりすると、決して黙つては居なかつた。睡眠の怨も必ず報ひずにはおかなかつた。斯うした性質の特徴が「ダンシャッド」"The Durand" の如き詩に現はれてゐる。「ダンシャッド」はずつと後年の作であるが、千七百三年と言へば未だ十五歳であるが、スタティアス (Statius) の「ジベイス」"Thebais" の第一卷を譯し、その翌年に「牧歌集」"Pastorals" を書いた。尤も書いたと言ふのはボウブ自身の言ふ處であつて、出版したのは千七百九年である。此頃はボウブの研究時代であつた。チョーサの詩を讀んだり、ドライデンやボアローなどの批評論に共鳴してゐた。二十三歳の時「批評論」"Essay on Criticism" を書いて一躍高名の詩人となつた。アデイソンは「批評論」をスペクテイタ紙上で極力讚美した。アデイソンやスヰフト達と親しい交際を結んだ。越へて二十四歳の時に「髮盜人」"The Rape of the Lock" を公にして押しも押されぬ一流の詩人と認められて、詩と言へばボウブ一流のものでなければならぬやうに考へられた。それから十三年は (Homer) の翻譯に全力を傾注した。ホウマ

の "Iliad" や "Odyssey" の翻譯といつても、バラフレイズであつて純粹の翻譯ではなかつた。ギリクの智識の乏しかつた爲にホウマの精神を理解してゐない。希臘人の感情 (Greek feeling) が現はれてゐない。翻譯としては寧ろ拙劣なものであつたけれども、ボウブは此翻譯に據つておこまを起し、テムズ河畔の「トヰクナム」(Twickenham) に宏莊な別墅を構へて、遠慮會釋もなく文壇に批評の筆を振つた。金に不自由のなかつた處へ、元來スヰフトと同じやうに拗くれてゐて、傲慢で尊大で、猜忌の念も嫉妬の心も他人一倍強かつた。トヰクナムから「ダンシャッド」の如き惡罵を逞ふした詩が生れたのは當然である。トヰクナムの胡蜂 (The Wasp of Twickenham) という異名を以て呼ばれたのも無理はない。そのやまん蜂のボウブが住んでゐた花園は、その詩よりも人工的で、頗る手入れの届いた華麗なものであつたさうである。然しボウブとて人の惡口ばかり言つては居ない。「道德論」"Moral Essays" を稱する四つの尺牘からなる詩集も有名な「人間論」"An Essay on Man" や「ホレイスに倣へる諷刺詩と尺牘」"Satires and Epistles of Horace Imitated" も又此隱居所で書いたものである。然し世間と遠ざかつて、よそ目には至つて吞氣らしく見えながらその詩が證明してゐるやうに、多くは取るに足らない文士達を相手に、絶えず筆の上で喧嘩の花を咲かせ、がりがりと神經を使つて居た上に、年と共に雜多な病氣がかち合ひ日増に衰へ、かつ元氣がなくなつて終つた。そのうちに母親には先立たれるし、最も畏敬してゐたスヰフトを始め、數多

の親友を失つて、すつかり減入り込み、それに持病の喘息と水腫が重り、千七百四十四年、トヰツクナムのその庭園の花も笑みこぼれ、人の心の浮き立つ五月の三十日に世を辭して終つた。

ボウプの作物の主なもの、名は既に記した。その内容に就いてざつと書いて見よう。「牧歌集」は春夏秋冬の四つの季節に分つて、彼スベンサの「牧羊者の暦」に見たやうな、牧羊者の戀や歌競べなどを記したブーシルの牧歌「Eclague」の模倣である。流石に他日大詩人たるべき詩才を發揮して、洗練されたものであるが、その外に言ふべきことはない。「批評論」になるとその修辭の上からも、旋律の上からも立派な作品であるが、それは技巧の上から言はるべき言葉で、果して詩と言へるか否かは問題である。三部に別れてゐるが、眞の趣味といふものは天才と同様に滅多にないとか、多少趣味のない人はないが、間違つた教育の爲にスポイルされて終ふとか、判斷の最上の手引きは自然だとか、法則や技巧は法式立てた自然だとか、法則は古代の詩人の實行から生じたものだからホウマやブーシルの如き作家を批評家は研究しなければならぬとか、偏見だとか特癖だとか、無定見だとか、公平がどうか、謙遜がどうか、批評家が何故多いとか、眞實の批評家が出ないのは何故だとか、度し難い批評家、出過ぎた批評家、善良な批評家の性質がどうか、批評の歴史的考察から、古代近代の最良の批評家、例へばアリストウトルや、ホレースや、ペトロニアスや、ダイオニシアスや、ロンジナスや、イラズマスや、ボアローや、ロスコモンなどを讚美してゐる。例を挙げると

先づ大自然を讚美して斯う言つてゐる。

First follow nature, and your judgment frame
By her just standard, which is still the same :
Unerring Nature, still divinely bright,
One clear, unchanged, and universal light,
Life, force, and beauty, must to all impart,
At once the source, and end, and test of art.

自惚れを戒め、學問をするなら徹底的にやるがよい言ひ、生兵法は大怪我の基だといふことを簡裁に斯う言つてゐる。

Trust not yourself ; but your defects to know,
Make use of ev'ry friend — and ev'ry foe.
A little learning is a dangerous thing ;
Drink deep, or taste not the Pierian spring :
There shallow draughts intoxicate the brain,
And drinking largely sobers us again.

妄りに古い語を振りまわすものでない。それは徒に識者の物笑ひになるばかりだと言ふ。

Some by old words to fame have made pretence.

Ancients in phrase, mere moderns in their sense ;

Such laboured notings, in so strange a style,

Amaze th' unlearned, and make the learned smile.

忠告なども所謂「つ」がある。婉曲に言ふべきもので、何んば眞實だからつて、むきだしは嘘をいふよりも害がある。

'Tis not enough, your counsel still be true ;

Blunt truths more mischief than nice falsehoods do ;

Men must be taught as if you taught them not,

And things unknown proposed as things forgot.

挙げたら際限がない。一々御尤な教訓ばかりである。ベイコン (Bacon) のエッセイなども斯ういふ調子である。大體に於てホレース (Horace) の「アルヌ・ポエタイカ」: *Ars Poetica*、やボアロー (Boileau) の「ラール・ポエタイク」: *L'Art Poétique*、なから取つたところが多いと言ふことである。孰れにしても議論である。理詰めである。詩には理屈は禁物であつて、最も貴いのは

は感覺的要素 (emotional elements) である、それが欠けてゐる。欠けてゐるところか絶無である。感覺的要素を欠いてゐては詩にならないと言ふなら、「批評論」は詩ではないことになるが形式は極めて能く整つたヒロウイック・カブリッツである。

True ease in writing comes from art, not chance,

As those move easiest who have learned to dance.

ボップは詩を書くのを舞踏をやるのと同じに考へてゐるので、一舉手一投足^夫視矩繩墨に倣ひさへすればそれでよいのであらう。

「髪盗人」"The Rape of the Lock" はペータ (Petre) と言ふ貴族がファーム (Mrs. Fermor) と言ふ婦人の髪を切り取つたため、年頃別戀の間柄の兩家が、俄に疎遠になつたのを、カレル (Carroll) といふ人から頼まれ、それを和解させる目的で、此一篇の極めて諧謔機智に富んだ詩を書いたものであるさうで、ミセス・アラベラ・ファームに與ふと巻頭にも記してある。ファームは此詩を讀んできつと満足したに相違ない。何故なら、ファームの麗容、殊に婦人の命とも言ふべきその美髪を極力讚賞してゐるし、最後にその切り取られた髪の行衛を面白く歌つてゐる。

"Restore the lock !" she cried ; and all around

"Restore the lock !" the vaulted roofs rebound.

Not fierce Othello in so loud a strain
Roared for the handkerchief that caused his pain

なごドライデンやシェイクスピアの著名な詩や劇に引きかけて、ファーモアの仰山な騒ぎ方を
きかせ、此世で紛失したものは悉く月世界に収められるものであるから、大方其處へ行つたもので
あらうと考へたものもあると言ひ、

Some thought it mounted to the lunar sphere,
Since all things lost on earth are treasured there.

その月世界では、英雄達の才智が重い花瓶の中にとまつてあるし、伊達男共の才智は嗅煙草入れ
や毛抜き箱の中に入れてある。破つた誓約、死の床の施物、紐の端で結んだ戀人同志の心臓、朝臣
の約束、病人の祈禱、遊女の微笑、世嗣の涙、蚊を入れる檻、蚤を轆にかける鎖、乾涸びた胡蝶、
正邪決疑學の大部の書物などがあると巫山戯けた皮肉を言ひ、借その失はれたアラベラの髪は餘人
は知らず、目疾い詩人の目には星となつて煌耀たる尾を曳いて蒼空を飛ぶと、風の精のシルフ達
(Syphs) が悦んでその迹を逐つて行つたと言ふ。

Then cease, bright nymph ! to mourn thy ravished hair,
Which adds new glory to the shining sphere !

Not all the tresses that fair head can boast,
Shall draw such envy as the lock you lost.

For after all the murders of your eye,
When, after millions slain, yourself shall die :
When those fair suns shall set, as set they must,
And all those tresses shall be laid in dust,
This lock the Muse shall consecrate to fame,
And 'midst the stars inscribe Belinda's name.

ペリンダは言ふまでもなくアラベラ・ファーモアに當つたものである。此は結句であるが、こそぐ
るやうな上品な滑稽が絶えず筆端から流れてゐる。例へば茶碗から珈琲を飲まうとするその背後に、
いたづらの男爵が鎖を手にして狙ふ。白い頸の一房の髪を美事切られて嚇然としたペリンダは、美
しい眼を一層光らせて男爵に食つてかゝり、人差指と拇指とで嗅煙草を摘んで男爵に投げる。ペリ
ンダの味方の地の精 (Gnomes) がその嗅煙草を男爵の鼻孔に運んだから堪らない。むづ痒さに大
きな嚏がひとつ、兩眼からぼろぼろ大涙を流して、全く男爵は復讐を討たれた。それも何の武器も
用ひず、織い柔かいペリンダの二本の指でやられたと言ふ如き言ひ知らぬ滑稽味がある。目に見え

ぬ地の精や、風の精がペリンダを絶えず守護してゐるのは、アラベラ・ファーマーに寄せた手紙の中にも書いてあるやうに、ロジクルーシアン學說に従つたものである。ポウプは「ル・コント・ダ・ガバリ」"Le Comte de Gabalis"といふフランス書から借りたと言つてゐるが、十五世紀頃にあつた一種の秘密結社で、その結社の會員の説によると、土水火風の四元には Sylphs, Gnomes, Nymphs, Salamanders の四種の精靈が住んでゐる。地の精の Gnomes は悪戯好であるけれども、風の精の Sylphs は清浄な善良な人間を保護して呉れる。シェイクスピアの「嵐」"The Tempest" にも此風の精の目覺しい活動を織り込んでゐるが、ポウプも風の精ばかりでなく、それらの四元の精が陰になり陽になり、ペリンダを掩護してゐるやうに書いてゐる。その風の精の正體を斯う美しく書いてゐる。

Some to the sun their insect wings unfold,

Waft on the breeze, or sink in clouds of gold;

Transparent forms, too fine for mortal sight,

Their fluid bodies half dissolved in light.

ダ・クウインシ (De Quincey) が此詩を評して、何處の國の文學にもひけを取らない、精緻な巧妙な戯想の記念物であると言つたのも無理はない。ポウプの詩中では「井ンザの森」と「髮盗人」

とが理屈を離れた詩らしい詩であると思ふ。

「井ンザの森」"Windsor Forest" はデナム (Denham) の「クーパーの丘」"The Cooper's Hill" に模倣つた敘事詩であるが、その森は詩人に取つて最も親しみのあつた地であるし、實際テムズ河を控へた井ンザ一帶の風景は明媚である。「牧歌集」にも此景色は織り込んでゐる。ランズダウン卿に献題した丈あつて、屢々卿にお追従を述べてゐるのが嫌味であるけれども、それに引きかへて自分の幸福を感謝してゐるのははらしい心地がする。

Happy the man whom this bright court approves,

His sovereign favours, and his country loves;

Happy next him, who to these shade retires,

Whom nature charms, and whom the muse inspires;

Whom humbler joys of home-felt quiet please,

Successive study, exercise, and ease.

その森の附近の流に絲を垂れる釣魚師が居る。みんな魚が居るだらう。

Our plenteous streams a various race supply,

The bright-eyed perch with fins of Tyrian dye,

The silver eel, in shining volumes rolled,
 The yellow carp, in scales bedropped with gold,
 Swift trouts, diversified with crimson stains,
 And pikes, the tyrants of the watery plains.

叢林を飛び離れた雉子の揚々空に翔るのも束の間で、やがて狩獵家の彈丸に射貫かれ、血塗れて地上にちたばたする。

See I from the brake the whirring pheasant springs,
 And mounts exulting on triumphant wings :
 Short is his joy ; he feels the fiery wound,
 Flutters in blood, and panting beats the ground.
 Ah ! what avail his glossy, varying dyes,
 His purple crest, and scarlet-circled eyes,
 The vivid green his shining plumes unfold,
 His painted wings, and breast that flames with gold ?

丸裸體の樹梢にむらがる山鳩、じめじめした木の間路に住む山鳩、名告りかけた揚雲雀、騒ぎ啼

くたげりなど、高鳴る銃聲に脅され、或は撃ち落されるみじめさを、景情兩つながら整つた詩の中に收めてゐる。之は叙景が主になつてゐるが、他に彼の叙情詩に二つ良いものがある。失戀のため自殺したある婦の菩提を弔つた「不運な女を弔ふ」と言ふ挽歌と、もう一つはこまやかに言ひかはし、深く愛し合つた男女の身に憂き事の降り積り、別れ別れに僧門に入つたが、男のアベラードがその不運の數々を友達に書き送つた手紙を女のエロイザが手に入れる。世を捨て情を斷つた清淨い生活の尼の身であるけれども、昔懐かしく、アベラードにやるせなき心の悶へを消息したといふ、十二世紀の古い戀物語りのその消息の一部を詩にした「エロイザよりアベラードへ」(Eloisa to Abelard)である。此詩を書いてから前にも言つたやうに、ホウマの譯にかゝつて、十二年ばかり経過つた千七百二十九年に「ダンシアッド」の最初の三巻を出版した。「ダンシアッド」は四巻から成つてゐるが、四巻目はそれから十四年後の千七百四十二年に附加したものである。「ダンシアッド」を出版するまでの十數年間、ポウプは何しろ文壇の寵兒であつたから、他の文士達から岡焼半分仕事にけちを附けられたり、悪口もされたりした。敏感なポウプは決して之を聴き捨にしなかつた。今に見ろ一泡吹かしてやるぞと、腹の底に一々たゞき込んで置いた癩の種の破裂したものが「ダンシアッド」である。ホウマの Iliad は Iliou 卽ち Troy の物語であるから、Dunciad は Duncie 物語りと言ふ心持になる。此詩でポウプから馬鹿扱にされた文士や學者は随分多い。大抵名もない人物

であるけれども、中にはダニエル・ダフォウ (Daniel De Foe)、ヤントリ博士 (Dr. Bentley)、
 ツ・ンバ (Colley Cibber) など言ふ知名の人物も見える。シバの如き馬鹿の親玉になつてゐる。シ
 バは欽定詩宗であつたが、それが片腹痛くて堪らなかつたのであらう。欽定詩宗など言ふものが元
 來無用の長物であるとボウブは考へた。だからそんなものに澤山の給料を出して抱へて置くよりか、
 その金で御酒でも召しあがつた方がよいと、ジョージ二世陛下に筆の上で建白してゐる。「ダンシア
 ッド」はドライデンのマク・フレクノウ "Mac Flecknoe" から思ひついたものであるが、マク・フレ
 クノウよりも遙に辛辣で殘酷で、諷刺詩としては最も激烈なものである。ダンシアッドの女神は
 Dulness 即魯鈍であつて、その王位を占めてゐたローランス・ユースデンが死んで、その空位をシ
 バが繼ぐのが一巻で、その祝賀のために種々の競技が行はれ、庇護者や本屋と一緒に詩人や批評家
 が集まつて来る。詩人の幽霊を捕へようとする本屋の競走がある。櫟つたり、怒鳴つたり、潜つた
 りする詩人達の練習が始まる。最後に批評家の競技がある。韻文で綴つたのと、散文で書いたの
 と、二つの大作を読み上げるのを、ちつと眠らずに聴き通すかどうかで勝負を決める。批評家の技術
 を試めすのでなくつて、忍耐力の試験なのである。結局批評家も役者も観物人も一同皆眠つて終ふ
 のが二巻である。三巻では魯鈍の王が女神の神殿に伴はれ、その膝を枕に睡つてゐる夢の幕で、夢
 の中に魯鈍の帝國の過去、現在、未來を通覽し、科學の開けた國は世界の一部分に過ぎないこと、

その開けた國の進歩も歌んで、再び愚に飯つたこと、魯鈍の王の支配の下には際涯もない怪異や奇蹟
 の現はるべきことなどを知る筋で、大英國の文學藝術の状況を説き、之に聯關して數多の文學者が
 引き合に出でゐる。四巻になると彼女神が神學も文藝も抑へつけて魯鈍の支配を擴げようとする。
 その女神の子供の鈍物共が女神の周圍に集まる外に、一智半解の薄馬鹿、無趣味な崇拜家、自惚の
 強い見栄坊、鈍物共のお追従者、保護者といつた連中が居る。女神のお思召に協ふやうに、中小學の
 教育は唯言語文を詰め込んで、眞の智識の道は開いてやらない方針だといふのが、その學校の偉い
 先生達の御托宜である。大學も又同一の方法を遵奉して居るから御安心くださいと女神に告げる。
 そこへ、家庭教師と一緒に外國販りの若い紳士の一隊が現はれ、その旅行中の行動や護物の報告を
 する。さうかと思ふと仕事も何も打放りばなしで、のんびんだらりと遊んで暮らす閑人がうようよ
 してゐる。女神は傍の考古學者や骨董通に忠告して、それらの閑人のために、苔だとか蝶だとか、鳥
 の巢や貝殻などの零細な研究に、適當な仕事を見附けてやつてはどうか、尤も、廣範な有益な自然
 の觀察には進まないやうに特に注意せねばならないと言ふ。女神は尙種々の期待を述べて欠伸をす
 ると、暗と渾沌が凡ての物を包んで終ふ、といふのが此詩の結末である。

「ダンシアッド」は諷刺詩として英文學史上に異彩を放つてゐるものであるが、ボウブはその天才
 を濫用したものである。惡文學を膺懲するやうに見せかけて、多くは齒牙にかけるに足らない文士達

に對して、嫌忌憎惡の私情を漏らしたものであると言はれても仕方がない。餘りよい氣持では讀まれないけれども、ボウウの詩中では一番長いものであり、又傑作の一つであるには相違ない。

次に「人間論」"An Essay on Man"であるが、四つの尺牘から成つてゐて、「ダンシアッド」同様尺牘毎にその内容を細かに始めに擧げてゐる。大括りに内容を示すと、尺牘の一は、宇宙に關して人間の性質や情況を説いてゐる。人間は宇宙といふ大きな機關に較べると極々小さなものである。その人間に宇宙が解る筈がない。解ると思ふのは慢心であるとか、神は世界に生息するものにそれそれ適當な力を與へてゐるから、各その分に安んじなくてはいけないとか言ふことを一々例を擧げて合點の行くやうに説いてゐる。尺牘の二は、人間を支配する二つの原則は自愛と理性であるとか、自愛は慾情に變り、慾情から徳が生れる。憤怒、貪慾、性慾などがあつてこそ、忍耐、用心、愛情も現はれるのだから、惡徳必しも惡徳でないとか、人間には此善徳と惡徳とが交錯つて存在してゐる。さうしてその惡徳を善徳に變へるのは理性であるとか、さういふ善徳二面の性質を備へた人間が集まつて社會を組織し、個々異つた目的と希望を抱いて、個々に異つた道を歩んで行くものだからいふことを説いてゐる。尺牘の三は、萬有は個々の物のために存在しない。生物の幸福は相互的のものである、理性にしろ本能にしろ、個々の生物の幸福のために働くものである。社會も同様の働きをなすものであるとか、社會的、公共的福利に及ぼす自愛の影響だとか、宗教や政治まで諸々の起源形式を説

いてゐる。尺牘の四では、神は諸人諸物に萬遍なく幸福を授けようとしてゐる。然るに、人間は自分が幸福でないで、世界が不完全のやうにいふが、間違つてゐる。神は普遍律に照らして特種律を以て支配してゐないとか、人間が幸福であらんとならば、徳を養はねばならない、幸福を構成するものは徳より外にない。徳と幸福の完成は、此世に在つては天道は合致するに在る、といふやうなことを説いてゐる。四つの尺牘を通じて、屢々反覆がある。人間が世界は自分の爲に造られてゐるのではない、自分が世界の爲に造られてゐるのだと思へ。神は一視同仁に、偏頗なく萬物を監視してゐるといふことを忘れるな。高慢を出すな、我慾を張るな、不平を言ふな、こぼすな。何んでも現在の儘で満足して居ろ。よいか、わかつたかと言ふ風である。

萬物を比較し、神の攝理の公正にして、造化の充實を巨細に論議した後、人間の高慢の鼻柱を折つてゐる。尺牘一の結句は此「人間論」の大體の調子を推知せしめる。

All nature is but art, unknown to thee;

All chance, direction, which thou canst not see;

All discord, harmony not understood;

All partial evil, universal good:

And, spite of pride, in erring reason's spite,

One truth is clear, Whatever is, is right.

「人間論」の推理は混雑して矛盾が多く、釋氣を脱しない處があると言ひ、又表面は道理らしく聽えて、牽強附會な節もあり、概してその思想は淺薄なものだとも言ふ人もある。然しボウブの書いた智的詩篇としては「批評論」と共に讀まるべきものである。智的詩がもう一篇ある。「道徳論」(Moral Essays)と言ふのがそれである。矢張四つの尺牘から出來てゐる。人間の智識及び性格を論じたものが一つ、婦人の性格を論じたものが一つ、それに富の利用を論じたものが二つで都合四つになる。無暗に金を欲しがめるものにも、無暗に金を使ふものにも幸福は與へられない。その中庸を踏んで富を利用せねばならないと言ひ、客齋家や浪費家が金を重んじたり、輕んじたりする動機を覓ね、兩者の惨めな運命を二つの例に取り、又富豪の手合が金使ひの荒いのを見えにすることや、同じ金を使うにしても分別が必要である、家屋を建てるのでも、庭園を築くのも、たゞ廣く大きくばかりあるのが良くはない、釣合とか調和とか言ふものを考へてやらないと徒に失望の種になる。然しよくしたもので、金持が無暗に散らす金は、貧乏人や労働者を賑はすから埋合せがつくと言ふやうな、常識的の議論であつて別に珍らしいことでもない。

以上舉げたもの、外に、既に名を記した「ホレイヌに倣へる」と言ふ諷刺詩や尺牘があり、「雜詩集」(Miscellaneous Poems)の名の下に雜多の詩歌を聚めてゐる。ホレイヌに倣つたと言つたこと

ろで、それは詩の體丈であつて、その内容は「ダンシアッド」に見たやうな個人的惡口を繰返したに過ぎないけれども、語格や作詩法は寸毫も非難の餘地がない程完全なものだと言ふ人もある。

凡てボウブの詩はその洗練された修辭の上から見て、グレイ(Thomas Gray)の外に匹耦を見ない。殊にヒロウイック・カブリット(heroic couplets)の運用の巧妙はその極致に達して、容易に追隨を許さない。ドライデンといへども恐らく一籌を輸せざるを得ないであらう。ヒーロイック・カブリットはボウブの天才を俟つて完成されたと同時に、批評的諷刺的詩人としてのボウブの天分を遺憾なく發揮せしめたものである。簡潔な格言や燃犀な警句は此詩形にびつたりと適合してゐる。若しそれらの道徳的批評的諸論の中に檢索拾蒐したなら、可成大きな一冊の格言警句集が出來やう。而もそれらの警句格言は大概合理的なものであつて、かのリリ(Lyric)に見る如き誇張突飛なものでもないのを多とせねばならない。自由な空氣に育ち、官能の刺戟に生きてゐる現代の人間がボウブの詩を讀んで、思想が淺薄だとか、陳腐だとか、理智的だとか、形式に流れてゐるとか、傳統に泥んでゐるとか言ふものがあるとするれば、それは無理な批評である。トルストイがシエイクスピアを論じたと同じに、肯綮に當つたものではあるまい。ボウブの詩は總じて固苦しい、窮屈な、さうして慇懃な、その社會の觀念や慣習を反映したものであつて、全く時代思潮の影響に成つたもの以外ならないであらう。

ボウプは斯くの如く古典派詩人の典型であり、技巧派詩人の巨匠であつたから、彼を中心として、彼を模倣した詩人が甚だ多かつたのは當然である。

第四章 技巧派詩人の一團

マッシュ・ブライア (Mathew Prior) は千六百六十四年にドーシツシアアの井ンボーン・ミンスタ (Wimborne Minster) に生れた。バズビ博士の下にウエストミンスタで教育を受け、ケンブリッヂの聖ジョーンズ・コレツヂに進み二十四歳の時ビー・エイの學位を取つた。ブライアは技巧派詩人中ボウプに次ぐ十八世紀の最も秀でた詩人である。詩人としてのみならず、外交官として又最も華やかな、さうして快活な敏腕家の一人であつた。ヘイグ (The Hague) に、リズ井ツク (Ryswick) に公使附又は領事附きの秘書として活動し、同じく公使館附き秘書としてパリに在勤し、折衝の伎倆と文藝の才幹とを以て、普く學者才人の間に交り、應答頗る機宜に適ひ、パリつ兒の人氣を一身に集めた觀があつた。英國に返つて王黨民黨二黨の間を往來して、議院に椅子を占め、政界に活躍した。ユートレヒト平和條約協商の當時は全權公使としてパリに滞留し、豪奢な生活振りを見せてゐたが、ジェイムズ三世を王位に即かさうとの望に驅られ、陰謀の渦中に投じ、爲に二ヶ年の禁錮に處せられたこともあつた。然し晩年にはハリー卿 (Lord Harley) から贈られた四磅の金を以てエセツクス

に別墅を求め、心のごかに二三年を送り、一日ハリー卿を訪れに井ンボウル (Wimpole) に赴き、其處で病を得て、物故したのは千七百二十一年であつた。彼の書いた詩中長篇では、悟心の経路を説いた哲學的な「アルマ」"Alma" と、世人の虚榮を扱つた「ソロモン」"Solomon" がある。共にパトラの「ヒューデイブラス」"Hudibras" に倣つて、Iambic 四歩の句で綴つたものである。又古詩の "The Nut-Brown Maid" を近代化した「ヘンリとエンマ」"Henry and Emma" も長いものであるが、ブライアの長處は短詩にあつた。彼の優し味があつて稍々猥りがはしい、生き生きとして稍肉感的な、而も調子のなだらかに巧な戀歌は、多年社交界に飛躍した彼の経歴と、派手やかである。冷かに、粗笨に見えて細心な詩人自身の性格を表示したもの、所謂社交詩 (Vers de Société) である。此詩のスタイルは全くブライアが創めたものであつた。テーン (Taine) の言葉を借りてブライアの人物を批評するなら、晚餐にまれ、婦人にまれ、それを種子に取つて巫山戯た詩を作る。婦人に對しては慰懃であり、面白可笑しく嘘を吐き、交際上手で、さうして快樂主義者である。手取早く言へば、萬の藝道に達した通人である。Vers de Société が類と真似手のないものであるのは、固よりそのところである。

A Song.

In vain you tell your parting lover,

You wish fair winds may waft him over,
 Alas ! what winds can happy prove,
 That bear me far from what I love ?
 Alas ! what dangers on the main
 Can equal those that I sustain,
 From slighted vows, and cold disdain ?

Be gentle, and in pity choose
 To wish the wildest tempests loose :
 That thrown again upon the coast,
 Where first my shipwrecked heart was lost,
 I may once more repeat my pain ;
 Once more in dying notes complain
 Of slighted vows, and cold disdain.

陽気で、上品で、輕妙なフランス詩歌の魅力を有つてゐる事がわかる。猶一つ彼の機智の閃きを次

の警句に認めて見た。

Yes, every poet is a fool :
 By demonstration Ned can show it :
 Happy, could Ned's inverted rule
 Prove every fool is a poet.

此外ヘイグで書いたところ「秘書官」*"The Secretary"*を始め、「五歳の若様に」*"To a Child of Quality five years old"*、「明諭」*"A Simile"*、「尺牘」*"Epistles"*などが知られてゐる。

ジョン・ゲイ (John Gay) は千六百八十八年に生れて、ボウブと同年齡であつた。最初ランダンの絹絲商に奉公してゐたが學問があつたので、モンマス公爵夫人の秘書に擧げられ、詩文に筆を執り始め「田園の遊技」*"Rural Sports"*といふ詩が書き始めて、六篇の牧歌を集めた「牧羊者の一週日」*"The Shepherd's Week"*や流行の歌劇をもつた有名な「乞食の歌劇」*"The Beggar's Opera"*といふ喜劇や、「トリヴィア即ランダンの市街を歩く術」*"Trivia; or, The Art of Walking the Streets of London"*や「寓話集」*"Fables"*その外尺牘物語、バラッドなど數多の詩がある。「牧羊者の一週日」は風趣に富んだ田園の生活や、是と絡んだ傳説を織り込んで、少からぬ興味を唆つてゐる。詩の形はヒロウイック・カブリットである。例へば

When in the welkin gathering showers were seen,
 I lagged the last with Colin on the green;
 And when at eve returning with thy car,
 Awaiting heard the jingling bells from far;
 Straight on the fire the sooty pot I placed,
 To warm thy broth I burnt my hands for haste.
 When hungry thou stoodst staring, like an oaf,
 I sliced the luncheon from the barley loaf;
 With crumbled bread thickened well my mess.
 Ah, love me more, or love thy pottage less!

ランダンの市街をおどけ交りに歌つたと同じに、爰處にも滑稽が閃めいてゐる。平易な俗語を使つて、面白おかしく書き流してゐるのがゲイの特徴である。道化劇の「そのいはゆる」「The What d'ye Call It」など殊にならうである。「そのいはゆる」の中にある「'Twas when the seas were roaring」の一行を以て始まる俗語や「黒眼のスーズン」「Black-eyed Susan」の如き短歌は詩情の溢れた旋律の整つた佳作であつて、歴代名歌集の中には必ずその選に洩れまじきものである。ゲイは全

くその名の示す如き、快活な悪氣のない人であつた。だからボウブにもスウィフトにも好かれたし、ボリングブロウクやアーバヌット (Arbutnot) などからも可愛がられたのである。殊に晩年にはクニスベリ公爵や夫人の寵倅を擔ひ、何不足もなく世を送つて、千七百三十二年ランダンで物故した。

アンブロウズ・フィリップス (Ambrose Philips) も又技巧派詩人の一人である。千六百七十五年ワリスタシアに生れ、千七百四十九年にヴォクスホール (Vauxhall) で死んだ。フィリップスは技巧派ではあるけれども、ボウブとは仲が悪かつた。悲劇を三つばかり書き、又牧歌集「Pastorals」を著したが、それがボウブからの攻撃の種になつたことは記すまでもない。悲劇の中でも「悲しめる母」「The Distressed Mother」の如き比較的出来のよいものであつたが、今日では殆ど顧みるものもない。「ドーシット伯に寄する尺牘」「The Epistle to the Earl of Dorset」にしても、アデイスンやゴウルドスマスが佳作と認むるに躊躇しなかつたものだが、是も今日では一向趣味のない、薄つべらなものと考へられてゐる。

トマス・バーネル (Thomas Parnell) は千六百七十九年にダブリンで生れ、スウィフトやボウブと親交があつた人で Archdeacon にまでなつたが、四十歳になるやならずニチスタ (Chester) の士となつた。彼の詩の中では「ゲスタ・ロマノウラム」「Gesta Romanorum」の物語の一つを基礎とした

「隱者」"The Hermit"の如きフランス趣味を代表したものであり、「夜景の書」"Night-Piece"や "Hymn to Contentment"の二つのodesの中、前者はヤング (Young) やブナム (Blair) の如き陰鬱派 (Funereal School) の詩人達、後者は精緻な抒情詩人のコリンズ (Collins) の詩の先驅となつたことを記せば足る。

トマス・テイケル (Thomas Tickell) は千六百八十六年にカーライル (Carlisle) に近いブライドカーク (Bridkirk) に生れ、アデイスマンの友達で、バーネルと同じに、スベクテイタやガーデイアンなどの紙に寄稿してゐた。アデイスマンの死を悼んだ "An Elegy on the Death of Mr. Addison" が最も知られてゐる。又カドウガン伯を悼んだ "On the Death of the Earl of Cadogan" など、思索及び諧調の兩方面から佳作と認められてゐる。けれども最長篇の「ケンシントン・ガートン」"Kensington Garden" も、バラッドの「コリンとルシー」"Colin and Lucy" も、今日でははかばかしく平凡な詩として看過されてゐる。

サミュエル・ガース (Samuel Garth) は千六百六十一年にヨークシャーのウエスト・ライディンで生れて、劍橋大學から、リーデン (Leiden) 大學に移つて醫學を修め、The Royal college of Physicians の名譽會員に選ばれた。窮民のために無料診療所の設置を提案したが、ランダンの藥劑師達から揉消運動を受け、折角の企畫も挫折した。そこで、一篇の諷刺詩を公にして自個の立場を

辯じたものが「診療所」"The Dispensary"である。しかしセンツペリの言ふやうに、彫琢洗練されたヒーロイック・カブリットの一例と見るの外、舊型を墨守した、單調でかつ無趣味な詩である。

アラン・ラムシ (Allan Ramsay) はボウブ時代の代表的蘇國詩人である。千六百八十六年にラナークシャー (Lanarkshire) に生れ、クロフアット (Crawford) の村の小學で教育を受けたのみで、假髮職人から叩きあげて一本立となり、片手間にはやり歌など、そのまゝに取つたり、真似たりして、印刷に附し賣つたのが元で、やがて本屋に商賣換をし、千六百十六年に "Christ's Kirk upon the Green" といふ詩を出版して大受けを受けた。三章からなる此詩の第一章は、ジェイムズ一世が書き捨てたものと言はれてゐる。次第に文學者達との交際が廣くなり、此詩と千七百二十五年に出版した「おとなしい牧羊者」"The Gentle Shepherd" とが、ラムシの傑作である。「おとなしい牧羊者」は牧羊者の日常の内輪ごとや、單純な戀物語を蘇國の方言を用ひて、調子のよいヒーロイック・カブリットで綴た牧歌劇で、エディンバラで上演されたこともある。生存競争の激しい俗世間を離れて比較的無事平穩な田園生活の幸福に浸つてゐる人達が、その對話の中に生き生きと描かれてゐる。殊に劇中に織り込まれた Song や Chorus には快心の諧謔が微笑を誘ふ。例へば "Patie and Peggy" の對話の如き、二人の純真な愛情を語り合つた末、抱擁と接吻を許された Patie が、晴れて Peggy を妻と呼ぶ日の一日も早かれと祈る心を "Chorus" に示してゐる。

Sun, gallop down the westing skies,
 Gang soon to bed, and quickly rise ;
 O lash your steeds, post time away,
 And haste about our bridal day ;
 And if ye're wearied, honest light,
 Sleep, gin ye like a week that night.

又 Peggy に對する崇拜の憧憬を歌つた一節入行四節から成る“Song”の始めと終りの二節を引けば

My Peggy is a young thing,
 Just entered in her teens,
 Fair as the day, and sweet as May,
 Fair as the day, and always gay.
 My Peggy is a young thing,
 And I'm not very auld,
 Yet well I like to meet her at

The wauking of the fauld.

.....

My Peggy sings sae softly,
 When on my pipe I play,
 By a' the rest it is confest,—
 By a' the rest, that she sings best.
 My Peggy sings sae softly,
 And in her songs are tauld,
 With innocence, the wale o' sense,
 At wauking of the fauld.

(notes : — wauking of the fauld = the act of watching the sheepfold, about the end of summer, when the lambs were weaned and the ewes milked. the wale = the best. (by Kate M. Warren.)

片田舎だとして山里だとして、人の住むところに悲哀の伴はぬ筈はない。現代のギンズメン (W. W. Gi-

pson)氏などは、主として暗い、面白くない方面から牧羊者の生活を寫してゐるけれども、ラムジは主として楽しい、陽氣な方面から、その同じ生活を此詩に取扱つてゐる。而してそれが眞實の田園生活の半面であることは疑ひもないことである。ラムジが世を去つたその翌年に生れたロバート・バーンス (Robert Burns) は英文學史上の最も有名な田園詩人であるが、古來蘇國が産んだこの詩人よりもラムジの感化を蒙つた事實を忘れてはならない。又ラムジが蘇國傳來のはやり歌や抒情詩を丹念に集めて「茶卓雜錄」"The Tea-Table Miscellany" だの「常盤木」"The Evergreen" などの名稱を附けて出版した、その功績も没してはならないものである。彼自身の作物で名高いものは「麗はしき集ひ」"Fair Assembly" "黄髮の若衆" "The Yellow-haired Laddie" "パティの粉挽場の小娘" "The Lass o' Patie's Mill" "ちんちんロカキ" "Farewell to Lochabar" 等である。此等の抒情詩はブライア (Prior) の詩と一脉相通する處がある。ブライアがフランスのバリで上流社會の間に雄飛したやうに、ラムジはエディンバラで中流以下の社會の中に活躍した。嘗つて假髮職をやつて居た時分、友人達を狩り集めて呑氣俱樂部を組織し、その大將株に推されてゐた。一方は大學出の敏腕な外交家であつたが、一方は無教育の所謂職人風情の相違丈で、洒落快活、機智縦横の資質を有つてゐた點は一致してゐた。ブライアの詩の材料はお上品な教養のたつぷりある社會であつたが、ラムジの相手は牧羊者、乳搾女、農夫と言つたがさつもの、寄り集りであつた。然し教育があつてもなくつても

社交は社交である。それらの無教育な手合の心意氣、艶種を筆にした點に於て、ラムジの詩も一種の社交詩 (Vers de Societe) だと言ふ人もある。唯ブライア程豊かな想像を有たなかつたし、扱つた社會が社會丈に折々野卑に流れてゐるけれども、純眞な偽り氣のない詩的情操を有つてゐた詩人である。若しバーンズの詩を好く人であるならラムジの詩は必らず併せ讀むべきものであらう。

ラムジの眞實な人生の描寫は、その詩形こそドライデンやボウプを追蹤したけれども、從來古典主義の詩に求め得なかつたあるものを加へてゐる。ヤング (Young) やブレニア (Blair) を經てタムスン (Thomson) に至り、加へられたあるものの種類と範圍は次第に擴大されて、反古典主義、言ひ換ふれば浪漫主義の旗色は頗る鮮明になつて行つた。ヤングを説く前に、時代は少し溯るけれども、ボウプの知人であり、或意味に於てボウプの弟子の一人でありながら、浪漫主義に小さい石を一つ積み重ねた女性を一人記さねばならない。

レイデイ・キンチルシー (Lady Winchelsea) はサー・ウィリアム・キングスミル (Sir William King-smill) の娘で、本名はアン・フィンチ (Anne Finch) である。千六百六十年頃シドモントン (Sidmouton) に生れた。四代目のキンチルシー伯に嫁して、レイデイ・キンチルシーの名で知られてゐる。勿論道樂に詩を作つてゐたのであるが「夜の迷想」"A Nocturnal Reverie" 「夜啼鳥に與ふる」"To the Nightingale" 「立木」"The Tree" 「短慮に寄する歌」"An Ode to the Spleen" などの

時代の作物としては新味に充ちてゐる。殊に「夜の迷想」が名高い。ワーズワースが千八百十五年に出版したその詩集 *"Lyrical Ballads"* に添へた有名な論文に「レイディ・井ンチルシー」の「夜の迷想」とボウブの「井ンザの森」の中の一二節を除くと「失樂園」*"Paradise Lost"* と「四季の歌」*"Seasons"* の出版の間に来る時代の詩で、外部に表はれた自然の新しい像影は唯の一つもない」と言つたので、井ンチルシーの聲價が遽かに高くなつたのである。「夜の迷想」の中には梟や夜啼鳥の聲、通り雲、そよ吹く風、河心に映る月と、その岸の樹の葉の影が揺いでゐる姿、夜露に勢づいて頭を撞げた雑草、眠つたさうな櫻草、蒼白く見えるヂギタリス、漂つてゐる種々の香、散らばつた莖など、繊細緻密な觀察から更に進んで、放れ駒が悠々と牧場を徐かに歩んで来て、草を食ひ千切つて噓む音までも聴き洩らさない。羊や牝牛も心ゆくまでこの静寂の夜を領してゐるなど、ワーズワースが共鳴したのは當然である。

When the loosed horse now, as his pasture leads,
Comes slowly grazing thro' the adjoining meads,
Whose stealing pace and lengthened shade we fear,
Till torn-up forage in his teeth we hear;
When nibbling sheep at large pursue their food,

And unmolested kine rechew the cud;
When curlews cry beneath the village-walls,
And to her straggling brood the partridge calls;
Their short-lived jubilee the creatures keep,
Which but endures, whilst tyrant Man doth sleep.

一般に杓子定規に四角張つてゐた十八世紀初期の詩に、形こそボウブ一流のヒーロイック・カブリットであるけれども、斯うした自由な優美な詩が書かれたことは異數と言はねばならない。流石にボウブは井ンチルシーの詩に對して嘆賞の辭を惜しまなかつたけれど、一般文壇の注意を引かずに時代は過ぎ去つて、ワーズワースに至り始めて知己を見出したのであつた。井ンチルシーの詩で世に出たのはほんの一部分で、二つばかりの詩集が猶井ンチルシー家に草稿のまゝで残つて居るかも知れない。若しさうなら公にして欲しいとのエドモンド・ゴス氏の希望には至極同感である。

井ンチルシーが死んだ時分には未だ二十一歳の青年であつたロバート・ブレア (Robert Blair) は千六百九十九年にエディンバラに生れた。ハデイントンシア (Haddingtonshire) のアセルスタンフアード (Athelstanford) の教會の牧師であつたが、「墓」*"The Grave"* という一篇の長詩を四十五歳の時に出版して、沈滞した詩壇の革新者の一人になつた。「墓」は人生の行旅の、その目的はそ

れぞれ違つても、結局それらの旅客が皆邂逅はなければならない、集合地點である。(The appointed place of rendezvous, where all these travellers meet) と言ふことから筆を起して、墓の彼方の消息を知らなうとしたものである。説教壇から會聚に向つて、諄々と信仰の道を説く、僧侶らしい口吻が絶えず洩されてゐる。

If when men died, at once they ceased to be,
Returning to the barren womb of nothing,
Whence first they sprung, then might the wretch
That's weary of the world, and tired of life,
At once give each inquietude the slip,
By stealing out of being when he pleased,
And by what way, whether by hemp or steel.

然し未來といふものがあるなら、未來にどうなるといふ事が解つたら、死ぬと言ふことは怖しいことであると言ひ、殊に自殺に就いては力を罩めて諷めてゐる。どんなに苦しくらうと、憂からうと、最後まで生きて行くのが眞の勇者である。自殺者は臆病者であると言つてゐる。

Those only are the brave that keep their ground,

And keep it to the last. To run away
Is but a coward's trick. To run away
From this world's ills, that at the very worst
Will soon blow o'er, thinking to mend ourselves
By boldly venturing on a world unknown
And plunging headlong in the dark — 'tis mad.
No phrenzy half so desperate as this.

一章一句、遑遑な語法と嶄新な觀念に充たされてゐる。而して詩の形がミルトン以後永く顧られなかつた無韻律で綴られてゐる。ブレアは此詩を公にしてから三年経つて世を辭したが、死後百年餘りも人氣を失はなかつた。批評家の中には此詩の言葉扱を卑俗だと言ふ人もあるけれども、その簡裁な語句が却つて記憶に止められて、生命を保つてゐる。無韻律 (blankverse) を復活した詩人として、ヤング (Young) やタムソン (Thomson) と共に並び記されねばならない。

エトワード・ヤング (Edward Young) はブレアに較ぶると深みがあり、又述作も遙かに多い。ヤングは千六百八十四年ハンブシャーのアバム (Upham) に生れ、オクスフォード大學を出て、千七百十九年には法學博士の學位を取り、外交家として立つたが失敗に終つた。四十三歳の時監督教會の僧

侶たる資格を得て僧職に就き、三年の後ハートフアドシアのウエルン（Welwyn）の牧師となつて其處に一生を過したが、家庭の不幸が打續き、氣を腐らし、性來ひねくれ氣味のあつた彼は、病的と思はれるほど憂鬱になつてしまつた。「夜の思念」：“*Night Thoughts*”は六十歳に間もない頃出版したものであるが、未だ三十歳にならない時分に書いた「最後の日」：“*The Last Day*”にも、世界の破滅の怖ろしい光景を描いてその憂鬱の傾向を示してゐる。

The valleys yawn, the troubled ocean roar

And break the bondage of his wonted shore;

A Sanguine stain the silver moon o'erspread;

Darkness the circle of the sun invade;

From inmost Heaven incessant thunders roll

And the strong echo bound from pole to pole.

此詩にはボウプの感化が、著しくその詩形の上にも認められるが、佳作である。それから六年後の千七百十九年に現はれた「ジョウプ書のパラフレイズ」：“*The Paraphrase of the Book of Job*”も「最後の日」と同じ傑作の一つで、佳句麗章に富んでゐる。千七百二十五年から千七百二十八年にかけて、「普遍的愛慾」：“*The Universal Passion*”といふ、名譽心に關する諷刺詩を書いたが、詩形も内容もボ

ウプを追躰したまでであつた。然るに、タムスン「四季の歌」の、その「冬」の巻が公にされてから十五年餘り経過した、千七百四十二年に、ヤングは從來探つて來た押韻を悉皆捨て、無韻律で「夜の思念」を梓に上せた。「夜の思念」は九夜から成つてゐて、生とか死とか、乃至不滅とか言ふやうな嚴肅な問題を捕へて、瞑想に耽つたものである。

Life glides away, Lorenzo, like a brook;

For ever changing, unperceived the change.

In the same brook none ever bathed him twice,

To the same life none ever twice awake.

We call the brook the same; the same we think

Our life, though still more rapid in its flow.

「行く川の流れば絶えずしてしかも元の水にあらず、よごみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しく止まることなし。世の中にある人と住家とまたかくの如し」と喝破した哲學者が一人日本にもあつた。須臾に變り、刹那に轉ずる生の流は、行く川のそれよりも遙に迅速であるのに人間は氣がつかない。之は五夜の點想の一部であるが、*All men think all men mortal but themselves.* とは全くの真理である。數多の友達の死に據つて起された沈思 “*The Death of Friends*” は「夜の思念」

中でも殊に名高いものである。友達に死なれるたんびに、虚榮の翼の羽毛を抜かれて、心萎び、戀て自身の死の前兆に氣勢を挫かれ、高くは翔り得ず、地とすれすれに飛んで、その土を搔きおこし、墓の主となり終れば、厄介物が一人丈減つただけのことになるのであるとは、何といふ怖ろしい考であらう。

Each friend by fate snatched from us is a plume,
Pluck'd from the wing of human vanity,
Which makes us stoop from our aerial heights
And damp'd with omen of our own decease,
On drooping pinions of ambition lower'd,
Just skim Earth's surface, ere we break it up
O'er putrid earth to scratch a little dust
And save the world a nuisance.....

明日は明日は一寸延ばしに思ひ立たずに居ると、障りがつぎつぎに湧いて来て、かねての希望も企畫も齟齬つて終ふ。人間に纏はる不祥事の、そのごんづまりの死と言ふ奴が、何時襲つて來ないものでもないと言ふことは、最初の夜の默想に斯う記されてゐる。

Beware, Lorenzo, a slow sudden death.
How dreadful that deliberate surprise!
Be wise to-day; 'tis madness to defer;
Next day the fatal precedent will plead;
Thus on, till wisdom is push'd out of life.
Procrastination is the thief of time.

三十にして起ち、四十にして惑はずとは、支那の聖人の教へであるけれども、因循姑息に安じて歲月を過すうちに、その三十四十になつて臍を噬むばかりでなく、何一つ成し遂げえずして死んで終はねばならぬ。

..... When young indeed
In full content we sometimes nobly rest,
Unanxious for ourselves; and wish,
As duteous sons, our fathers were more wise.
At thirty man suspects himself a fool,
Know it at forty and reforms his plan;

At fifty chides his infamous delay,
 Pushes his prudent purpose to resolve;
 In all the magnanimity of thought
 Resolves and re-resolves, then dies the same.

人生の行旅を説いても、希望や復活を歌つても、死の影を離れ得ない。陰鬱の人に據つて、闇の夜に行はれた回顧であり、静思であるからは、詩全體に陰鬱の氣分が漲つてゐるのは當然であるが、絶えず現はれる華麗な詞語と對句が深い印象を刻むのは、暗い思索を明るい修辭で補つたからであらう。丁度レンブラントの畫の明暗が畫全體の感じを強めしめてゐるのと同様である。宗教家や哲學者はその警句の多い詩の内容に心を引かれるであらうが、詩の觀照に志す人は内容と共に外形を見逃がしてはならない。多少道學者氣取りの勿體ぶつた節もあるけれども、無韻律の運びや、表現の豊かさや、鮮やかな想像の牙えを見せて、折節はミルトンの詩風を偲ばしめる章句に乏しくない。然しヤングの作物にはむらが多い。一篇の中にすら出來のよい處と悪いところとある。その出來の悪いものは甚しく悪く、全く價値のないものであると言はれてゐる。ヤングの鑑識を疑ふものがあるのはその點である。されば、「ボウプに寄する尺牘」：“Epistles to Pope”や「宗教の力」：“The Force of Religion”の外二三の悲劇などは、價値の極めて妙ないものであらう。Warner氏の“World's

Best Literature”に於て his poetry is only to be read now with any pleasure in judicious selections. と書いてある。ヤングは千七百六十五年に物故したが、ヤングより後に生れ、ヤングに先立つて世を辭しながら、英詩の浪漫的運動に、ブレアよりもヤングよりも、與かつて力のあつた詩人はタムスンであるが、これはジョンソン時代に入れて説く。

尙詩の形や並びに扱つた材料から、浪漫派と見らるべき二三の詩人を記しておく。

井リアム・サマウヰル (William Somerville) (1677—1742) はウォリックシャーに生れ、井ンチスタで教育を受け、エドストーン (Edston) の先祖傳來の邸宅の主となり、田舎の紳士として有福に世を送つたが、晩年に詩作に従事し、「獵」：“The Chase”、“ホビノル”：“Hobbinol”その他「折にふれたる」：“Occasional Poems”などを公にした。中でも「獵」は獵犬の小舎、獵犬の病氣の種類、獵犬の育て方、馴らし方など四卷に別つて歌つたもので、總て自身の經驗から來たものである。興味をそそるし、詩形は無韻律を採用つてゐることを注意せねばならない。

マシユー・グリーン (Matthew Green) (1696—1737) は税關の書記をして、獨身で呑氣に一生を過した人である。作物としては「岩屋」：“The Grotto”と「短慮」：“The Spleen”の二篇が知られてゐる。而して後者が最も名高く、教育、宗教、法律、政治、哲學、文學などの各方面に亘つた諷刺であるが、作家自身が性來快活で不平のなかつた丈に、スヰフトの如き毒々しいものでなく、浮

やかに軽く筆を運んでゐるので氣持よく讀まれる。

To cure the mind's wrong bias, Spleen,

Some recommend the bowing-green ;

Some, hilly walks ; all, exercise ;

Fling but a stone, the giant dies.

Laugh and be well.

と言つた調子である。結尾に近く田園の描寫があるが、井ンチルシーの如く、周到な自然の觀察者であり、又嘆賞者であつた。但し詩形は八音節の對句であるので、恰も古典主義と浪漫主義を歩み合つた形があつた。

ジョン・ダイナー (John Dyer) (1699?—1758) はカーマズンシャー (Carmathenshire) のアバグラスニ (Aberglasney) に生れ、ウエストミンスタで教育を受けた。一時リチャドスンと言ふ畫家に就いて、刷毛を握つたこともある。特に風景畫に興味を有つてゐたので、その傑作の「グロンガの丘」"Grongar Hill" にその畫家らしい感じが出てゐる。

Old castles on the cliffs arise,

Proudly towering in the skies !

Rushing from the woods, the spires
Seem from hence ascending fires !

.....

Below me trees unnumbered rise,

Beautiful in various dyes :

The gloomy pine, the poplar blue,

The yellow beech, the sable yew,

The slender fir that taper grows,

The sturdy oak with broad spread boughs.

And beyond the purple grove,

Haunt of Phyllis, queen of love !

Gaudy as the opening dawn,

Lies a long and level lawn,

On which a dark hill, steep and high,

Holds and charms the wandering eye.

「グロンガの丘」は「田舎の散歩」“*The Country Walk*”と共に、タムソンの「四季の歌」の「冬」の巻が公にされた年の千七百二十六年に出版された。單調ではあるけれども、なだらかな旋律を以て自然を巨細に寫したものである。死ぬ一年前の千七百五十七年に著はした「羊毛」“*The Fleece*”は、農牧者の内外の生活と共に、羊を飼育する上の細かな注意が記されてゐる。剪む季節が来て、先づ延び汚れた羊毛を洗ふ爲に、羊の群を清流に追ひ込む仕事を書くにしても、常に自然の觀察を忘れない。第一巻から次の數行を引用して見る。

..... If verdant elder spreads
 Her silver flowers ; if humble daisies yield
 To yellow crow-foot, and luxuriant grass,
 Gay shearing-time approaches. First, however,
 Drive to the double fold, upon the brim
 Of a clear river, gently drive the flock,
 And plunge them one by one into the flood :

 The sturdy rustic, in the middle wave,

Awaits to seize him rising ; one arm bears
 His lifted head above the limpid stream,
 While full clammy fleece the other laves
 Around, laborious, with repeated toil ;
 And then resigns him to the sunny bank,
 Where, bleating loud, he shakes his dripping locks.

「羊毛」は既に、千七百四十年に書いた「ローマの廢墟」“*The Ruins of Rome*”なほと同様に教訓的なものである。ジョンソンは羊毛などが詩題になるものでないと冷評したけれども、ワーズワースやグレイはダイアの着想や詩體を讚賞した。「羊毛」はタムソンの感化を蒙つた作であることは拒むことは出来ないけれども、ミルトンの熱心な研究者であつたから、その無韻律の如きは寧ろミルトンに負ふ處が多かつたであらう。

ジョン・バイロム (John Byrom) (1692—1763) は Manchester 生れの人である。二卷の詩がマシエスタで出版になつたのは、詩人の死後十年經過つた千七百七十三年である。ケンブリッヂで教育を受け、同校のフェロウに推薦されたが、ベントリ博士 (Dr. Bentley) の娘のジョアン (Joan) と戀に落ち、フイービ (Phebe) の名の下に彼女を謳歌した一篇の「牧羊歌」“*Pastoral*”が一番

名高い。晩年には開業醫となり、又速記術を發明して特許を受けた。宗教や哲學に關する書物を耽讀し、宗教的神秘學者井リアム・ロウ（William Law）に師事したが、同系統の學者ジエイコック・ペーメン（Jacob Boehmen）を研究する爲にドイツ語を學習した。而してローの意見をヒロウイック・カブリットで綴つたものが「熱狂」：Enthusiasmであつた。詩の大半は宗教的なものであつたが、牧羊歌、尺牘、道話、物語、警句など、詩の種類は随分多かつた。

第三篇　　デジョンスン時代

第一章　　詩歌の自然主義と浪漫主義の勃興

第一節　　技巧の殿堂から自然の靈廟の禮讚

謂はゞ機械で物を作るやうにヒロウイック・カブリットの型に倣まつた、而して批評をしたり、諷刺をしたり、道徳を真向に振り翳したポウブ一流の詩は、その人によつて多少の巧拙はあつても、ポウブを凌ぐほどのものは一人もなかつた。精緻な對句や深酷な警句も鼻について來た。行き詰まつた處に新しい試が生れる。板塀や煉瓦の壁を取り繞らした庭園の築山や泉水や、スインメトリックな花壇に、濃艶の美を誇る紅紫の眺に厭きた眼は、自ら漂渺の海、突兀の山、高原、平野、飛瀑、流泉、森林、谿谷の、或は雄大な、或は廣濶な、或は幽邃な、或は清新なその森羅萬象の窮りなき變化を求め、四角四面な、甘味のない陳腐な道學の説法を聽聞するよりも、思想の自由な、趣味の豊かな、嶄新なロマンスの物語に耳を傾けるやうになる。ポウブも「井ンザの森」に極めて僅少ではあつたが自然の描寫に筆をつけてゐた。井ンチルシーは「夜の迷想」に、更に細かな自然の觀察を遂げてゐた。詩に於ける自然主義とは、自然の解釋及び描寫を詩を以て示したものである。井ンチルシーの詩にその

曙光を認めしめてゐるけれども、その曙の空をくつくりと赤く色取つたのはタムスン (Thomson) であつて、バーンズ (Burns) に至つて、日はほがらかに天に沖した趣がある。ロマンスの方面ではパーシ (Percy) の「古詩拾遺」"Reliques of Ancient English Poetry" が導火となり、スコットの物語詩にその精華を發揮したのであつた。然しパーシもタムスンも古典主義、技巧主義の羈絆を成して新しい詩風を作興した點に於ては一致してゐる。古典主義といへども、ボウプ及びボウプ一派の詩人と共に滅びたのではなく、イラズマス・ダーウィン (Erasmus Darwin) に至るまでは命脈を保持してゐたから、パーシもタムスンも反古典主義運動の開始者として、古典主義と對立する浪漫主義の詩人と見てゐるものもある。斷つておきたいのは、反古典主義即ち浪漫的運動は、タムスンやパーシが従來影も形もなかつたものを全く新に起したのではなかつた。シェイクスピアを頭領とした彼イリザバス朝は、詩に於ける浪漫的時代であつた。シェイクスピアは自然の秘蔵息子で、自然の門を開くべき黄金の鍵を授かり、事實その自然の靈廟の奥深く立ち入つて、神秘の帷を褰げ得た詩人であつた。然るにハミルトン・タムスン (Hamilton Thomson) 氏の言ふやうに、ウォラ (Waller)、カウリ (Cowley)、ドライデン、ボウプ、と言ふ順序で、イリザバス朝の詩の浪漫的時代とは遠ざかり、シェイクスピアの標準と大分かけ離れた詩の法則を建設した。自然の要求を排けたわけではなかつたが、自分達の爲に造つた、技巧的遺境以外のものには全く盲目となつて終

つたのであつた。浪漫的運動は畢竟技巧の宮殿の禮讚から、自然の靈廟の跪拜に復返せんとしたものであるけれども、偉大な勢力を以て、十八世紀を風靡した古典主義の影響を全然脱却することは困難であつた。タムスンの詩といへども、猶その字句の上に、或は比喻の上に、ボウプの感化を残してゐる。従つて、タムスン以後暫らくは、古典主義と浪漫主義の中間を徘徊する詩人が決して少くはなかつたのである。

第二節 チェイムズ・タムスンと自然界

チェイムズ・タムスン (James Thomson) は千七百年にロクスブラシャー (Roxburghshire) のエドナム (Ednam) に生れ、四十八歳で死んだ人であるから、ドライデン時代に組み入れてよいのであるけれども、前述の如く浪漫的運動の開始者であり、その運動の繼承者は悉くジョンソン時代に屬する人であるために、浪漫派の詩人を一わたり扱ふ上の便宜上、タムスンから説き起したい。

タムスンの父親はエドナムの教會の牧師であつた。エディンバラ大學の學生時代の話であるが、聖詩の解釋の試験のあつたとき、タムスンの答案の文章が餘り裝飾が多かつた爲め、神學の教授から、一般の人民に理解の出來ないやうな言葉は使ふものでないと、叱られたことがあるさうである。それで神學に嫌氣がさしたのもあるまいけれども、専門の神學には餘り興味を有つてゐなかつたのは事實であるらしい。學校を出て暫時ある貴族の家庭教師をしてゐたこともある。その家

庭を廢めて、金があるでもなく、友達も少かつたし、前途の見込が立たず、ぶらぶらしてゐた時分、母を忘つて頻りに鬱ぎ込んでゐた。折も折、冬枯のうら寂さが身に沁みて歌つた詩が、"Winter"で、千七百二十六年に出版になつた。可成勢力のあつた文學者がランダンの珈琲店の集りの折、此詩を話題に載せたのが元で、タムソンの名は忽ち世に知られることになつたといふことである。その"Winter"の中に雪景色を斯う歌つてゐる。

The keener tempests come : and fuming dun
 From all the livid east, or piercing north,
 Thick clouds ascend — in whose capacious womb
 A vapoury deluge lies, to snow congealed.
 Heavy they roll their fleecy world along ;
 And the sky saddens with the gathered storm.
 Through the hushed air the whitening shower descends,
 At first thin wavering ; till at last the flakes
 Fall broad, and wide, and fast, dimming the day
 With a continual flow. The cherished fields

Put on their winter-robe of purest white.

餌に窮した更知鳥が家の中まで入つて来て、食卓に近き麴の屑をねだりがましげなものも、冬らしい心地がする。

..... One alone,
 The redbreast, sacred to the household gods,
 Wisely regretful of the embroiling sky,
 In joyless fields, and thorny thickets leaves
 His shivering mates, and pays to trusted man
 His annual visit. Half afraid he first
 Against the window beats ; then, brisk, alights
 On the warm hearth ; then, hopping o'er the floor,
 Eyes all the smiling family askance,
 And pecks, and starts, and wonders where he is —
 Till, more familiar grown, the table crumbs
 Attract his slender feet.

或は雪に埋まつて死んだ農牧夫の妻や子が、永久飯つて来ないその人を心待に待つてゐる、悲哀を叙したところもある。冬の巻に成功してその翌年に「Summer」を、又その翌年に「Spring」を、更に一年置いた千七百三十年に「Autumn」を出し「四季の歌」*The Seasons*の完結を見た。夏の巻の羊を洗ふ牧羊者の仕事を叙した條りも名高いものである。

The meek-eyed morn appears, mother of dews,

At first faint gleaming in the dappled east;

Till far o'er ether spreads the widening glow,

And, from before the lustre of her face,

White break the clouds away. With quickened step

Brown night retires. Young day pours in apace,

And opens all the lawny prospect wide.

The dripping rock, the mountain's misty top,

Swell on the sight, and brighten with the dawn.

Roused by the cock, the soon-clad shepherd leaves

His mossy cottage, where with peace he dwells;

And from the crowded fold, in order, drives
His flock to taste the verdure of the morn.

是は至極平和な田園の朝の景色であるが、冬の巻に農牧夫の悲劇を歌つたやうに、彼熱帯の砂漠を旅行する隊商が俄に旋風に襲はれ、熱砂の丘の下に生埋になつて終ふ。一行の到着を空しく待ち侘びてゐる都市を簡潔に斯う叙してゐる。

..... In Cairo's crowded streets

Impatient merchant, wondering, waits in vain,

And Mecca saddens at the long delay.

風は全く風ぎて、どんよりと曇つた空模様、雨を待ち顔なのは獨り人間ばかりではない。家畜も鳥類も、山も谿も森も、黙々と静まつてゐると、ぼつりぼつり水溜りに波紋を描いて、しとしと降り出す「春」の雨や、ごしやぶりが續いて、田畑も牧場も水浸り、濠は溢れ、河水は渦を捲いて押し流し、一年の苦勞が水の泡となつた收穫は言ふまでもなく、家畜も、農家も東の間に失つた氣の毒な人達は難を高地に避けるその「秋」の洪水や

Fled to some eminence, the husbandman,
Helpless, beholds the miserable wreck

Driving a lor g.

凡て自然の描寫と絡んで、劇的な人事を背景としてゐるし、又此作家が劇にも二三筆を染めてゐる丈に、ドラマティックな生々とした筆致を見せて、讀者に甚深の感動を興へる。是等の感情的性質の勝つた描寫は、ワーズワースやバーンズを読むとき、絶えず逢着するものであるけれども、タムスン以前には見ることの出来なかつたものである。「髮盗人」のやうな理智的な詩に慣れて居た人の耳には、全く空谷の聲音を聞いたやうな感じがしたに相違ない。技巧派の詩人達が詩にならうとは思はなかつた自然、賤んで顧みもしなかつた平民の生活が、斯うしてタムスンに據つて立派な詩にされたのである。

「四季の歌」の外に「サー・アイザック・ニュートンの靈を祀りて」"Ode to the Memory of Sir Isaac Newton" や「自然を讚美するの歌」"Hymn to Nature" 及「自由」"Liberty" などあるけれども、高い價值のあるものではない。又「ソホニスバ」"Sophonisba" 「アガメムノン」"Agamemnon" 「タンクレッドとシギスムンダ」"Tancred and Sigismunda" 「アルフリッド」"Alfred" など戯曲も書いたけれども、寧ろ失敗の作であつた。唯「アルフリッド」の中にある "Rule, Britannia" は人口に膾炙する高名の短歌である。タムスンの晩年は幸福であつた。親切で寛大な彼として、一人の敵も作らなかつたのは怪しむに足らない。リーワード諸島の監督長となり、死ぬまでその榮職にあつ

たが、テムズ河の遠航を企て、引き込んだ風邪がこじれて、千七百四十八年に死んだけれども、その同じ年に出版した一つの詩は「四季の歌」よりも雕琢を経た美しいものであつた。夢現の國 (Land of Drowshead) の魔法使ひ遊惰 (Indolence) の爲に、その城中に捕虜となつてゐるものごもを、勤勉 (Industry) と言ふ武士が救ひ出す比喩詩であつて、「遊惰の城」"The Castle of Indolence" と名付けたものである。スペンサーの「仙女王」"The Faerie Queene" から思ひ付いたものであり、又詩形も Spenserian Stanza をそのまゝに用ゐてゐる。既に述べた通り作家自身が憂鬱の氣味があり、又何をするにも億劫がる怠惰の癖があつたので、此詩はしつくりと詩人の性格に合つてゐた。歌ひ出しかからして、遊惰の城やその城を取り巻く睡さうな空氣の中へ讀者を引き入れてゆく。

Joined to the prattle of the purling rills

Were heard the lowing herds along the vale,

And flocks loud bleating from the distant hills,

And vacant shepherds piping in the dale;

And now and then, sweet Philomel would wail,

Or stock-doves plain amid the forest deep,

That drowsy rustled to the sighing gale;

And still a coil the grasshopper did keep ;
Yet all these sounds ybient inclined all to sleep.

.....

A pleasing land of drowsihead it was,

Of dreams that wave before the half-shut eye ;

And of gay castles in the clouds that pass,

For ever flushing round a summer sky ;

There eke the soft delights, that witchingly

Instill a wanton sweetness through the breast,

And the calm pleasures always hovered nigh ;

But whate'er smacked of noyance, or unrest,

Was far, far off expelled from this delicious nest.

比類なき富贍な用語と、夢幻の如き情緒に織り交せて、自個及び數多の友達を描いた諧謔は、スペンサを追躓して、更にスペンサを離れたタムスン獨特の新境地を開拓したものである。而も折節官能に訴ふる微妙な魅力を示してゐる點は、甚しくキーツの詩風を偲ばしめる。「四季の歌」に採用

した無韻律は豊かに調つたものであるけれども、猶幾分斧鑿の跡を止めて、到底ミルトンの雄渾壯重の格調に及ぶべくもない。然るに「遊隋の城」に至りては、詩形も脚色もスペンサに倣ひながら、スペンサに求め難きあるものを加へて、スペンサといへども多くタムスンに勝るところはないと言ひ得るであらう。絶えず自然を凝視めて、自然から教を受けた *Deism* は、タムスンがワーズワース始めシエリやキーツに印した感化であるが、單に英國ばかりでない、彼「四季の歌」がフランスやドイツやオランダやイタリの諸國の國語に翻譯されたのを見ると、その自然神教禮讃の影響の範圍は極めて廣汎なものであつたことが理解される。

第三節 井リアム・シエンストウンとウイリアム・

コリンズの抒情詩

タムスンが「遊隋の城」に用ゐた同じスペンシリアン・スタンザを以て、美しい詩を書いた詩人がもう一人ある。それは井リアム・シエンストウン (*William Shenstone*) で、千七百十四年シュロップシャーのヘイリス・オウイン (*Hales Owen*) に近う *Leasowes* に生れ、オクスフォードのペンブロウク大學を出た人である。タムスンの「遊隋の城」よりは六年前に「女教員」“*The Schoolmistress*”と言ふ、半道化詩を書いた。

A russet stole was o'er her shoulders thrown ;

A russet kirtle fenced the nipping air ;

"Twas simple russet, but it was her own ;

"Twas her own country bred the frock so fair !

"Twas her own labour did the fleece prepare ;

And, sooth to say, her pupils ranged around,

Through pious awe, did term it passing rare ;

For they in gaping wonderment abound,

And think no doubt, she been the greatest wight on ground.

詩形は古體であり、用語も又古風であるけれども、三十五餘りの Stanzas に村の所謂お師匠様の性格や住居や職業を面白く書いてゐる。何處かゴッドマイスマス (Goldsmith) の面影のある詩人である。シエンストウンは風致園藝 (landscape gardening) 所謂庭造りの上に在來の型を破つた新しい試をなさうと企てたのであり、又獨身生活の謳歌者であつた。「ヘンリーの宿屋にて書ける」"Written in an Inn at Henley" に宿屋住居の氣樂さを斯う歌つてゐる。

To thee, fair freedom ! I retire

From flatters, cards, and dice, and din ;

Nor art thou found in mansions higher

Than the low cot or humble inn.

.....

Here, waiter, take my sordid ore,

Which lacqueys else might hope to win !

It buys, what courts have not in store,

It buys me — freedom at an inn.

「女教師」を著した翌年に「哀歌、小歌、及び牧羊詩」"Elegies ; Songs, and Pastoral Ballads" を出したが、その中の Pastoral Ballad は一種の三脚律 (anapaest) で作られた軽い調子の好い詩である。僅少ながらも、その所有の地所を住み心地の好いやうに、手入れをすることを仕事にしてゐたその高雅な趣味は、「趣味の進歩」"The Progress of Taste" 中の "Much Taste and Small Estate" に表明されてゐる。孰れも、より大なる詩人ではあつたが、シエンストウンはクウパー (Cowper) に詩の手解きをなし、グレイ (Gray) やゴールドスミス (Goldsmith) の面影を偲ばせ、フード (Hood) やワーズワース (Wordsworth) の前驅を務めた詩壇の革進者の一人として記さるべき詩人である。彼は千七百六十三年に死んで故郷リーソウズ (Leasowes) の土となつた。

井リアム・コリンズ (William Collins) は浪漫派の詩人の中でも、最も詩的天才を有つてゐた一人である。詩法の完全な點から言つたならば、グレイと伯仲の間にあるであらうし、美の眞味を知つてゐる上から見れば、キーツに甚しく劣つてはゐない。彼はチチスタ (Chichester) の帽子屋の子に生れ、井ンチスタ大學とオクスファードのモードリン大學で教育を受けた。體質は虚弱であつたが絶えず思索に耽り、明暮書物を手離したことがなかつた。二十一歳の時出版した "*Persian Eclogues*" の如き四年も前に書いたもので、普通の牧羊歌と違ひ、場面を東洋に移して、一望荒寥の砂漠を旅行する駱駝追ひの孤獨な生活や、危難を歌つたものである。鮮麗な形容と微妙な旋律とは、抒情詩人としての彼の未來を語つてゐたけれども、當時の讀書社會の注目を引くには至らなかつた。作家として世に立たうと、オクスファードを去つてランダムに出た時の彼の胸中は、大きな抱負と計畫に溢れてゐたのであつたけれども、元來起想と實行の並行し難いのが世の常である。希望が大きかつた丈に失望も又大きかつた。それでも隱忍持久の途に出たなら、一角の成功は收め得たのであつたが、惜しいことには捨鉢氣味に放蕩三昧に身を持ち崩して終つた。千七百四十六年と言へば彼の二十五歳の時であるが、"*Odes, Descriptive and Allegorical*" と言ふ詩集を著したが、その抒情の熱情と共に諧暢の韻律と精緻の形容とは愈々天分を發揮したけれども、猶世の認むるところとならなかつた。"*Ode to Evening*" の如き「暮は徐に耳に觸れ、黄昏そのものの次第に近づき來る感じがする」と

ハヅリット (Hazlitt) が評したはりの絶唱である。十三節の中の三節を採る。

Now air is hushed, save where the weak-eyed bat
With short, shrill shriek, flits by on leathern wing;
Or where the beetle winds
His small but sullen horn.

As oft he rises 'midst the twilight path,
Against the pilgrim borne in heedless hum:
Now teach me, maid composed,
To breathe some softened strain,

Whose numbers, stealing through thy darkening vale,
May, not unseemly, with its stillness suit,
As, musing slow, I hail
Thy genial loved return!

グレイの "The Elegy" は技巧と情味の二點に於て完全無缺の哀歌の名什であることは誰も知る
 ところであるけれども、若しグレイを單なる抒情詩人として、コリンズに比較したなら、グレイは
 コリンズの脚下に跪かねばならないとまで、スフィンバーンは激賞してゐる。此詩の眞價は現今こそ具
 眼者の批評に依つて認められたけれども、認められなかつた當時の彼の憤りと惱みの甚しいもので
 あつたことは、賣れ残つた詩集を一部も餘さず書肆より買ひ戻し、盡く火中に投じて焼いて失つた
 を言ふのでも推測される。

"Ode written in 1746" など、八音節の對句と、擬人とに於て詩形は新しくはないけれども、微妙
 な想像と共に、黄金の板に珠を轉ばすやうな繊細な韻律の技巧を認めしめる。

How sleep the brave who sink to rest
 By all their country's wishes blest !
 When spring, with dewy fingers cold,
 Returns to deck their hallowed mould,
 She there shall dress a sweeter sod
 Than fancy's feet have ever trod.

By fairy hands their knell is rung ;
 By forms unseen their dirge is sung ;
 There honour comes, pilgrim gray,
 To bless the turf that wraps their clay ;
 And freedom shall awhile repair,
 To dwell a weeping hermit there !

忿怒、希望、憂鬱、快活、喜悅、憐愍、嫉妬、愛慾など例の活喻によつて情癖の變化を歌つた
 "The Passions" の如き英國抒情詩中の白眉であつて、"Ode to Evening" と並び稱せられてゐる。
 黄昏の歌に若しグレイの面影を見ると言ふなら、「情癖」にミルトンの反響を聴かないわけにいか
 ない。大き過ぎる晝布の隅々まで刷毛を届かせようとした爲に、複雑に失し且つ思想の連絡が断た
 れてゐると言ふけれども、自由自在な詩形と巧妙な旋律の變化とはドライデンの「アリグザンダ
 饗宴」に比肩し得るものであらう。血色の美しい女神の快活 (Cheerfulness) が弓を脊負ひ、朝露
 の玉で飾つた高靴を穿き、勇しい一曲を吹くと、聴き惚れて、柏の冠りつけた女神達や、瞳の淨ら
 かなその女王や、半分毛物の山男、森林の子供達が、緑深い小徑から覗き見をしてゐる。葡萄の冠を
 被つた喜悅 (Joy) が胡弓を取つて之に應ずる。

They would have thought who heard the strain

They saw, in Tempe's vale, her native maids,

Amidst the festal sounding shades,

To some unwearied minstrel dancing,

While, as his flying fingers kissed the strings,

Love framed with Mirth a gay fantastic round :

Loose were her tresses seen, her zone unbound ;

And he, amidst his frolic play,

As if he would the charming air repay,

Shook thousand odours from his dewy wings.

“Ode to Evening” がやうであるが、此詩からもコロ（Corot）やルソー（Rousseau）などの感じの好い風景畫から来る印象を刻みつけられる。自然に直面してその美を捕捉し得たと同時に彼の心の眼は更に美しきものを見て、影の如く幻の如くに自然の中に動かしめてゐるなど、シェリ（Shelley）に似てゐると言ふ人もある。猶「自由」を歌つた“Ode to Liberty”やスコットランドの「山國の迷信」を歌つた“Ode on the Superstitions of the Highlands of Scotland”や、或は「平和」

“Ode to Peace” 或は「單純」“Ode to Simplicity” 或は「憐密」“Ode to Pity” 或は「恐怖」“Ode to Fear” を歌へる Odes の一つとして吟誦に價せぬものはない。「シンベリン」を引ぶ歌「Dirge to Cymbeline」 「タムスン」を悼む歌「Ode on the Death of Thomson」 「サー・トマス・ハンマ」に與ふる尺牘「Epistle to Sir Thomas Hamner」 など知られてゐる。天才は狂氣の字義通に、コリンズは晩年に真物の狂人になつて終つた。年と共に異常な想像の光は失はれて意氣沮喪し、次第に憂鬱になり、調子が全く變つたので、故郷に皈つて、妹の看護を受けてゐたが、音樂に對しては驚くほど鋭い耳を有ち、かつ好きであつたにも拘らず、オーガンが莫迦に嫌になり、近所の寺で鳴らすその響を聴くと、さも苦しさに唸聲を擧げるのが常であつたさうである。狂氣は遂に恢復せず、千七百五十九年チチスタの土と化して終つた。

コリンズの「黄昏の歌」の彼の蝙蝠がききと鳴いて空を掠め、甲蟲がぶんぶん羽音を立てる静かな夕を考へると、直に他の一つの極めて名高い歌の同じ場面の聯想を呼ぶ。その他の一の歌の作家はグレイである。

第四節 トマス・グレイと哀歌

トマス・グレイ（Thomas Gray）はランダンの金貸しの子で千七百十六年の十二月に生れた。父はその職業の人に有り勝な氣性の烈しい、因業な男であつたが、母は辛抱強い心の練れた婦人で、

良人にも子供にも優しく、グレイがイートン (Eton) から、ケンブリヂのピーターハウス (Peter-house) に進むまでには、どの位母のお蔭を蒙つたか知れなかつた。學位は取らずに學校を去り、友人のホレイス・ウォルポール (Horace Walpole) と一緒に三年餘り大陸を旅行し、千七百四十一年年母と別居してケンブリッチに住居を構へ、嘗つて法律を少し調べてゐたこともあつたが、別に是と言ふ職を求めず、拉典語に精通して居た爲め、二十二歳の頃から拉典語の詩を公にし、又拉典文豪の作物を立派な英詩に翻譯などしてゐたが、殊に Odes や哀歌に巧であつた。ケンブリッチに住居を定めた年から、獨創的な詩を數多書いたが、まだ世間から認められなかつた。思出の深いその母校のイートン・コロッヂを歌つた "Ode on a Distant Prospect of Eton College" や逆境を讀んだ "Hymn to Adversity" 春に寄せた "Ode on the Spring" などの絶唱もあつたし、イートン時代の親友リチャード・ウエストを悼んだ "Sonnet on the Death of Mr. Richard West" を書き、不朽の名作 "Elegy written in a Country Churchyard" に筆を染め始した。

井ンザの森を始め、緑滴る小森、芝生、牧場を一望の中に收めて、樹の間隠れに聳ゆる尖塔の數、銀水を湛ふるテムズの流を含んで、忘れ難い追懐の種となる。

Ah, happy hills! ah, pleasing shade!

Ah, fields beloved in vain!
 Where once my careless childhood strayed,
 A stranger ye to pain!
 I feel the gales that from ye below
 A momentary bliss bestow,
 As waving fresh their gladsome wing,
 My weary soul they seem to soothe,
 And, redolent of joy and youth,
 To breathe a second spring.

血の燃え盛る青年時代は誰もその日を氣樂に過して、華やかな希望の影を趁つてばかりゐるけれども、聽て世の中の荒い風に苛まれ、情の火に焼き爛らせられ、貧しく、老いて、死を待つばかりになる。

Alas! regardless of their doom
 The little victims play;
 No sense have they of ills to come,

Nor care beyond to-day :

Yet see, how all around them wait

The ministers of human fate,

And black Misfortune's baleful train !

Ah, show them where in ambush stand,

To seize their prey, the murderous band !

Ah, tell them, they are men.

人間と生れて来た以上は、誰とても呻き悶へねばならないにしても、身に添ふ悲哀の餘りに茂く幸福を把持する間の餘りに短かくてあつけない。考へぬがよい、思はぬがよい。何にも物を知らない方が仕合せであるを結んでゐる。

.....

Thought would destroy their paradise.

No more ; — where ignorance is bliss,

'Tis folly to be wise.

彼の "The Elegy" は千七百五十年の夏に辛つと書き上げて、翌年の春匿名で梓に上せたが、價

は僅に六片の小冊子であつた。四行宛三十二節からなる此一篇の詩に彼は永い間、想を練り思を凝らしてゐた。推敲に推敲を重ねて、一句一語も寸分の弛みもない最も完全な哀歌である。全體に憂鬱な氣分が漲つて居て、名利に使はれ、虚榮に憧がれてゐる人達を導いて、徳の門に入らせようとした心持が明らかに見えてゐるのは、イートン・コレツヂを歌つたのと同じである。"The Elegy" を書いた田舎の墓地は、此詩を公にしてから二年して世を去つた、深切な而して優しい母を葬つたストウク・ボウジスの墓地であつて、イートン、井ンザ、ストウク・ボウジス一帯の土地はグレイの最も好きな佳い景色を有つてゐる。嘗つて大陸を旅行した時分、アルプス連峰の森嚴雄大な姿態に打たれて、千七百三十九年の十一月十六日附で、友人のウエストに送つた書簡に、Not a precipice, not a torrent, not a cliff, but is pregnant with religion and poetry と激賞したほど、大自然に對しては斷ち難き愛着を有つてゐた。甲蟲の翅音を立て、飛び廻る黄昏の鐘の聲、牧場に哮ゆる羊の群、とぼとぼと家路に向ふ農夫、羊欄から遠く聞えて來る鈴の音、蔦かづらに被ひかくされた塔、月に託言する梟の啼き聲まで、細かな自然の觀察から筆を起してゐる。

The curfew tolls the knell of parting day,

The lowing herd winds slowly o'er the lea,

The ploughman homeward plods his weary way,

And leaves the world to darkness and to me.

Now fades the glimmering landscape on the sight,

And all the air a solemn stillness holds,

Save where the beetle wheels his droning flight,

And drowsy tinkling lull the distant folds:

Save that from yonder ivy-mantled tower,

The moping owl does to the moon complain

Of such as, wandering near her secret bower,

Molest her ancient solitary reign.

Beneath those rugged elms, that yew-tree's shade,

Where heaves the turf in many a mouldering heap,

Each in his narrow cell for ever laid,

The rude forefathers of the hamlet sleep.

墓地の其方此方に盛り上げられた土は芝草に被はれて、各型ばかりの石が立つてゐる。それが此村の先祖達の墓なのである。その墓から推して彼等生前の簡素な、而も平和な生活が察せられる。ウエストミンスタやセント・ボールの如き大きな寺院に見る英雄や大政治家や或は文豪達の墓乃至記念碑に較べては物の數でないけれども、残された墓が、記念碑が、その人の價値を語るものとも限らなご。

Perhaps in this neglected spot is laid

Some heart once pregnant with celestial fire;

Hands, that the rod of empire might have swayed,

Or waked to ecstasy the living lyre.

此等の墓の主達の中にはハンブデンやクロムウェルやミルトンの如き偉大な人物が居たかも知れない。唯社會に立つて活躍の機會が與へられなかつたばかりに、又境遇の支配を脱れ得なかつたばかりに、變挺な韻文や無恰好な彫刻で飾られたその碑に眼を止むる人もないけれども、かの上に阿り、下に倣り、只管射利賣名に汲々乎として一生を終り、虚榮と奢侈の名残を止めた堂々たる墓碑に較べたら、どんなに貴いか知れないと、詩人は屢々その墓地に歩を運び、願望低徊默想に沈んだ結

果に成つたものであらう。

“The Elegy”を公にしてから千七百五十七年に至る七年間に「詩の進歩」“The Progress of Poesy”と「詩人」“The Bard”の二つの Pindaric odes を書いた。前者は詩の普遍的勢力より歌ひ初め、その起源に溯り、ギリシアの衰微と共にラティンの地に移り、ラティン人の士氣の頹廢と共に更に英國に入つて、シェイクスピア、ミルトン、ドライデンの如き大詩人をしてその精華を發揚せしめたことを説き、後者はエドワード一世がウエールズを征服した時分、殺害の厄にあつた一人の詩人の口を藉りて、彼の薔薇戦争の擾亂より、イリザバス朝の隆々たる文化の光明を仰ぐまでの豫言を語らしめたものである。古今の歴史に精通し、學問の淵奥を極めたるさへあるに、此二篇、殊に「詩人」の如きは、之を書き上げるに二ケ年有餘の日子を費やしたほど、推敲洗練の餘になつたものである。當時一代の詩宗として尊ばれ、此詩の出版後數日して、コリ・シバ (Colley Cibber) の死歿したとき、欽定詩宗に推されたが辭退して受けなかつたとも言はれてゐる。然しグレイの詩を理解することが出來ず、グレイに好感を寄せなかつたジョンソンは、グレイの詩は温床造りの植物である。一向つまらぬ植物である。つまり胡瓜に過ぎないものだ。と言ひ、更に“Sir, he was dull in company, dull in his closet, dull everywhere. He was dull in a new way, and that made many people think him great. He was a mechanical Poet.”と言つたのは、見當違ひの妄評であることは

言ふまでもないけれども、同じ抒情詩人でも、コリンズが鳥の歌ふやうに歌つたのと異つて、字句の細工に憂身を費したのは事實である。此點は後年のウォルター・ペイタに似てゐて、さうして仕上げた作物が貴い藝術品であることは同じである。グレイはフランスやイタリヤの文學に熟達してゐたばかりではない。その廣汎な文學の研究の範圍は、古代ケルト及びスカンディナヴィア文學に及んでゐた。死ぬ三年前の千七百六十八年に公にした、“The Fatal Sisters”、“The Triumphs of Owen”、“The Descent of Odin”の三篇は乃ち中世の浪漫斯の研究に基けるもので、スコットの詩の前驅をなしたものである。

如上の作物がグレイの代表的のものである。而して詩人としての生活は、始めて筆を染めた千七百四十二年から數へると三十ケ年足らずになるのに、詩の分量は極めて僅少で、丹念に計算をして見た人は、丁度一年に三十行ばかりづゝ書いたことになると言つてゐる。バイロンが十五六ケ年に作つた詩の量に較べると雲泥の違ひがある。グレイは體が弱かつたし、元來内氣で憂鬱な人であつたせいもあるであらうが、英國ばかりではなく、歐洲を通じての博學であつたと言はれてゐるところを見ると、詩を作るよりも、書物を読む方に専ら時間を取られてゐた爲であつたらう。グレイが自然派の詩人として、常に自然に愛着を有つてゐたのは、既にアルプス山の讃仰の辭にも示されてゐるが、千七百六十九年にスコットランド地方に旅枕を重ねて、赴く處の山嶽丘陵、行雲流水にいかにも眼を樂

まし、心を怡ばしめたかは、彼の歿後に出版された「湖水地方への旅日記」"The Diary of a Journey to the Lakes"に明にされてゐる。グレイが豊かな田園の風致を有つてゐるストウク・ボウジスの墓地の土となつたのは千七百七十一年であつた。母と並んだその墓の外に、彼"the Elegy"の數節を四面に刻んだ記念碑は、八百餘年を経たものだと勿體らしく寺男が案内をするその水松の樹と共に此寺の誇となつてゐる。

Thomson を筆頭に Shenstone, Dyer, Ramsay, Collins, Gray, など皆自然を歌つた詩人である。之等の詩人を第一期と見ると、第二期の同じ自然を歌つた詩人に Cowper, Crabbe, Burns などがあつた。古歌や神話を復活した Percy や Macpherson や Chatterton も、神秘詩人の Blake も、自然を主として歌つた人達と共に浪漫派の詩の大きな浪の蜿蜒うねりの中に来る。

第五節 異常な早熟の天才トマス・チャタトン

文學者殊に詩人には早熟の人が多い。然し單に文學史の上だけでなく、恐らく世界文學史を通じて、異常な天才の閃を見せたのはトマス・チャタトン (Thomas Chatterton) であらう。チャタトンは千七百五十二年にブリストル (Bristol) に生れた。父はその土地の小學教師をしてゐたが、チャタトンが生れない前に物故したので、母親は女教師の傍針仕事をして、殘された二人の兒を辛うじて養育してゐた。チャタトンが七歳の頃から、既に好古家的早熟性を現はして、むつつりと口數が少

なく、何かしら空想に耽つてゐるやうな様子で、家族からも他人からも、頭腦の冴えない子だと思はれてゐた。叔父が聖メアリ・レッドクリフ (St. Mary Redcliffe) 寺の寺男をして居たので、その寺へ遊びに行つた。建築は極めて古く、中世の武士などの肖像も數多あり、石に刻んだ古文學の碑銘などが、絶えず彼の好奇心を唆つた。又その寺の所藏の櫛製の櫃があつて、蓋蓋戦争時代の羊皮紙の書類が入つてゐた。斯ふ言ふものを稽古臺にして居たのである。八歳の時青衣慈善學校 (Colton's Blue-Coat Charity School) に入學したが、一二年する中に古體の詩を自ら綴り、レッドクリフ・チャーチで古代の稿本を發見したと稱し、地方の雜誌に寄稿して世間を矚着し始めた。さうして貸本屋からむやみに書物を借り出して、貪るやうに讀んだが、それが皆考古學や史書類か、さうでなければ古詩であつた。十五世紀頃のその寺の役僧でトマス・ロウリ (Thomas Rowley) といふ學者のあつたのを調べ出して、自作の詩集に "Rowley Poems" と云ふ名稱を附したのであつた。十五歳の時或辯護士へ年期奉公に出たが、割合に閑散であつたので、盛に詩を書いた。ballads, eclogues, interludes, tragedies と云つた風に、種類は極めて多かつたが、皆十五世紀頃の作家未詳の遺稿だと言ひ、一纏めにして梓に上ばす考であつたが引き受ける書肆がなかつた。千七百六十九年の三月のこと、チャタトンはホレイス・ラルポールに手紙を遣つたが、ラルポールすら全然欺かれて、チャタトンを厚遇した。流石にグレイは、チャタトンの詩は決して古いものでないと、彼の欺瞞を看破つた。然

しその年に書いた「イリノオーとジューガ」: *Elinore and Jugga* は立派な詩であつた。翌年ブリ
 ストルを去り、ランダムに出て、又相渝らず雑誌に寄稿してゐたが、殆んど無報酬であつたし、時た
 ま手に入つた稿料の一部は故郷の母や妹に送らねばならなかつた。彼の詩中の最傑作: *The Ballade
 of Charitie* すら掲載を拒まれ、餓死するより外に仕方がなくなり、アフリカ通ひの商船の船醫助
 手を志願したけれど採用してくれず、失望と窮迫のどん底に落ち、千七百七十年の八月二十四日
 あつた。死體は故郷に送られ、聖メアリ・レッドクリフに密葬されたが、今は一基の記念碑が建てら
 れて、*“Will”* と言ふ彼の詩の一部が刻まれてゐる。

それらの *“Rowley Poems”* の中に *“The Bristowe Tragedie”* と言ふのがある。サー・チャール
 ズ・ボルドウィン (Sir Charles Baldwin) が刑場に引き立てられて行く時、最愛の妻との切ない別離を
 歌つたバラッドである。

“Ah, sweet Syr Charles I why wylt thou go,
 Wyrhouthe thye loynge wyfe?
 The cruelle axe thart cuttes thye necke,
 Ytte eke shall ende mye lyfe.”

“I goe to lyfe, and nott to deathe;
 Truste thou ynne Godde above,
 And teache thy sonnes to feare the Lorde,
 And ynne theyre heres hym love:
 Teache them to runne the noble race
 That I theyre fader runne:
 Florence I shou'd dethe thee take — adieu!
 Yee officers leade onne.”

Thenne Florence rav'd as anie maddde,
 And dydd her tresses tere;
 “Oh! stafe, my husbande! lorde! and lyfe!
 Syr Charles thenne dropt a teare.

"Tyll tyredd oute wythe ravyngge loud,
 She fellen omne the flore ;
 Syr Charles exerted alle hys mighte,
 And march' d fromme oute the dore.

文字の綴りが古體に見えるけれども、純粹の中世英語ではない。最初近代語で書いて恣に綴りを變へたものであらうと言ふけれども、十四五の子供が書いたとは誰が考へよう。"Aella"と言ふ悲劇的 interlude の中に、死んだ男に對する乙女の切ない追憶と戀慕の情を歌つた八節ばかりの歌がある。

O ! syngge untoc mie roundelaie,
 O ! droppe the brynie teare wythe mee,
 Daunce ne moe atte hallie daie,
 Lycke a reynyngge ryver bee ;
 Mie love ys dedde,
 Gon to hys deathe-bedde,
 Al under the wyllowe tree.

又 "A Balade of Charite" にしても、綴字など變つてゐるばかりでなく、當時あつた Kersey の English Dictionary を丹念に繰つて、態々方言などを後から差變へたものらしいと、語學者の穿鑿も無用ではないけれども、不規則な曲調の上に、凡庸詩人の及び難い妙味がある。"A Balade of Charite" の如き、チヨリサなどを相當に讀み、且理解してゐたのでなければ、あゝまで内容も外形も美しいものが出来る筈はない。それ丈でも異常の少年であつたことが想像される。綴字の變つてゐることは既に引用したので充分である。方言や奇妙な綴字を讀み易く近代化した edition に就いて、その二節を引く。

In Virginè the sultry Sun 'gan sheene
 And hot upon the meads did cast his ray ;
 The apple ruddied from its paly green,
 And the soft pear did bend the leafy spray ;
 The pied chelandry sang the livelong day ;
 (Goldfinch)
 'Twas now the pride, the manhood of the year,
 And eke the ground was dight in its most deft aunere.
 (mantle)

The sun was gleaming in the mid of day,
 Dead still the air and eke the welkin blue,
 When from the sea aris in drear array
 A heap of clouds of sable sullen hue,
 The which full fast unto the woodland drew,
 Hiding at once the Sunne's festive face ;
 And the black tempest swelled and gathered up apace.

自然に對する觀察の綿密な點に於て、字句の豊富に且つよく練れてゐる點に於て、シェイクスピアからグレイあたりまでの詩宗達の作物を剽竊したり、或は模倣したりした形迹が多少あるとしても、チャタトンに特有なあるものがなかつたら、成熟の想に伴へる、表現の美がなかつたら、ワーズワースやシェリをして愛惜の誠意を被かしめはしなかつたらう。又キーツをして、約半世紀を隔て、肝膽相照しその名作 "Endymion" の巻頭に彼の名を記し止めしめはしなかつたし、コウルリツヂをして深く彼の研究に浸入させたこともなかつた筈である。上記した "Rowley Poems" の外に "Godewyn" "The Tournament" などの悲劇や、"The Revenge" の如き歌劇まがひのものや、"The Battle of Hastings" などの書いたけれども、チャタトンの價値は "Rowley Poems" に盡

されてゐると見てよいと思ふ。

第六節 散文詩「オシアン」とチエイムズ・マクファースン

チャタトンとよく似た文壇の詐欺師がもう一人ある。詐欺師と言ふ言葉は甚だ語呂が悪く、耳障りであるけれども、さう言ふより外仕方がない。名をチエイムズ・マクファースン (James Macpherson) と言つて、千七百三十六年に蘇國 Highlands の農家に生れ、小學教員をしてゐたのである。二十三歳の時そのハイランヅでケルト時代の断片的詩篇を蒐め、之を翻譯したものと稱へ、"Fragments of Ancient Poetry translated from the Gaelic or Erse Language" と言ふ書名で、千七百六十年に上梓した。その翌年再び資料蒐集の爲め旅行をした結果、フィンガル (Fingal) などの事蹟を歌つた詩が手に入つたが、確に三世紀のゲイルの詩人オシアン (Ossian) の作に相違ないと思ふ旨の論文を添へて、その自稱翻譯を千七百六十二年に出版した。ハイランヅの人達は自國の名譽にもなることなので、フィンガルやオシアンの傳説を肯定したし、ヒュー・ブレイヤ (Hugh Blair) などが矢鱈に擔ぎ上げたので大評判になつたが、ジョンソンは初手から之を疑り、あるなら稿本を出して見せろと言つた。無い袖は振れない。マクファースンは口惜しがり、ジョンソンに出逢つたら唯はおかないと敦囑いたさうである。然し兎に角にごちやまかして、尻尾を出さずに、世を欺き終せたのは幸であつた。果して偽造であつたかどうかは今でも確證はない。然しチャタトンの詩が、言葉

は古いけれども、いやら近代臭いところのあるやうに、マクファースンの詩は、その色調も生新しいものであるし、扱つた場合や人物にも矛盾や錯誤が多いと言はれてゐる。その断片の "Carthon" 及び "Fingal" から、例を取る。

I have seen the walls of Balclutha, but they were desolate. The fire had resounded in the halls; and the voice of the people is heard no more. The stream of Clutha was removed from its place by the fall of the walls. The thistle shook, there, its lonely head; the moss whistled to the wind. The fox looked out from the windows, the rank grass of the wall waved round its head. Desolate is the dwelling of Moira; silence is in the house of her father. Raise the song of mourning, O bards! over the land of strangers. They have but fallen before us; for, one day, we must fall. Why dost thou build the hall, son of the winged days? Thou lookest from thy towers to-day; yet a few years, and the blast of the desert comes; it howls in thy empty court, and whistles round thy half-worn shield.

(From "Carthon")

Like autumn's dark storms, pouring from two echoing hills, towards each other approached

heroes. Like two deep streams from high rocks meeting, mixing, roaring on the plain; loud, rough and dark in battle meet Lochlin and Innis-fail. Chief mixes his strokes with chief, and man with man; steel, clanging, sounds on steel. Helmets are cleft on high. Blood bursts and smokes around. Strings murmur on the polished yews. Darts rush along the sky. Spears fall like the circles of light, which gild the face of night. As the noise of the troubled ocean, when roll the waves on high. As the last peal of thunder in heaven. Such is the din of war!

(From "Fingal")

近代の批評家は此 Ossian の詩には、シエイクスピアや、ミルトンや、もつと降つたタムスンなどから剽竊した文句が多いし、ホウマや聖書などからも借用した形迹を被ふことが出来ない。文體も莊嚴に且つ壯重に聽ゆるけれども、その響は空虚であると言ふ。然し假令響は空虚であらうとも、剽竊が多からうとも、全然創意の欠けたものとは考へられないし、又吟誦の上に於て一種詩的な感情の現はれてゐることを拒むことは出来ない。ナポレオンは此詩を二なき伴侶とした。獨乙や露西亞あたりの國語に譯されて、その文壇を賑はした。デジョンソンからは散々油を搾られたけれども、英國内での崇拜家が可成少なくなかつたし、愛讀者は降るほどあつたので、懐具合もよく、晩年には政治界に乗り出して、議員に選ばれ、千七百九十六年に頓死をしたが、遺骸はウエストミン

スタに運ばれて、ポイツ・コーナの石の一つにその名を止めてゐる。

第七節 バーシの「古詩拾遺」と、ワートンの「英詩史」

十八世紀の後半期に詩の方面に起つた浪漫的運動は、十九世紀に入つて、コウルリツヂから新しい浪漫主義が生れたが、小説の方面でも、スコットが出て、同じ浪漫的運動が生れてゐる。スコットのは今爰處で説くべきではないけれども、スコットに直接感化を與へた作家を一人マクファースンやチャタトンと同じ年代に見出すのである。

トマス・バーシ (Thomas Percy) は作家としてよりも、古詩の蒐集家として貴い人である。マクファースンやチャタトンの様に、ごまかしをやつたのではない。丹念に集めた古詩を、そのまゝに出版したのである。バーシはブリッヅジノースの食料雑貨商の子で、土地の語學校を出て、オクスフォード大學のクライスト・チャーチに入り、大學を出てからは、僧職に就いて三十年餘りを送つたが、かたはら傳奇文學の研究に身を委ね、友人の家に古詩の稿本が數多所蔵されてゐたのを見て、古いバラッドの佳いものを抜き蒐めて出版して見たいと思つた。グレイやシエンストウンなどの援助を得て、遂に千七百六十五年公にしたのが、斯界に一新紀元を開いた有名な「古詩拾遺」: *The Reliques of Ancient English Poetry* で、三卷から成つてゐた。編者はバラッド文學を紹介するのが目的であつたから、本文がどうであらうと、又言葉が古からうが、綴字が變つてゐやうが、そんなことに

は顧慮することなく、夫等の断片的詩篇の不完全な個處や、欠損してゐるところは、バーシ自身適宜に古體を擬ねて補綴したさうである。チャタトンのプリストウ・トラジェディ *Bristowe Tragedie* に見たやうな、人情物も可成多く、又 *Chevy Chase* と *The Rattle of Otterbourne* の如き、極めて古いバラッドも編み込まれてゐたし、而も詩はバラッドに止めず、時代は中古と限らないで、編者自身の年代に至るまでの優秀な小唄や叙情詩を包括せしめたのであつた。此書を献題したノーサンバランド公爵夫人の愛顧を受け、公爵家の禮拜堂附牧師となり、續いてカーライル (Carlisle) の副監督から、ドロモア (Dromore) の監督になつて、千八百十一年八十二歳で死んだ。バーシの「古詩拾遺」が浪漫的運動に多大の貢獻を具へ、スコットは言ふまでもなく、ワーズワース、コウルリツヂ、キーツまで直接利益を蒙つたが、トマス・ワートンの「英詩史」も古詩研究の熱度を高からしめたものである。

トマス・ワートン (Thomas Warton) は千七百卅八年生れである。父はオクスフォード大學の詩文學の講座を擔任したこともあつた人であるが、二人の子のジョウジフ (Joseph) もトマス (Thomas) も共に文學者で、弟のトマスはオクスフォード大學の Fellow になり、又父親と同じに同校の詩文學の教授になつた。千七百八十五年に五十七歳で欽定詩宗に推され、死ぬまで五年間その職に在つた兄のジョウジフと共に王政復古期以前の詩風に共鳴し、浪漫的な詩を書いてゐたが、見るべき作物

も少なくなかつた。トマスの残した作物は、「スペンサの仙女王に關する論文」: *Observations on the Fairie Queene of Spenser*」と「英詩史」: *The History of English Poetry*」と「ニュートンの小詩集の刊行であつた。英詩史は十一世紀頃から、イリザバス朝に至るまでの英詩の發達を説いたもので、詩文學の鑑賞の上に尠からの刺戟と利益を齎らした。文體も明快でさうして遒勁な散文であつて、可成詳密な脚註が添へられてゐる。イリザバス時代で筆を擱いたのは千秋の恨事である。弟よりは十年も長生をしたデョウジフが、その後を續ける計畫であつたが、是も成就せず終つた。

第二章 十八世紀末を飾る浪漫派の四詩人

第一節 ウヰリアム・クーバ

タムスンを筆頭に古典主義に反抗して、或は眼を自然の觀察に注ぎ、或は力を古詩の紹介に致した詩人達の主な人々を一瞥したが、猶千七百八十年頃から千八百年の間に浪漫主義の運動に新しい波動を畫いた四人の詩人を特筆せねばならない。その四人とは Cowper, Blake, Burns, Crabbe のことである。

ウヰリアム・クーバ (William Cowper) は千七百三十一年大バーカムステイド (Great Berkhamstead) の牧師の舍宅で生れた。父は言ふまでもなくバーカムステイドの牧師で、當時の大法官ク

バの甥にあつて居たし、母は聖ポールの名高い副監督博士デヨン・ドンの親戚であつた。クーバは最初ハートフアドの私塾に入つたが、熟生から散々虐待められ、性來敏感な小膽な子であつたところへ、母を失つて愈々惰氣込んで終つた。後ウエストミンスター學校から、ミッドル・ランブルに入つて法律を學んだが、父にも死に別れ、その頃叔父の娘のシオドラ (Theodora) と熱烈な戀をしたけれども、叔父が同意せぬので、甚く落膽したことなど、原因の一つであつたらうが、千七百六十二年に貴族院書記官の候補者になり、それには試験などをされることを考へ、昂奮した爲に氣が變になつて、自殺を企て、一時病院に送られ、十五ヶ月ばかりで正氣に返つたけれども、それ以來強く頭腦を使ふ仕事には堪へなくなつた。静養の爲にハンティンダン (Huntingdon) という田舎に暫時引き込んだ時分、アンヰン (Unwin) という僧侶と知己になり、その家に宿を取つてゐたが、アンヰンが死んでからその未亡人と共にバツカンガムシアのオルニ (Olney) に移り、千七百八十六年頃まで住居したが、此間にも憂鬱症に罹つて、十四五ヶ月も恢復しなかつたことがあつた。病氣療養の目的で野兎を馴らして見たり、小鳥を飼つたり、庭いぢりや小舎造りに、大工の眞似事しながら、徐に詩文を草したが、元より富裕の身でもなかつたので、親戚や朋友の補助を仰いで辛うじて生活を支へて居た。ニュートン (John Newton) という僧侶と合作で最初の詩集 "Olney Hymns" を、千七百七十九年に公にし、三年の後第二の詩集を公にしたが、是には「茶話」: *Table*

Talk” “會話” “Conversation” “退穉” “Retirement” などの佳作を含んでゐた。然し、概してターバの詩が陰鬱に過ぎて受けが悪かつたので、滑稽味の勝つたものを書くやうに勧めたのは Lady Austen と言ふ婦人であつた。而してジョン・ギルピンの話の筋を話したところ、ターバもくすくす笑ひだして早速 Ballad 體で作り上げたのが “John Gilpin” であつた。又「仕事」 “The Task” も同じ婦人の暗示を受けて書いたものである。別に書く程がないとターバが言つたとき、何でもよいではないか、例へば此長椅子のやうなものも詩になると言はれたのが元で「仕事」の第一巻は “The Sofa” と名付けたものである。斯くして “The Garden,” “The Winter Evening,” “The Winter Morning Walk,” “The Winter Walk at Noon” なども、自然を背景とした單純な田園生活に觸れた六卷から成る “The Task” をも含めた第三輯目の詩集が千七百八十五年に上梓されたのである。男に捨てられ、さうして男に先立たれ、氣が違つて、千切れた前垂を掛け、ぼろ／＼の衣もしどけない Kate と言ふ下女を斯う歌つてゐる。

There often wanders one, whom better days
Saw better clad, in cloak of satin trimmed
With lace, and hat with splendid riband bound.
A serving-maid was she, and fell in love

With one who left her, went to sea, and died.
Her fancy followed him through foaming waves
To distant shores, and she would sit and weep
At what a sailor suffers; fancy too,
Delusive most where warmest wishes are,
Would oft anticipate his glad return,
And dream of transports she was not to know.
She heard the doleful tidings of his death,
And never smiled again. And now she roams
The dreary waste; there spends the livelong day,
And there, unless when charity forbids,
The livelong night. A tattered apron hides,
Worn as a cloak, and hardly hides, a gown
More tattered still; and both but ill conceal
A bosom heaved with never-ceasing sighs.

She begs an idle pin of all she meets,
 And hoards them in her sleeve; but needful food,
 Though pressed with hunger oft, or comelier clothes,
 Though pinched with cold, asks never. — Kate is crazed!

車上の箱に雨風を凌ぎ、生垣から薪を拾ひ、焚火して暖を取り、煮炊きをして、所定めず馬車をやる浮浪民が、鑄掛や占掌の生活はまだしも、詐欺や盗みはお手のもの、

Loud when they beg, dumb only when they steal.
 Strange! that a creature rational, and cast
 In human mould, should brutalize by choice
 His nature, and though capable of arts,
 By which the world might profit and himself,
 Self banished from society, prefer
 Such squalid sloth to honourable toil!

人里離れた森の中まで、時には調子を外して踊つたり諺つたりする。金がなからうが、寒からうが、食物が悪るからうが、新鮮な空気を吸つて、はつつき廻はるので病氣にもならないと言つた

風な描寫の行方である。「草話」や「會話」その他の初期の詩の形はチャーチル (Churchill) などの用ゐたヒロウイック・カブリットに負ふところがあり、「仕事」の無韻律はミルトンのそれを模範にしたのであるけれども、他の詩人の作物を除き讀まなかつた丈に、齒切れのよい平明な語と共にその詩の調子の上にクーバ獨特のものがある。又自然や人生を寫すにしても、タムスンやグレイなどのやうに、自然を唯偉大な、壯麗なさうして美しいものとは見てゐない。又自然に育ててゐる人間の生活も、安泰な平穩な楽しいものとは見てゐない。還境の支配の下に苦悶もし、呻唸きもして、罪惡と不幸に絶えず脅かされてゐると見てゐるのである。必しも悲觀の詩人ではなかつたけれども、彼の閱歷と性格が幾分さうした傾向を與へてゐたに相違なかつた。「仕事」に就いてクーバ自身斯う言つた。「私の記述は皆自然から取つたので、孫引は一つもない。人間の心の描寫は私自身の經驗から得たものであつて、書物から借りたものも、憶測から來たものも一つもない。元來無韻律と言ふものは變化を加へないと、風囊や絃に過ぎないものになるから、出来る丈變化を與へた。私の詩は誰の詩を真似たのでもない、尤も外見が似てゐることもあるかも知れないが、それは真似を爲ないと同時に、わざわざ違はせることもしなかつたからだ。」と。クーバの詩が總じて獨創的であることはクーバ自身の此辯明を埃たないでも知られてゐる。

是等の作物を出してからホウマの翻譯 “Translation of Homer” にかゝつたが、一日に三十行位

宛几帳面に譯して、千七百九十一年に上梓したけれども、骨を折つた割合に注意を惹かずに終つた。ホウマを出版したその前年に綠類のある婦人から、束の間も忘れたひまのなかつた、懐しい亡母の肖像を贈られた嬉しさに、一篇の詩にその幼児の思ひ出を歌つたものが “*On the Receipt of My Mother's Picture out of Norfolk*” であつた。その贈り主に宛た手紙に斯う書く。 “*The world could not have furnished you with a present so acceptable to me as the picture which you have so kindly sent to me. I received it the night before last, and viewed it with a trepidation of nerves and spirits somewhat akin to what I should have felt had the dear original presented herself to my embraces. I kissed it and hung it where it is the last object that I see at night, and, of course, the first on which I open my eyes in the morning. She died when I completed my sixth year; yet I remember her well, and am an ocular witness of the great fidelity of the copy.*” 孝子の至情が言々句々に溢れて、そらろに多情多感な詩人その人の面影を偲はしめる。クーバは書簡文の名人である。氣取つたところの些少もない、魅力のある美しい文章である。「書簡集」 “*Letters*” に對して、サウズ (Southey) が “*The best letter-writer in the English language*” と評したのは決して過褒の言ではない。詩もその書簡文の如くに卒直な純真な心の叫びである。

Oh that those lips had language! Life has passed

v

With me but roughly since I heard thee last.

Those lips are thine — thy own sweet smile I see,

The same that oft in childhood solaced me;

Voice only fails, else how distinct they say,

“Grieve not, my child, chase all thy fears away!”

The meek intelligence of those dear eyes

(Blest be the Art that can immortalize,—

The Art that baffles Time's tyrannic claim

To quench it) here shines on me still the same.

往昔の母の慈愛や親切を心行く迄偲んで、その母の容姿を永久に残して呉れた藝術を祝福して居る。二十年の久しきに亘つてクーバの慰藉者となり、伴侶となり、苦樂を共にしたアン・キン夫人が中風で體がさかなくなつた時、

The twentieth year is well nigh past,

Since first our sky was overcast;

Ah, would that this might be the last!

My Mary!

.....
Thy needles once a shining store,

For my sake restless heretofore,

Now rust disused, and shine no more,

My Mary!

.....
Thy silver locks, once auburn bright,

Are still more lovely in my sight

Than golden beams of orient light.

My Mary!

この「To Mary」に歌つたその夫人も、千七百九十六年に世を去つてから、クローバは、恸々孤獨の寂しさを覚え、沈み勝になつた。晩年には長い詩は書けなくなつたものか、以上記した二三の詩の外に「ボアデイシア」「Boudicia」「益な心配」「The Needless Alarm」や「アリグザンダ・セルカーク」「Alexander Selkirk」「ロイアル・ジョージ號の沈没」「The Loss of the Royal George」「兎の碑

銘]「Epitaph on a Hare」などが知られてゐるに止まる。一度襲はれた狂氣は全く癒えきらず、例へば高山の頂に常に雲がこびりついて離れず、さうして折節その濃さを増して雨を降らすやうに、絶えずクローバを脅やかしたが、死ぬ一年前の千七百十九年には、人目にもつくほど顯著になつた。到底救ふことが出来ないと自覺して、殆んど絶望の淵に沈み、丁度浪風の荒い夜の航海に、その甲板を滑つて海に墜ちた人が、水泳の心得があるので、暫時浪間で漂ひながら、聲を揚げて救を求めたけれども、闇は綾なく、風は疾く、船は次第に遠ざかつて、終に力盡き、溺れて終ふ。その運命を我身に引き較べてゐる怖ろしい「The Castaway」を絶筆に、千八百年の春イースト・デイトラム(East Derham)で死んでその地の土となつた。

クローバの詩は概して單純であり、平明である。熾烈な情熱があるのでなく、遠大な理想が含まれても居ないけれども、自然の美を捕捉して、そのまゝ忠實に寫し出したところに大きな魅力を有つてゐるし、病的と思はれた程信心深く、物の憐れを辨へて、優しい而して飾り氣のない粗朴な性格の表はれたその詩が暖い親し味を感じさせる。

第二節 田園詩人ロバート・バーンズ

自然にしろ人間にしろ、的歴に美しいものでなければ、崇高く大きなものでなければ、詩にならなさと考へたボウブ一派の主張は、農夫、浮浪民、郵便配達人、狂女などの生活に觸れた「The Task」

や、兎を弔ひ、猫を憐れみ、犬と蓮を歌ひ、金翅雀かほらひはなどを讀んだクーバの數多の詩によつて切り崩された。百姓詩人として知られてゐるロバート・バーンズの出るに及んで、赫灼と照し昇る朝日の前の月影のやうに、古典主義はその光芒を斂めたのである。

Jan. 25, 1959

ロバート・バーンズ (Robert Burns) は蘇國の楠木屋の子として、エア (Ayr) の町の南二哩ばかりの Alloway の古い小さな農家に産聲をあげたのは、千七百五十九年の一月の末である。七歳の頃、父の井リアム・バーンズは Mount Oliphant と云ふところの小作農となつたが、耕地は瘦せてゐたし、子供は多し、生活はなか／＼困難であつた。それでも父親は子女の教育には熱心であつたので、バーンズは兄のギルバートと共に村の小學校に通つてゐたが、アデイスンのスペクテイタの物語など好むで讀み、又蘇國の英雄ワレイス (Wallace) などの傳記に興味を有ち、賑やかなや／＼おどけた子で、兵士の募集に軍曹などが村にやつて來ると、その太鼓や風笛の音につり込まれ、武張つた足取りをしてその後について歩き、もう少し脊が高ければ兵士になれるんだと言つて、人を笑はせたこともある。ワレイスの傳記など讀んだのは、やがて蘇國に對する愛國心の源を培つたのであつた。十三歳の頃二三哩隔つた學校に通學する身になつたが、ギルバートと交代に父の手助けをして連枷も振れば、利鎌も握つた。さうして借りる機会さへあれば、貸手を撰ばず誰からでも借りてシエイクスピアやボウプなどの戯曲や詩を讀み、殊に小唄が好きで、耕地への行き戻りに、讀み且

吟誦したのである。バーンズが十九歳の時、父は住居をロクリー (Lochlea) の耕地に移し、父と兄とが亞麻の栽培を始めてから、その商用で家を離れた時分、悪い友達が出来て、道樂もしたが、それは却つて彼の爲によい試練であつた。父を亡つて、他の兄弟達と一緒にモスギール (Mossgiel) といふ地に移つたのが二十六歳の時で、その後四年間ばかりは田圃の間に立つて屹々と勞働に従事したが、生活の困難は依然として渝らなかつたので、一層蘇國を去つて西印度に移住しようかと考へ、その資本を作るために千七百八十六年の夏、始めて一卷の詩集を公にしたのが有名なキルマーナック版 (Kilmarnock edition) であつて、その前年に書いた "The Cotter's Saturday Night," "The Jolly Beggars," "The Twa Dogs," "Address to the De'il" などの名作を含んでゐた。友人の勧めもあり、詩集の發行に相當の成功を收めて、移住を思ひとどまり、エディンバラに出て、その後書いた詩を加へて前詩集を再版し、五百磅餘りの報酬を得たのみならず、男らしいその氣前や態度や話し振りの上手などが手傳つて、上流社會から下にも置かぬ取扱ひを受けた。然しそれはバーンズに取つては身の毒であつた。金廻りのよいところから、酒色の道に走つて、一時好意を寄せられた人達からも倦かれて、面白くなかつたので、一ケ年ばかりでエディンバラを去り、ダムフリーズ (Dunfries) から六哩ばかりのエリスランド (Ellisland) の耕地を借り、再び百姓に歸つて、ジャン・アーマー (Jean Armour) といふ戀女房を迎へ、鋤鍬を取る傍ら、密輸入の取締りや、酒稅徵集官吏

を兼ねて居た。が仕事の繁劇である割合に報ひらるゝところが極めて薄かつたのでダムフリースに住居を變へたが、一度ついた癖は脱けず、大酒を呷り、節制を欠いてゐたところへ、不謹慎にもフランス革命の讚美が度を越え、政府から睨まれ、知己の氣受けても悪くなり、遂に貧乏のどんぞりに落ちて、疲勞と苦痛の中に、千七百九十六年の七月熱病を煩ひ、まだ三十七歳の男盛りの花は散つて終つた。

バーンズの生涯は寧ろ悲惨であつた。全く貧乏と艱苦の歴史であつた。けれども絶えず自然に親しみ、勞働を捨てなかつたことは、纏てバーンズの名を不朽ならしめた得難き體驗であつた。彼の詩の總ては土の香を漂はしてゐる。土の香の中に嘗つてワレイスの傳記によつて培はれた獨立の氣魄と、愛國の精神の閃きは、*"Scots wha hae wi' Wallace bled"* & *"For a' that, and a' that"* に見ることが出来る。

Is there for honest poverty

That hangs his head, and a' that ?

The coward slave, we pass him by,

We dare be poor for a' that !

For a' that, and a' that,

Our toils obscure, and a' that ;

The rank is but the guinea's stamp,

The man's the gowd for a' that.
(gold)

財産がなくつても、位階を有たないでも、正直な人間であれば、裸一貫で俯仰天地に耻ぢることろはない、眞の王者はその正直な貧乏人である。"*For a' that and a' that*" に氣を吐いてゐる。紳士と百姓に飼はれてゐる二匹の犬の口を藉りて、農民の幸福で安穩であるのと、紳士なる人達が概して自墮落で不健全であることを、その家庭並に社交生活の上に就いて細かに語らしめた "*The Two Dogs*" は、バーンズの詩の隨處に點在してゐる民主的精神と、社會及び人間の改造の叫びの現はれである。汗水滴らして働いても、辛うじて生きて行ける丈の報酬しか得られないけれども、四時自然の懷に抱かれて、暢々とした氣分で過して行けるのは、鋤鍬を握ればこそである。父を失つたその翌年書いた「農家の土曜日の夜」 "*The Cotter's Saturday Night*" は「二匹の犬」にも書いたやうな簡素な農家の生活を歌つたものである。

November chill blows loud wi' angry sigh,
(sound)

The short'ning winter-day is near a close ;

The miry beasts retreating frae the plough ;
(plough)

The black'ning trains o' craws to their repose ;
 The toil-worn cotter frae his labour goes, —
 This night his weekly mool is at an end, —
 Collects his spades, his mattocks, and his hoes,
 Hoping the morn in ease and rest to spend,
 And weary, o'er the moor, his course does hameward bend.

At length his lonely cot appears in view,
 Beneath the shelter of an aged tree ;
 Th' expectant wee things, toddlin', stacher through
 (little) To meet their dad, wi' flichterin' noise and glee,
 (sagger) His wee bit ingle, blinking bonnily,
 (fluttering) His clean hearthstane, his thrifite wife's smile,
 The hisping infant prattling on his knee,
 Does a' his weary kjaugh and care beguile,
 (anxiety)

An' makes him quite forget his labour an' his toil.

詩の形は九行から成る Spenserian Stanza であり、思ひ付きは Ferguson の “The Farmer's Ingle” から得たものであると言ふけれども、内容はバーンズ自身の経験から来たものであつて、誰から借りたでもない。律義な子澤山な夫婦が、それぞれ子供の面倒を見てやりながら、年頃の娘に悪い虫がつきはしまいかの心遣ひもする。幸に娘の愛人が氣心の優しい、正直さうな而も頑丈な青年であるのが知れて胸を撫でる。その行末の婿を交へて、暖い圍爐裡を取り巻く、平和な信心深い家庭を描いた後、かゝる健全な分子が永久に存在するやうに、又彼レイイスの不撓不屈の心に、流れた愛國の精神を失はないやうにと祈つてゐる。此の剛い内に柔かみのあるのがバーンズの特徴である。耕作の間に雛菊の花を掘りくり返しては

Wee, modest, crimson-tipped flow'r,
 Thou'st met me in an evil hour ;
 For I maun crush amang the stoure
 (dust) Thy slender stem.
 To spare thee now is past my pow'r
 Thou bonnie gem.

と「雛菊に寄する」"To a Mountain Daisy" の歌の冒頭に遺瀨なき心の痛みを歌つて、その花の運命を幸薄き詩人自らの身の上に較べてゐる。

Even thou who mourn'st the Daisy's fate,

That fate is thine — no distant date;

Stern Ruin's ploughshare drives clate,

Full on thy bloom,

Till crushed beneath the furrow's weight,

Shall be thy doom.

寒い冬の日、鋏の先にその巢を掘り返された小鼠に對しても、そんなに急いで逃げるには及ばない決してお前を殺しはしない。お前も俺も同じ地上に生れた仲間同志である。お前は畑物を盗んで食ふかも知れない。けれどもお前も生きねばならぬ。お前の食ふ分はほんの僅かだ。俺はその残り生きてゆかれる。

I doubt na, whyles, but thou may thieve;

(Sometimes)

What then? poor beastic, thou maun live!

A daimen-icker in the thrave

(An ear of corn now and then) (twenty-four sheaves)

'S a sma' request:

I'll get a blessing wi' the lave,

(rest)

And never miss't!

土の下に、冬を凌がうとして巢を營み、善への備をした小鼠の計畫も勞苦も水の泡になつたが、それは獨り小鼠ばかりではない。

The best-laid schemes o' mice an' men,

Gang aft agley,

(amiss)

An' lea'e us nought but grief and pain,

For promis'd joy.

動もすれば曇り勝ちな心をうつろはせることが出来なかつたのは此 "On Turning up a Mouse's Nest with the Plough" を雛菊に寄せた歌を「詩人の碑銘」"A Bard's Epitaph" なつたにも見えてゐる。

「メアリ・モリスン」"Mary Morison" と「私のナニエ」"My Nanie, O." に歌つた卒直な、純一な情緒を "Of a' the Airts the Wind can Blaw" に斯う歌つた。

* Of a' the airts tee wind can blaw,
(quarters!)

I dearly like the west,
 For there the bonie lassie lives,
 The lassie I lo'e best.

.....

There's not a bonie flower that springs
 By fountain, slaw, or green;

There's not a bonie bird that sings,
(wood)

But minds me o' my Jean.

ANNA
 Aの Jean は、ヘーンズに先立って世を去つた。亡き妻の追憶は遠くその甘き戀を囁き合つた昔に
 溯つて、"Highland Mary" の絶唱となつてゐる。

O pale, pale now, those rosy lips,

I aft hae kissed sae fondly!

And closed for ay the sparkling glance,

That dwelt on me sae kindly!

And mould'ring now in silent dust,

That heart that lo'ed me dearly!

But still within my bosom's core

Shall live my Highland Mary.

ヘーンズの Songs の一つ "Auld Lang Syne" の曲調は英語を話す國々の津々浦々まで知らない人のないほど名高いものであるが、單に此歌ばかりではなう。"John Anderson, My Jo"; "Farewell to Nancy"; "The Banks o' Doon"; "A Red, Red Rose"; "To Mary in Heaven"; "This is no my ain Lassie" など、その獨特の階調のために汎く歌はれてゐる。豊かな想像と軽い諧謔が流れてゐる詩には "Hallowe'en"; "Duncan Gray"; "The Jolly Beggars"; "Tam o' Shanter" などがある。「面白い乞食達」はヘーンズがモズギールに住居した千七百八十五年頃の作であるけれども、梓に附せられたのは、歿後二十六年餘り経過つてからであつた。旅籠屋に集まつたぼろぼろの一組が、財布の底をはたき、汚い衣物まで質に入れて、飲めや歌への亂痴奇騒ぎ、女性も二人交つて、各々その身の経歴を語つてゐる。個性がそれぞれ巧に描かれてゐる上に、爵位や財寶に縁のない彼等が、耻も外聞も憚らねば、場所を嫌はず、方法を問はず、只歡樂を逐つて行く自由な氣分を示してゐる。"Hallowe'en" は萬聖節の前夜乃ち十月三十一日のことである。此祭りの晩に蠟燭を手にして鏡の前に立ち、林檎を食べると、その鏡に未來の配偶者が、その人の肩越しに映るとか、若い

男女が各自胡桃を名指して二つ並べて火にかけ、そのまゝに焼けるか、跳ねて離れるかで、夫婦になれるとかなれないとか判断をする。楽しく歌ひ、親しく語り、笑談を言ひ合つて、祝ひの食物を食べ、祝ひの酒を飲んで、無邪氣な慰みに夜の集りが終つてゐる。「御縁日」：「The Holy Fair」は同じ詩形で、夏の日曜日的光景を細かに書いてゐる。「Tam o' Shanter」は巫女に關する物語りである。場面をバーンズの生地アロウェイに取り、

The wind blew as 't wad blawn its last;

The rattling show's rose on the blast;

The speedy gleams the darkness swallow'd;

Loud, deep, and lang the thunder bellow'd;

That night, a child might understand,

The Devil had business on his hand.

と物凄い筆を見せ、怪談師の話のやうに、雪に埋つて死んだものがあつた處だとか、人殺しがあつたとか、首縊りがあつたとか、陰氣なことを記して、タムと言ふやぐざな酔漢が魔の物の横行する深夜そのアロウェイの古寺近く馬を急がせる。寺に灯が見えるので、酒の勢でこつそり窓から覗き込む。身の毛もよだつ怪しき数々のものの中に、一個の魔の物の吹く笛に伴れて、舞踊が始まる。

餘りの面白さにタムが聲を出して賞めると、灯は消えて眞の間、魔のもの、群がり走り出る氣配にタムはまつしぐらに馬を煽り立て、逃げる。辛じて魔の力の及ばない流を越して命は助つたが、乗つた馬は橋を渡り切らなかつたので、魔の手に尾を抜かれて終つたといふ。彼の「Hallowe'en」に見たと同じ迷信を基として、想像の翼を出来る丈張り擴げ、自然と超自然の二つの世界に跨がつて、怖ろしくして、面白い物語りを書いたのである。勿論「農家の土曜日の夜」と共に双壁であるが、此長詩が僅に一日の間に書かれたものと誰が考へやう。スコットは「面白い乞食達」をもつて此種の英詩中の壓巻と評した。バーンズ自身は「Tam o' Shanter」を最もよく出来たものと考へた。

Elegies, satires, tales, lyrics, epigrams, songs を合せ、六百五十有餘の詩篇を通じて、エアシアの方言は激瀾の生氣を有つてゐる。英語が世界的勢力を占めつゝある今日、蘇國の方言は全く廢れて、やがてその影を收むる日も遠くはないかも知れないけれども、少くも文學の上に於て、その方言に不朽の生命を附與したのはバーンズである。富めるものを抑へ、貧しきものを慰め、傲れるものを誡め、疲れたるものを勵ました、飾らない自らの彼の全心の聲の響は、永劫に静まるときはあるまいと思ふ。

第三節 ジョージ・クラブとその寫實主義

ジェーン・オーステインをして出来るなら結婚したいと切に望ましめ、バイロンをして、最も嚴

かな最も上手な自然の畫家と評さしめたほど、人生と自然の描寫に成功した詩人はクラブである。

ジョージ・クラブ (George Crabbe) は千七百五十四年の十二月にサファーク (Suffolk) のオールバラ (Aldeburgh) という小さな海港場に生れた。父は小學教員をしたことがあり、鹽稅徵收吏をしてゐたし、漁船を人と共同で所有つてゐた。クラブが土地の外科醫に弟子入をして、年期の明けたのは二十一歳の時であつた。體が弱かつたので、どこまでも醫者でたつ考で植物學など研究してゐたが、好きで作つた詩も少しは溜つたし、父の勧めもあり、ランダンに出て一稼ぎする積りで、一函の外科用器械と三磅ばかりの金を懐にして、住み馴れた故郷を後にしたのは二十六歳の時であつた。衣食に窮して當路の顯官に宛て、手紙を書いて見たが、返事の來る筈もなかつた。最後にバーク (Burke) に宛て、「書庫」"The Library" と「村落」"The Village" の詩の草稿を添へて手紙を出したのが運の向き始めて、バークはその詩の價値を認め、クラブをその家に寄寓させ、書肆の Doddsley にクラブを紹介して、千七百八十一年に「書庫」が上梓される運になつたのみならず、ドクタ・デヨンスンを始め知名の人達とも、バークのお蔭で知己となることが出來た。同時に僧侶の資格を取つて故郷のオールバラの教會牧師補になり、數ヶ月の後又バークの斡旋でルートランド公爵の禮拜堂附牧師としてベルヴォア (Belvoir) に移り、豫て想を懸けて居た女性と結婚した。質朴

で、さうして鶴の毛ほども氣取つた風がなかつたクラブは誰からも好かれた。大法官のサーロウ (Thurlow) の氣に入つて、萬事に都合が良かったし、或時はクラブを朝食に招いて、百磅の紙幣を歸り際に握らせてやつたこともあつた。「書庫」は詩として形の整つたものであるが、千七百八十三年に出版された「村落」"The Village" は、デヨンスンが加筆し、村落の人達の實生活に觸れたもので「書庫」とはちがつて、クラブの本領を發揮したものである。その翌年に「新聞紙」"The Newspaper" を出してから二十二年餘りは暫らく沈黙が続いた。ベルヴォアからレスターシャー (Leicestershire) のマストン (Muston) の牧師となつて命名とか結婚とか葬式とか教會の事務に執筆して、千八百七年に「教會の記録」"The Parish Register" を著し、一ヶ年間を置いて「市邑」"The Borough" を、更に一ヶ年を隔て、「韻文の物語」"Tales in Verse" を、亦六ヶ年を隔て、「會堂物語」"Tales of the Hall" を公にした。その後の十三ヶ年は何にも書かずに井ルトシア (Wiltshire) のトロウブリッジ (Trowbridge) の牧師として、平安に世を送り、千八百三十二年にその任地で死んだ。

上記の作物を讀んだ感じをざつと書いて見る。「村落」は二卷に分たれてゐる。バーンズやゴウルドスミスの詩の氣分を味はせる。蟬の聲の喧しい夏、雲雀の歌の長閑な春、野山を眞白に色彩する冬、鎮守の杜の紅葉する秋、盆踊り、收穫の祭りなどの外觀ばかりを注意したなら、田園生活は大平に見

える。然し裏面はさうでない。水呑百姓の永の病苦を教區から頼まれて、義理一遍の輕薄な醫者の見舞も憎く、貧乏人の惨めな葬式に、怠慢な僧侶の振舞も忌々しい。

Here, on a matted floor, with dust overspread,
The drooping wretch reclines his languid head,
For him no hand the cordial cup applies
Or wipes the tear that stagnates in his eyes,
.....
Paid by the parish for attendance here,
He wears contempt upon his sapient sneer ;
In haste he seeks the bed where misery lies,
Impatience mark'd in his averted eyes ;
And, some habitual queries hurried o'er,
Without reply, he rushes on the door :
His drooping patient, long innured to pain,
And long unheeded, knows remonstrance vain ;

He ceases now the feeble help to crave
Of man ; and silent sinks into the grave.
.....
Up yonder hill, behold how sadly slow
The bier moves winding from the vale below :
There lie the happy dead, from trouble free,
And the glad parish pays the frugal fee :
.....
The bell tolls late, the moping owl flies round,
Fear marks the flight and magnifies the sound ;
The busy priest, detained by weightier care,
Defers his duty till the day of prayer ;
And waiting long, the crowd retire distrest,
To think a poor man's bones should lie unblest.

たれてゐる。記録を調べて、それに載つてゐる人達の私の歴史を書いたのはよい思ひ付である。"Baptism" では粉屋の一人娘の Lucy が William という水夫と戀に落ち、世間の口が八釜しく、父の怒にふれ、勘當の身となる。井リアムが戦死して、女の手一つにその忘れがたみの男の子を育て、行く。その子が成人して又親となるといふ風に物語を進めて行つてゐる。"Marriage" では洗濯屋の娘に想はれ、乳搾女に戀をされ、結局 Dobson と言ふ圖抜けて亭主孝行の女と並んで祭壇に立つ幸運者の Donald や、放埒な亭主を持つて苦勞を爲抜き、貧乏と病氣にさいなまれて憔悴果て、終ふ、氣立も容姿も申分のない Phoebe Dawson といふ不幸な女などの物語があり、記録に署名したそれらの人々の手跡の上から批評してゐるなど、機智の閃きを見せてゐる。亦 Collins という女が Hill と言ふ實直で親切な男と夫婦約束をしながら、垢抜けのした、いなせな馬丁の Daniel と駈落し、散々苦勞をして男の怖さがわかり、悔悟して歸村し、ヒルの門に立ち、結局ヒルに赦されて、改めて夫婦になる物語に女の浮氣を戒め、男が二十歳にもならないで妻帯するのも善くないが、七十歳近くなつて結婚した者もある、がそれも善くない。生活に餘裕が出来るまで辛抱して結婚するのも結構であるけれども、大事を取り過ぎて、あたら青春の時期を空しくすごすのは惜しいと、その一例を Rubens と Rachel 夫婦に取つてゐる。然し輕卒な結婚と、孰れを取るべきかに就いての比較論も出ると言つた調子である。"Burial" は此世にたつぷり未練を残しながら、死の腕に抱へられた罪の人の臨終か

ら書き出して、良人に早く死別れ、子供達や召使を相手に一人で切つて廻はし、教區の利け者となつて三十年の寡婦生活を續け、爲残した仕事に猶心が残り、もつと生きたいと思ひながら死んで行つた Goe といふ女の話しや、四人の兄弟の中で一番暴れ者で、放蕩を仕盡くした Roger Cuff という男が、兄弟達に見放され、意地から故郷を去り、四十年餘り經過つてから一身代を築いて歸り兄弟達は皆既に亡き數に入つてゐたので、甥や姪の心を試さうとして、乞食姿に身を扮し、順々に門に立ち、冷やかに扱はれて、結局遠縁の Surly John を見込んでその家に身を寄せるまで、人間の片意地や浮薄をさらけ出した皮肉な筆を見せてゐる。"Borough" は "The Church" から始まつて "The School" まで二十三篇の記述を含んでゐる。金満家の子と生れ、二十一歳の時家督を相續し、二十五歳から道樂を始め、家産を蕩盡し、外國へ行つてまでもものは止まず、歸國して偶然遠縁のもの相續人となつたが、その身代も使ひ潰おして、最後に養育院入りは、西鶴の書いた世之助を見るやうな男の "Life of Blaney" や "The Poor and their Dwellings" に貧民の窮狀を歌ひ、その養育院に收容されてゐる人々の生活を記し、偕その養育院の設備について批評し、正直に働き疲れた立派な人間が、破戸者や、やくざな人達と一列に扱はるゝ不當を唱へ、獵人が廢馬を人手に渡さないのは、その馬の勤勞に報いんが爲である。社會の爲に或は國家のために働いて疲れ切つた正しい人達を尊敬し、適當な慰籍の道を講じないのは遺憾であると言ひ、大都會に貧民窟のあるのを、都會の體面を

汚すやうに言ふ人があるけれども、目を驚かす綺麗な宮殿にだつて下水もあれば伏樋もあるなど痛切なことを言ひ、女が密男の胤を宿した場合、女ばかりが非難の的となる片手落の習慣を詰つてゐる。“Ellen Orford”の物語など、現代の Galsworthy の問題劇の縮圖と見られる。“Borough”がクラブの詩中最も卓越してゐると言はれてゐるが、“Tales in Verse”や“Tales in the Hall”の中の話も“Borough”の物語と似たものである。Tennyson の“Enoch Arden”によく似た“The Parting Hour”などは獨り Tennyson ばかりでなく、現代の Maschfield の“The Daffodil Fields”に暗示を與へたに相違ない。“The Patron”の如き、天才肌の詩人 Allen の盛名は永くは續かず、眷顧を受けた貴族からは疎まれ、愛人 Emma からは嘲られ、失望の果は狂氣して死んで終ふ。Tennyson の“Lady Clara Vere de Vere”の如きは此物語の Emma をモデルにしたものであらう。教訓めいた字句の多いのは、ジョンソンに引立てられ、ジョンソンに私淑した爲であるし、グレイでもゴウルドスミスでも、一體にその傾向が見えるのは時代の影響である。

“The Love's Journey”に戀に盲いた男の憔悴を巧に寫し、“Resentment”では欺かれた女の執拗な憎惡を描いてゐる。“Sir Eustace Grey”は狂人の恐怖すべき自叙傳であり、“The Hall of Justice”は浮浪者の罪と報の物語であるなど、人間の心境を巨細に討檢し、その悲劇も喜劇も、長處も短所も併せ窮めて、之を筆に載せたものであつて、總じて厭はしき陰鬱な人生の直寫である。暗い雲の間

から光が洩れるやうな、明るい氣分を誘ふこともあり、タムスンに見た忠實な自然の描寫に心の眼を悦ばせる時もあるけれども、現實曝露を生命とする一部の現代小説家の悲觀的絶望の叫びを聴くやうに、悲惨な醜惡な、汚いさうして怖しい人間の心と住家を好んで描いたのである。クラブは詩壇に於ける寫實主義の小説家であり、人道主義の詩人である。クラブを Rembrandt や Jan Steen や Tenier などの畫家に比べた人のあるのは、その詩が暗い陰氣な、孤立した肖像畫の面影があり、又乞食や酔漢をカンパスに載せた浮世繪の姿があるからである。彼の故郷オールバラの教會の片隅を占めてゐるクラブの胸像を見に行く人が近頃尠なくはないさうである。Cowper や Burns や Wordsworth の詩を好み、現代の詩人 Maschfield や Gibson や Galsworthy の劇や詩に興味をもつ人達ならば、淨いクラブの人格を通して現はれてゐる強い感情に打たれずにはゐないであらう。

第四節 神秘詩人井リアム・ブレイク

天才は狂氣だと言ふ。全然想像の世界にのみ生きる詩人達を科學者の頭腦で判断したら氣違に見えやう。ブレイクの如きはその最も甚しい一人であつた。

千七百五十七年にランダンに生れ、其處に住みつゞけて千八百三十七年に死んだまで、七十年の生涯を、全く子供で過した井リアム・ブレイク (William Blake) は本來畫家であつて、同時に詩人であつたのはダンテイ・ロウゼツタイ (D. G. Rossetti) と同様である。ブレイクは Raphael や Mi-

chael Angelo を學んでその筆勢を會得し、而も彼に特獨の骨法を發揮してゐる。ヤングの "Night Thoughts" やダンテイの "Divine Comedy" の挿畫、殊に聖書の「最後の審判」の畫の如きは、單に形の整つてゐるばかりでなく、想像の深味を示したものである。最初彫刻家で立ち、傍ら詩を書いてゐた。而もその詩には銅板に自ら刻んだ裝飾的圖案を添へ、その印刷した畫に自ら繪筆を採り、或は妻の Catherine Boucher をして彩色を施さしめて賣つたのである。ブレイクの父は貧しい莫大小商人で、ブレイクは勿論高等の教育は受けなかつたけれども、天才には教育の必要は餘りないと見え、十歳の時には立派な畫を描き、十二歳の時には立派な詩を作つてゐたさうである。最初の詩集の "Poetical Sketches" の中には十二歳の頃に書いたものが入つてゐるのである。幼少の時から絶えず夢を見てゐるやうな人であつて、嘗つてランダムの南 Peckham Rye と言ふ處の Dulwich Hill の近邊を散歩してゐた時、丁度夏のことであつたが、蒼空に天人が群集してゐるのを見たど、歸宅つて父に告げて、ひどく叱言を言はれたこともある。神が窓から覗いてござるのを見たどか、草を刈る人達の中に天人が交つてゐたどか人に語り、又或時は「夢の國のその家は黄金で造られ、敷石は悉く銀で、門は寶玉で飾られて、此世に見るものと異つてゐる」と、天國の様子を眼に見るやうに隣人に話したさうであるが、斯る幻想がブレイクの頭腦に浮んだのには理由がある。ブレイクの母が當時評判であつた Swedenborg の信者であつたので、母を通してその感化を蒙つた

ものであらう。ブレイクの豫言的幻想の一例をもう一つ示すなら、ブレイクが十四歳の頃、父がブレイクを伴れて W. Ryland と言ふ彫刻師に弟子入をさせようとした時、ブレイクは父に向つて、「あの小父さんの顔は嫌だ。何だか首でも縊られさうな人だ。」と言つたが、その彫刻師は後年東印度會社に對し文書の偽造したかどで絞罪になつた事實がある。斯うした逸話は數限りもなく多い。ブレイクの終焉は斯うである。病床に横はりながら神に對する自作の詩を美しい聲で歌つた。枕頭の妻は驚いてブレイクの顔を覗くと、「今のは私ではない、私ではない」と繰返し、又室内は精靈で一杯だと言ひ、愈息を引き取る段になつてその眼は輝き、晴々しい顔をして、天國で見たものをいろいろと歌ひ始めたが、側の妻さへ氣のつかない内に、安らかに靜に靈魂は肉體を離れて行つたといふことである。

ブレイクの詩は神秘的で理解し難いものが多い。ブレイクの弟子と名告り、ブレイクを尊敬した友人の一人タサム (Tatham) と言ふ人が、ブレイクの死後、その遺稿を検べて、惡魔の乗り移つた作である、世に害毒を残すものであると言ひ、悉く焼き棄てたが、焼くのに二日かゝつたと言ふことである。焼かれた分は別として、梓に上げされた丈でも可成の分量がある。二十六歳の時に出版した "Poetical Sketches" を始め、六年の後梓に附した "Songs of Innocence"、更に五年の後に公にした "Songs of Experience" など、ケイツァバヌ朝の詩人達の詩に見る、單純で清新な美しい抒情詩

が多い。

Memory, hither come,
 And tune your merry notes :
 And, while upon the wind
 Your music floats,
 I'll pore upon the stream
 Where sighing lovers dream,
 And fish for fancies as they pass
 Within the watery glass.

I'll drink of the clear stream,
 And hear the linnet's song,
 And there I'll lie and dream
 The day along :
 And, when night comes, I'll go

To places fit for woe,
 Walking along the darkened valley
 With silent Melancholy.

を歌つた Song を始め “How Sweet I roamed”, “My silks and Array”, “Love and harmony combine” など “Poetical Sketches” の歌の多くはチャタトンやマクナムの感化によるものは、寧ろイリザバス朝の詩人達に負ふところが深い。同じ詩集の中には “Edward the Third” と言ふ立派な戯曲が一篇收められてゐるし、コウルリツヂの “Chrystabel” に暗示を與へた “Fair Elenor” の如き極めて浪漫的な美しい詩もある。“Songs of Innocence” には思想は單純で幼稚に見えるながら詩情の溢れた “The Lamb”, “Spring”, “The Blossom”, “Infant Joy”, “The Little Black Boy”, “The Chimney Sweeper”, “A Cradle Song” などがある。“Songs of Experience” になると、何の物思ひもない無垢な兒童の心を離れて、浮世の辛酸を嘗めた後の奥深い考を歌つて、物柔かな言葉の中に、身戦かゝる人生の事實を示してゐる。“A Little Boy Lost”, “A Little Girl Lost”, “Christian Forbearance”, “The Sick Rose”, “The Fly” や、超人の理想を歌つた名高い象徴的な “The Tiger” など皆吟誦すべきものである。「よしめし草」 “Ideas of Good and Evil” の中に收められた、長き短き數多の詩も深く味ふべきものである。“The Gates of Paradise” “The

"Prophetic Books" の如き詩集中のあるものに至つては、蒼空の際涯なきがごとく、遠く幽かであつて神秘詩中の神秘なものであつて、嘗て蒙つた Swedenborg や Jacob Boehme の感化の下にブレイク特獨の神秘的思想を歌つたものである。

To see a world in a grain of sand,
And a heaven in a wild flower,
Hold infinity in the palm of your hand,
And eternity in an hour.

これは "Auguries of Innocence" の冒頭に置かれた一節である。臨終がさうであつたやうに、ブレイクの眼にはいつも神が見え、天人が映り、冥界の精霊が浮動してゐた。"Los the Terrible" に、風に駕る亡き父を見、雲に呻く亡き兄を知り、その背後に彼等を退はうとする天人の群を認める。さうして行く手を塞ぐ一本の薊は老人と見える。

..... and before my way
A frowning Thistle implodes my stay,
What to others a trifle appears
Fills me full of smiles or tears;

For double the vision my eyes do see,
And a double vision is always with me.
With my inward eye, 'tis an old man grey;
With my outward, a thistle across my way.

"The Prophetic Books" 以下になると到底、常識では判断が出来ないけれども "The Marriage of Heaven and Hell" の如きは、驚くべき天才の閃光を認めしめる。ブラウニング (Browning) の思想も一部は正しくブレイクの此詩に胚胎したに相違ない。現代のシヨー (G. B. Shaw) 氏の如きも此詩人から受けた感化の跡があるやうに思ふ。「地獄の謠」"Proverbs of Hell" には、一章毎に汲みよりの深い思想が籠つてゐる。

Prudence is a rich, ugly old maid courted by Incapacity.
He who desires but acts not, breeds pestilence.
A fool sees not the same tree that a wise man sees.
The fox condemns the trap, not himself.
One thought fills immensity.
To create a little flower is the labour of ages.

Expect poison from the standing water. etc.

天才は時代を超越する。彼の思索は約百年を隔て、現代の思潮と共鳴を見出してゐる。米國の井ツトマン (Whitman) と共に謳はれるやうになつたのは蓋し當然である。ドライデンやボウブ一派の技巧を擯けて、スベンサやミルトンの自然に赴き、傳統の碇綱を切つて、絶對自由な彼自身の空想の船の行くに任せた。同じ浪漫派の詩人ではあるけれども、クーバやバーンズとは全く異つた道を辿つた。最も豫言的であらうして神秘的な長篇の "Prophetic Books" や "Vala" & "Jerusalem" の如き詩にも、不斷の黒雲に被はるゝ峯をいつかは仰がれやうと待つ心地と、千尋の海底に沈んだ玉を探り當てようと努める忍耐を以て讀んだら、強ち失望しないであらう。ブレイクは十八世紀が産んだ最も神秘的なさうして最も象徴的な詩人である。

尙浪漫派の詩人として記すべき者もあるけれども、古典派の著名な人達を一わたり瞥見した後譲り、ゴールドスミスやジョンソンなどを先づ説かう。

第三章 多方面の人オリヴ・ゴウルドスミス

オリヴ・ゴウルドスミス (Oliver Goldsmith) は純古典主義の詩人ではない。その詩の内容から言つたら浪漫主義の片棒を擔いだ人である。然しジョンソンと親交があつた關係からと、又どこか

くその詩形の上で、ボウブの技巧を追蹤した點から爰處に組み入れたに過ぎない。嚴密に言ふと單に詩人の名を冠すべきものでなく、戯曲も書き、小説も綴つて、この方面にも優越した大文豪である。

ゴウルドスミスは千七百二十八年にアイアランドの片田舎パラス (Paras) と言ふ小村に生れた。父は僧侶で百姓を兼ねて居た。家族が多くて、一年に四十磅の俸給では碌々子女の教育も出来なかつたので、ゴウルドスミスが二歳の時父は Westmeath のリスイ (Lissey) と言ふ他の教區に移つて、収入は増したが生活は樂ではなかつた。ゴールドスミスが六歳の時、村の小學校に通ひ出した。その學校の老先生は軍人あがり、モールバラ將軍の配下について度々戦争をしたし、世間を廣く渡り歩いて豊かな經驗を有つて居り、且つは又アイアランド人であつたので、ケルト文學にも通じてゐた。ゴウルドスミスは此先生の種々な説話に耳を歌て、乳搾女の歌ふはやり歌、盲目藝人の豎琴などの曲調を悦んで聽いた。やがて文字を一通り覚えてからは、小説など貪つて讀んだ。その頃重い痘瘡に罹つて癒りはしたが、醜い痕を顔一杯に残し、元來内氣な子供が一層内氣になつて終つた十七歳になつた時、叔父の世話でダブリンの Trinity College の給費生になりはなつたが、餘り勉強もせず、金が足らず勝であつたので、はやり歌など書いて金にしたり、學生監と争つたりした。四年の後兎もかく學位を取り、家族の人達に勧められ、進まぬながら僧侶になる考で、紹介された監

督に面會はしたけれども、なりふりに無頓着なゴウルドスマスは緋の色の獵服を着けて行つた爲に不首尾に終り、暫時家庭教師などして居た。叔父から金を貰ひ、醫學を修める積りでエディンバラに赴いたのは二十五歳の時であるが、そこにも尻が落ちつかず、一年をそこで財布も心も共に軽く、ライデン (Leyden) に渡り、更に大陸漫遊を思ひ立ち、一磅ばかりのはした金を懐にして、着がへの襯衣一枚と、嗜みの横笛一管を行李に收め、殆んど行きあたりばつたり白耳義、獨逸、フランス、スヰツアランドからアルプスの山越をして、イタリヤ諸國をてくり歩いた。歌を謠ひ、笛を吹いて得た金を宿賃にも食料にも宛てたのであるから、體のよい乞食をしたのである。その頃大陸の大學や僧院で哲學などの辯論會が熾んに催され、飛入勝手で、若し拔群の説を吐いた人を優待したので、ゴウルドスマスもその飛入の仲間入をしたこともある。斯うした放浪生活をつゞけて千七百五十六年にランダムに舞ひ戻り、小學校の助教師になつたが、やがて藥種屋の助手を頼まれ貧乏人などの診察をしてゐた。後再びベカムの或學校の助教師になつてゐた時分 *The Monthly Review* の發行者と知己になつて、その雜誌に筆を執りだしたのが文士としての經歷の端緒であつた。下宿住居をして、種々な雜誌に寄稿し、翻譯など書肆からの依頼を受けて、辛うじて生きて行つた。その間に出版した *An Inquiry into the Present State of Polite Learning* は大陸諸國の遍歴から得た貴い觀察に據つたもので、讀書社會の注意を惹いた。匿名で出版したが、當時文壇の牛耳を執つ

て居たドクタ・ジョンソンの知るところとなり、二年後の千七百六十一年に始めてジョンソンに面會して終生斷金の交を結ぶことになつた。その翌年に *The Citizen of the World* と云ふ傑作を出したが、單純卒直な一支那人がその友人に書き送つた體にして、濃厚な技巧的雰圍氣の中に浸つた社交的ランダム生活を考究し、その風俗習慣の上に忌憚なき批評を下したものであつた。それから一年隔いた千七百六十四年に *The Traveller* を出版し、始めて姓名を明示したが、ジョンソンの後援があつたし、全く獨創的なその詩の價值が認められて、忽ち盛名をなすに至つた。その翌々年 *The Vicar of Wakefield* を梓に上げして、小説家としてのその伎倆を發揮した。此小説に就いて逸話がある。元來ゴウルドスマスは酒も飲み博奕も打ち後先の考のない、萬事やりつばなしの人であつたけれども、莫迦に涙脆い好人物で、他人の不幸を只見ては居られない性分であつたから、相應に収入はありながら、いつも財布は空であつた。下宿料がたまつて、宿の女主人から訴へて出ると脅され、手紙でジョンソンに相談したところ、ジョンソンは取り敢ず一磅の金を封入して送つてやり、その下宿へ行つて見ると、もうその金を酒に換へて、ジョンソンの來るのを待つてゐたと言ふ風である。その時ゴウルドスマスがジョンソンに見せたのが、此小説であつた。ジョンソンはざつと眼を通して、直に書肆へ駆けつけ、六十磅の稿料に換へて歸つたと言ふことである。 *The Vicar of Wakefield* を書いてから戯曲に筆を轉じ、千七百六十八年に *The Good-Natured Man* が Co-

vent Garden で上演された。それから二年目に名高い "The Deserted Village" を公にし、千七百七十三年に第二の戯劇 "The Sloop to Conquer" を出してゐる。その翌年の四月、神経性の熱を病つて死んだが、その年に "History of Greece" と "History of Animated Nature" とが出版されたけれども、既に著した "History of England" (1764) 及び "History of Rome" (1769) と共にその文章が佳いばかりで、歴史としては全く價値のないものであつた。

デョンスンが始めてゴウルドスミスに會つた時、假髪の手入れをし、きちんと服装を整へて出掛けたのは、ゴウルドスミスが至つて無精者で子供らしい男だと聞いて、少しは身だしなみの必要を教へてやる考であつたさうであるが、持つた癖は脱けず、時には刺繍のこつてりとした着物を買つて見たり、惜氣もなく金品を人に與つたり、しつきりなしに友達と會飲して、入る程の金はおろか、借錢してまでばつばと使ひ棄て、此世へ置土産の借金が二千磅に上ぼつてゐたとは嘘のやうな話である。ウエストミンスター寺院に此文豪を記念する額が置かれてゐるけれども、遺骸はテンプル・チャーチの墓地に葬られて、今はその在所すら明らかには知られてゐない。

第二節 詩人としてのゴウルドスミス

既に名を記した二つの詩「旅人」"The Traveller" と「荒村」"The Deserted Village" は共に詩人自身の體驗を歌つたものである。クーバやバーンズの觀察は英國の局部に限られたが、ゴウルド

スミスのそれは極めて範圍が廣汎であり、かつ變化に富んでゐる。機微を穿つた人生の考察と自然の描寫は、同じヒロウイック・カブリットを用いた詩ながら、ポップ達の人工的の詩とは全くその撰を異にしてゐる。

The naked negro, panting at the line,

Boasts of his golden sands and palmy wine,

Basks in the glare, or stems the tepid wave,

And thanks his gods for all the good they gave.

Such is the patriot's boast, where'er we roam,

His first, best country ever is at home.

And yet, perhaps, if countries we compare,

And estimate the blessings which they share,

Though patriots flatter, still shall wisdom find

An equal portion dealt to all mankind;

As different good, by art or nature given,

To different nations makes their blessings even.

斯くして "The Traveller" は遍く足跡を印した國土に就いて、その國情を覗い、風光を賞してゐる。アピンナインの峯高く聳え立つところ、斜面緩かに延びて、森又森を重ね、古剝の莖、樹間に見えがくれするイタリアの天恵を思ひ、土地は海面より低く、海は常に外より脅せど、黄花の鶯、柳の堤、滑り行く帆、平野のよく耕され、市場に人の群がるオランダの天福を祝ひ、公平無私なる神の攝理を蒙れる國民の幸福を説いた韻文を以てした一種の論文である。"The Deserted Village"、に Lissoy の村を Auburn の名に變へて、幼時の追憶を恣にしてゐる。

Sweet was the sound, when oft at evening's close
Up yonder hill the village murmur rose ;
There, as I past with careless steps and slow,
The mingling notes came softened from below ;
The swain responsive as the milkmaid sung,
The sober herd that lowed to meet their young ;
The noisy geese that gabbled o'er the pool,
The playful children just let loose from school ;
The watch-dog's voice that bayed the whispering wind,

And the loud laugh that spoke the vacant mind ;
These all in sweet confusion sought the shade,
And filled each pause the nightingale had made.

其村の牧師は詩人自身の父であつた。清貧に甘んじて、その職責を完ふし、道心堅く、嚴格ではあつたが、又慈悲深く、柔和な人で、顎鬚を長くのばした乞食爺父もその牧師に話しかけたし、放蕩のために零落した遠縁の男が泊つてゐたし、廢兵が爐火を圍んで、撞木杖を鐵砲に見立てての昔話に興を覺えたなご思ひ出が盡きない。その村の學校の先生といつたら、

A man severe he was, and stern to view,
I knew him well, and every truant knew ;
Well had the boding tremblers learned to trace
The day's disasters in his morning face.

するい怠惰者の生徒の一人は詩人自身ではなかつたか、その懐しい村も、次第に富豪に土地を買ひ取られ、其方此方に宏壯な建物がたち、贅澤な人達が入り込むやうになつて、外觀は面目を新にしたやうに見えて、土着の住民が他所に移ると共に一村は荒廢れて終つたと、具に農民の窮狀を歌つて、富の濫用と奢侈の害毒を諷刺してゐる。

同じアイアランド人でもスプリフトの如き底意地の悪いひねくれた皮肉はなく、快活で恬淡でさうして呑気な氣性が現はれて、“*Relation*”の如き諷刺詩でも最も温み親しみを見せてゐる。一寸とした道化芝居を見るやうな“*The Hunch of Venison*”なども面白く讀まれるし、“*The Hermit*”の如き新しくはないけれども上品なBalladである。

第二節　ゴウルドスマスの戯曲と小説

小説を真に味ひ得る人がさうかの試金石だと言はれてゐる“*The Vicar of Wakefield*”は、*イルデイン*やリチャドソンの作物と竝んで遜色のない傑作である。ドクタ・プリムロウズといふ家族の平和な家庭生活を描いたもので、そのプリムロウズは作家自身の父を宛てたものであるから、謂はゞ幼少の時代の思ひ出の記である。書き出しにドクタ・プリムロウズかその妻を迎へた當時を物語つて斯う言つてゐる。

I was ever of opinion, that the honest man who married and brought up a large family did more service than he who continued single, and only talked of population. From this motive, I had scarce taken orders a year before I began to think seriously of matrimony, and chose my wife, as she did her wedding-gown, not for a fine glossy surface, but for such qualities as would wear well. To do her justice, she was a good-natured notable woman;

and, as for breeding, there were few country ladies who could show more. She could read any English book without much spelling; but for picking, preserving, and cookery, none could excel her. She prides herself also upon being an excellent contriver in housekeeping; though I could never find that we grew richer with all her contrivances.

詩と同様にゴウルドスマスの散文が、極めて明晰で平易で而も情味のふかい達意の文章であることを認めしめる。プリムロウズ夫婦の間にはジョージを頭に六人の子がある。その内二人は女であつて、オリヴィア (Olivia) が十八歳、ソフィア (Sophia) が十七歳で、共に纏綴良しである。長男のジョージは井ルモットと言ふ僧侶の娘アラベラと、結婚の話が進んでゐたのであるが、プリムロウズの持論の非再婚論を井ルモットが讀んで意見の扞格を來したところへ、プリムロウズ家の身に直接大關係のあつたある商人の破産があり、ジョージの縁談は破棄される。それやこれやで生計の困難から七十哩も隔つたある村に移り、草屋住ひをすることになり、ジョージはランダンへ出るその途中、宿屋で勘定に困つてゐる一紳士に出逢ひ、プリムロウズは自分の困難を忘れてその男の拂をしてやる。その紳士はミスタ・バーチェル (Mr. Burchell) と名告つてゐる。その旅程の一部を共にする内、出水した川を渡る時分、ソフィアが馬から落ち、危ふく溺死する處をバーチェルが救助することなどの事件がある。借目的の村に着いてから、ふとしたことで近所の豪士ソーンヒル

といふ男と懇意になり、家族は地味な生活から、稍華美を追ふやうになる。殊に占術師に見て貰ふ *Olivia* は文豪を、*Sophia* は貴族を良人に持つ運勢があると言はれ、それ以来母も娘達も言葉抜ひから、趣味から凡て高尚にと志し、朝徹暗い中に起きるのは眼の毒、夕飯後に働くと鼻が赤くなる、日向へ出ると日に焼けて皮膚がある、一々難癖をつけて家の中で暮らすはよいが、用事を避けて兩手を遊ばせてぼんやり過す日が多くなつた。他人が家族の書を描かせるからと、流行に釣り込まれて、オリヴィアを花咲き香ふ堤に一人の Amazon に見立て、坐らせ、ソフィアを羊群を率ゐる牧羊女にし、家族でもないのにオリヴィアの足許にアリグザンダ大王 (Alexander the Great) に擬したソーンヒルを描かせ、ブルムロウズと Venus に見立てられたブルムロウズ夫人とキエビッドに二人の幼い男の兒を當てなとして書が出来上つたが、餘り大き過ぎて室に持ち込めず、臺所の壁に掛けて近處の物笑ひとなることなど例の軽い筆致を見せてゐる。とかくする中に *Olivia* が何者にも知れず誘拐される。ブルムロウズが娘の搜索に出て、三週間餘り旅宿で病み、搜索を思切り歸宅の途中、田舎廻りの俳優團中の新俳優の一人がランダンへ運命の開拓に出て行つた長男のブルムロウズであることが知れ、久方振りて親子の對面をする。尙旅行を續ける中に、とある小さな旅籠屋に泊り、尋ねるオリヴィアに逢ひ、オリヴィアを誘拐した男がソーンヒルであつて、オリヴィアはソーンヒルと結婚したことを告げる。ブルムロウズは此吉報を一刻も早く家族に報知せよと道

を急ぎ、もう五哩ばかりで家に着く段になつて、オリヴィアを一軒の旅宿にとめて一人で夜半に歸宅つて見ると、自分の家から火が出て、家財も二人の娘の爲の銀行手形も悉く烏有に歸して終ふ。ブルムロウズは飛び込んで二人の幼い兒丈を救ひだす。重ね重ねの不幸に諦めのよいブルムロウズは *Now let the flames burn on, all my possessions perish, I have saved my treasures, and we shall yet be happy.* と自ら慰める。焼け残つた一棟の離家に翌朝オリヴィアを迎へたが、借銭の爲にブルムロウズ自身入牢の憂き目を見ることになる。獄中に有つても道を説くことを忘れないヴィカ (*Vicar*) は *the heart that is buried in a dungeon is as precious as that raised upon a throne.* Yes, *if I can mend them, I will.* 一人でもそれらの囚人の中から改心者を見出し得れば大きな利得である、人間の靈魂に比すべき貴きものは世にはないと言つてゐるなど、常に正道を踏んで、困厄の中に希望の光を失はなかつた堅い信仰と忍耐は結局報ゐられて、出獄すると共に、ソフィアはバーチエルに嫁ぐことになる。バーチエルは豪士ソーンヒルの叔父で、ソーンヒルの様子を見に名を變へて來た人であつたので、オリヴィアは當然豪士ソーンヒルの妻となるし、ジョージとアラベラの結婚もまどまる。ブルムロウズが失つた財産も破産した商人が拘留されて、その一部はブルムロウズの手に入らぬ、萬事都合よく晁がつく。此物語りの話し手のヴィカが最もよく描かれてゐるし、その他の人物もそれぞれ如實に寫されてゐる。小説としてその脚色に無理もあらう、矛盾もあらう、

けれども読んで肩が凝らず、不快な感じの起らないのは、無邪氣な快活な作家自身の性格がズイカに反映されてゐるからである。

「お人好し」"The Good-natured Man"と「屈んで勝つ女」"She Swoops to Conquer"の二つの喜劇にあつても、ゴウルドスミス自身の傳記に見た寛大な親切な、さうして金銭使ひの荒い氣性をその主役の人物に描いてゐる。「お人好し」の Honeywood といふ若者の如き、他人と共に笑ひ、他人と共に泣く、全く他人本位の男である。物を盗まれても It's enough that we have lost what he has stolen, let us not add to it the loss of a fellow-creature! と言ふは慈悲が深い。莫迦らしい程の單純な氣性を呑み込んでゐる叔父の Sir William Honeywood はハニウッドが可愛くて仕方がない。叔父はその財産を悉皆譲る考である。世間の人が皆ハニウッドを愛敬してゐると聽いてゐるが、若しハニウッドが借金で首が廻らなくなつた時、その友人の誰が援助するかそこいらも少しはハニウッドに見せてやらうとハニウッドの召使のジャーグイスと密に計畫を廻らす。ハニウッドの友人に又クロウカ (Croaker) と言ふ、是も極めて好人物の男が居る My wife has so encroached upon every one of my privileges, that I'm now no more than a mere lodger in my own house! と言ふ程嫌天下であるけれども、その妻を憎んでは居ない。クロウカ夫人も取りしきつて一家の采配を振つてゐる、快活な惡氣のない女である。クロウカには Leontine といふ息子がある。

クロウカは後見をしてゐるリッチランド (Miss Richland) をリオンタインと結婚させたがつてゐるけれども、リオンタインにはオリヴィアと言ふ愛人がある、リッチランドはハニウッドに密に想を掛けてゐる。リオンタインは親が赦さうもないのでオリヴィアと蘇國へ出奔しようとし、ハニウッドに相談する、ハニウッドは無理算段までしてその旅費を調達する。ミス・リッチランドがハニウッドを訪ねると其處へ執達吏が來てゐる。ハニウッドはその執達吏を友達だと胡魔化する。ハニウッドは全く叔父の言ふやうに Ever busy to serve others である。物質的にはかりでなく、精神的にも他人の爲に奉仕を辭さない。リッチランドに懸想してゐるロフティ (Lofly) といふ男から媒介を頼まれ、I will discard the fondling hope from my bosom, and exert all my influence in his favour. And yet to see her in the possession of another! — Insupportable. と獨語しながら、自分を信じてゐる友達を裏切ることにはそれ以上に苦しい。二人の幸福の爲に媒介の勞を取つた上は、自分の幸福を見出すあてのない此土地を去るばかりだと言ふほどの自我のない人である。然しハニウッドは叔父からも散々たしなめられて (Yes, sir, I now too plainly perceive my errors. My vanity, in attempting to please all, by fearing to offend any. My meanness in approving folly, lest fools should disapprove. Henceforth, therefore, it shall be my study to reserve my pity for real distress; my friendship for true merit, and my love for her, who first taught me what it is to be happy.)

と反省するところがあり、又發明するところがあり、ロフテイもリツチランドに對する結婚の意志を翻して、萬事順調に覺がつくといふ筋である。お人好しも結構であるけれども、程度を越えること却つて他人の笑種になる。他人の思はくばかり考へて、善惡の差別なしに附和雷同するのは無定見の醜を招くであらう。傲慢はよくないけれども、自尊心がなければならぬといふ様な意味を諷してゐるのである。

「屈んで勝つ女」：「*She Swoops to Conquer*」が喜劇として「お人好し」より遙に賑やかで面白いのは茶番狂言めいた事件が續出するからである。此劇が又の名を一夜の間違ひ「*The Mistakes of a Nigelt*」と言ふ丈あつて、*Tony Lumpkin* と言ふ若者のきまぐれの惡戯が一夜に幾多の間違ひを生んで、觀衆に痛くないほどに腹をよらせる。トウニはハードカースル (Mrs. Hardcastle) 夫人が後妻にハードカースルへ縁付いたときの連子で、丁年に達してゐるのであるが、夫人が自分の年齢を隠すために、トウニの年齢を偽つて、全然子供扱ひにしてゐる。それを横着なトウニはよい氣になつて、甘え放題、母親の臍縁金を捲きあげては友達と茶屋酒に浸つてゐる。ハードカースルには一人の娘があつて、舊友サー・チャールズの息子のマールロウ (Marlow) に配はしたい心が親同志にある。サー・チャールズは息子を紹介傍々ハードカースルを訪ねさせることになり、マールロウは友人のヘステインクスと共にランダンから遙々やつて来る。サー・チャールズから豫め通知があつたので、ハ

ードカースルは心待にマールロウの到着を待構へ、娘にもその旨を言ひ含め、マールロウの人物など話してゐる。マールロウ達が黄昏にハードカースルの家を探ねに立寄つた料亭には、例のいたづら者のトウニ達が飲んでゐて、ハードカースルの家がつい目と鼻の間にあるのにまわりくどく道を教え、迎もその夜の間合ひさうもないので宿屋を訊けば、どこまでも意地悪くふざけて、ハードカースルの家を宿屋にして教えるばかりでなく、その宿屋の主人乃ちハードカースルが頗る格式ばつた、頭の高い男であるやうに吹き込む。ところでマールロウはハードカースルの家をすつかり宿屋と思ひ込み着く早々パンチの註文をしたり、夕食を急がせたり、寢室の案内を命じたりして滑稽が百出する。ハードカースルはマールロウが極内氣な素直な、碌々物も言へない若者と思ひこんでゐたのが案に相違し、その無遠慮に呆れ、失禮を内心に憤るけれども、友達の息子ではあり、未來の女婿と思つて、よき程にばつを合せたが、餘り勝手氣儘なマールロウの振舞を腹に据えかねて退去を求め、宿屋の主人が客に退去、しかも夜遅く退去を迫る理由はないとマールロウも立腹して、言葉争に花を咲かせる。結局サー・チャールズが来て、凡てトウニの惡戯とわかり、笑つて話をつくのであるが、ハードカースルの姪のネルヰイルに親譲りの財産があり、寶玉類などしこたま所有つてゐるのがハードカースル夫人の慾心を唆り、トウニとネルヰイルを一緒にさせたい下心であるが、生憎とネルヰイルにはマールロウの友達のヘステインクスが愛人なので、ネルヰイルとヘステインクスの失奔の段取になり、

更にトウニが又悪巫山戯をして、闇の夜に母のハードカースルを引張り出し、遠くネルヰイルの迹を追ふと見せて、近處中馬車を驅り立て、ハードカースルに見つかる滑稽の場面が加はり、始から終りまで面白づくめの輕妙な脚色と筆致を味はしめてゐる。此喜劇はゴウルドスミスが子供の時分自身實際に経験したことを種にしたのだと言ふことであるが、「お人好し」にしろ又此喜劇にしろ、作家自身の無邪氣で善良な性格が幾多の人物を通して滲み出してゐる。適々腹黒い人間も現はれはするけれども、おほかたどれもこれも氣持の好い人達ばかりである。彼王政復古期の喜劇に較べると蓋に上品で、さうして又遙に普遍的なものになつてゐる。王政復古期の喜劇は既に全く上演され難いものとなつたけれども、ゴウルドスミスの此二つの喜劇は今日でも舞臺に上げて相當に觀衆を引きつける力はあると思ふ。「屈んで勝つ女」を上演した時分が、ゴウルドスミスの文壇生活の全盛期であつて、湧き返へるやうな人氣を集めたものであつた。擱んだ丈の金は悉く散じて、死んだ時分に残したのは借金丈であつたのは既述の通りであるが、彼の死報を聞いたレヌルツ (Reynolds) は直に刷毛を措いて、その日一日書室に入らなかつたし、バーク (Burke) はへ男泣きに泣いて、その死を悼んださうである。ゴウルドスミスは十八世紀が生んだ大なる詩人の一人として、秀れたる小説家として、又戯作者として、極めて人間味に富んだ、言ひ知らぬ親しみを感ぜさせる文豪である。

第四章 十八世紀文壇の覇者サミュエル・

チヨンスン

第一節 チヨンスンの詩

名聲の頓に擧らむことを希ひ、一身の榮達を夢みし人達の殆ど總てが、或は權門に阿り、或は富豪に諂ひ、ひたすら好個の愛讀者を求むることに心を砕いたのは十八世紀文壇の通弊であつた。ポウプやステイルの如き例外はあつたけれども、ポウプの如きはその性格が然らしめたと言はんよりは、寧ろかゝる必要を感じない境遇に置かれてゐたからである。微賤より身を起し、絶えず貧困と戦ひながら、全く獨立獨歩の行動を取つて、着々文壇に搖ぎなき地盤を堅め、該博の學識と公平の批評と高潔の人格の力によつて、周圍から聖者の如くに渴仰され、君主の如くに尊重されたチヨンスンの如きは蓋し異數である。

サミュエル・チヨンスン (Samuel Johnson) はリチフィールド (Lichfield) の貧しい書肆の子であつた。千七百九年に生れたが、三歳の時瘰癧と言ふ病氣に罹り、王者の手が觸るとその病は癒ると言ふので、父に連れられ、ランダンの出て女王アンの御手に觸れたけれども癒らなかつた。顔も躰も大柄な子供であつたが、病氣の爲に醜く歪んだ顔になつて了ひ、顔丈ならよいが、精神までもその影響を受けて、いらいらと氣短かに、さうして妙に鬱ざ込む癖がついて、一生それが脱げずに

了つたのである。デヨンスンの學問の經歷を言ふと、リチフィールド語學校から進んで、十九歳の時にオクスファードのペンブロウク・コレツヂに入つたけれども、その間に何くれと手當り次第に貧り讀んで他日文壇に雄飛すべき素地を築いてゐた。大學在學中、讀書好きのデヨンスンの將來に、多大の望と誇りを感じて居た理解ある父親を失つたのは、デヨンスンに取つては、大なる打撃であつたに相違ない。家族の生計の不如意から、心ならずも學位を握らずに大學を去り、一時田舎の學校教師をしたが、一ヶ處に永く尻が落ちつかず、幾度か務め先を變へた。尻の落ちつかないのは容貌の醜かつたばかりでなく、無性つたらしい、さうしてぶつきら棒な態度や、むかつ腹を立て易かつた、その性格が兒童を教ふる柄ではなかつたからである。大學の學生時代は随分苦學をして、ぼろぼろの制服を被り、垢染みた襦袢を着て、穴の明いた靴から足の指が覗いてゐたものである。或時デヨンスンの貧乏を同情して、その室の戸口に新しい靴を一足置いてやつたものがあつたとき、デヨンスンは之を見てひどく立腹し、その靴を二階から蹴落したことがあつたさうである。極めて蠻からな行動の中に稜々として犯しがたき氣魄が溢れてゐた。この負けじ魂は幼少の時からあつた。一人の友人の脊にその大きな軀幹をもたせかけ、お馬ごうごうと言つた形で、左右から二人の友達に支へさせて、毎朝小學校通ひをしたもので、どこまでも人の頭に立たねば承知しなかつたのである。世の中へ出て同様に、彼辭書の編纂に従事した時分、何しろ大きな仕事なので、當時の有力者のチスタフ

イールド卿の援助を仰ぐ考で、先づ手紙を書き、屢々訪問したが、デヨンスンが他日文壇を風靡する大人物にならうとは思はなかつたチスタフイールドは、度々留守をつかつて面會を謝絶したり、適々面會しても幾時間も應接間に待たせて置いたりした。デヨンスンはぶりぶり怒つてチスタフイールドからの保護をふつつり斷念した代り、略ぼ辭書が完成した時分、献題して貰ひたいやうな口吻を洩らしたのを人傳に聞いたデヨンスンは、書面で散々嫌味を並べ、日頃の鬱憤を晴らした。萬事斯う言つた調子で押し通したのである。無骨一遍のデヨンスンに艶種がひとつある。デヨンスンが二十二歳の時、ポータと言ふ寡婦と結婚したのがそれである。ポータはデヨンスンより二十一年齡上で、もう五十に間もない姥櫻であつたが、紅粉の身たしなみを忘れず、けばけばしい衣服を纏つてゐたと言ふことである。デヨンスンは無教育で而もちんちくりんのポータに首つ丈惚れ込んで終ひ、ポータはポータでこんな話せる人に逢つたことがない。ぞつこん打ち込んで、謂はゞ相惚れの夫婦仲は極めてよかつたさうである。結婚後リチフィールドに近いイデイアル (Edial) で私塾を開いたが、生徒は僅かに五六人で、生活の足にも何にもならなかつたが、生徒の中にデヴィッド・ガリック (David Garrick) が居た。ガリックは後年有名な俳優になつてから、デヨンスンの書いた悲劇「アイリーニ」(Irene) を舞臺にかけたこともある。「アイリーニ」はガリック達を教へてゐた頃書いたので、マホメット (Mohomet) がコンスタンティノウブルを陥れた時分、アイリーニと言ふギ

リシャの若い美しい女と戀に落ち、結婚するつもりであつたのを、部下の兵士達が聽いて異議を唱へ若しマホメットが部下の意見を用ゐなければ、謀叛を起し兼ねない形勢になつたので、部下の兵士や貴族達の目の前で、アイリーニの髪を掴んで引き立て、無慘にもその劔を抜いて彼女の首を刎ると言ふ筋である。ガリツクが車輪になつて演じたので多少の注意を惹いたやうなもの、デヨンスンは斯ういふものを書くには不適任であつた。彫琢を経た措辭の技巧を認めさせる丈で、戯曲として何等感激を起さしめない、情熱に乏しい作物であつた。戯曲よりは寧ろ同じ頃に書いた「London」の如き詩に成功した。此詩はランダン市を中心として、その時代の生活に觸れた諷刺詩であつて、丁度デューヰイナル (Juvenal) が物質的文明に陶醉して、文學を閑却した羅馬市民に對して痛馬をあげせたその諷刺詩に倣つたものである。デヨンスンが此詩から得た報酬は僅に十ギニに過ぎなかつたけれども、當時詩壇の第一人者であつたボープの注意を喚起し、好意を寄せられたのは物質以外の獲物であつた。貧乏のどん底にあつたデヨンスンが、同じ糊口の爲に鯁鯁と苦しんでゐたサグエーシに同情し、黄金萬能のランダン生活を斯う歌つた。

A transient calm the happy scenes bestow

And for a moment lull the sense of woe.

At length awaking, with contemptuous frown

Indignant Thales eyes the neighb'ring town.

.....

Has heaven reserv'd, in pity to the poor,

No pathless waste or undiscovered shore?

No secret island in the boundless main?

No peaceful desert, yet unclaimed by Spain?

Quick let us rise, the unhappy seats explore,

And bear oppression's insolence no more.

This mournful truth is everywhere confessed,

"Slow rises worth by poverty depressed!"

But here more slow, where all are slaves to gold,

Where looks are merchandise and smiles are sold;

Where, won by bribes, by flatteries implored,

The groom retains the favours of his lord.

上記引用中の Thales はサッヰイシに當つたものである。同病相憫んだデヨンスンは此「London」

を公にしてから七年目の千三百四十四年にサヴィジの傳記“*The Life of Mr. Richard Savage*”を
 紀念に書いて残した。サヴィジのことを書いたのは“*London*”のほんの一部に過ぎない。衆議
 院の演説などを“*The Gentleman's Magazine*”に報導したり、多少政黨にも關與してゐた關係から、
 デュンズン自身の生活の苦境を翹へてゐると同時に、その政黨員としてのデュンズンの感情の一端
 を洩らしたものであつた。

デュンズンに尙一つ名高い詩がある。悲劇「アイリートニ」が上演された同じ年の千七百四十九年
 に「人間の願望の虚榮」“*The Vanity of Human Wishes*”を著した。“*London*”と同詩形の、ヒ
 ロウィック・カブリットを採つてゐるけれども、既にデュンズンの聲名は噴々として文壇を威壓して
 ゐた時代であつたから、“*London*”に見たやうな熱烈な、さうして活氣に充ちたものでない代りに、
 ぞつしりと重味のある落付きのこれた詩であつて、よく條理を立て、人間の踏むべき道を訓へてゐ
 る。貧苦の中に學問を修め、辛酸を嘗め竭し、人情に厚かつたと共に宗教心が深かつた、デュンズン
 の風格が浮んで見えてゐる。

Where then shall Hope and Fear their objects find?
 Must dull suspense corrupt the stagnant mind?
 Must helpless man, in ignorance sedate.

Roll darkling down the torrent of his fate?
 Must no dislike alarm, no wishes rise,
 No cries invoke the mercies of the skies?
 Inquirer, cease; petitions yet remain
 Which Heaven may hear, nor deem religion vain.
 Still raise for God the supplicating voice,
 But leave to Heaven the measure and the choice.
 Safe in his power, whose eyes discern afar
 The secret ambush of a specious prayer;
 Impore his aid, in his decisions rest,
 Secure, whatever he gives, he gives the best.

頗る道學的である點がボウプの「人間論」を読むやうな感じがするし、引き締つて語句に無駄の
 ない調子のよい點からも又ボウプの詩を偲ばしめてゐる。高尚な嚴肅なその感情と共に穩健な批評
 の能力を示したものに「ドルリ・レーン座の開場の際しての前口上」“*The Prologue Spoken at Open-
 ing of Drury Lane Theatre*”があり、ミルトンの孫に當たる一女性の爲の慈善興行に“*Comus*”が

上演されたとき、友人ゴウルドスミスの“*The Good-natured Man*”のために書いた“*Prologues*”も、詩人として、又批評家としてのデヨンスンの價値を語るものである。然しデヨンスンのデヨンスンたる眞價は、戯曲よりも詩よりも散文にあつたのである。

第二節 デヨンスンの散文

千七百五十年から二ヶ年デヨンスンは雑誌を經營した。六年間ばかり間を隔て、千七百五十八年から千七百六十年へかけ又二ヶ年餘り雑誌を發刊した。前の雑誌の名は“*The Rambler*”で、後の雑誌は“*The Idler*”と稱した。アデイソンの“*The Spectator*”に倣つたものであつたが、同じ風教の向上を企圖しながらも、デヨンスンの識者振つた片苦しい筆意は、アデイソンの世話にくだけた輕妙な甘味がなかつたけれども、デヨンスンの如き文壇の名士が新聞に執筆したことは、出版事業が如何に隆昌を極め、又社會的に一大勢力を占めてゐたかが理解される。大陸との交通も便利に且頻繁になつて、フランスの文豪モンテスキュー (*Montesquieu*) ヴォルテア (*Voltaire*) ルーソオ (*Rousseau*) デイデロー (*Diderot*) なみの著書も英國の文壇を賑はしたし、ドイツのレッシング (*Lessing*) ゲーテ (*Goethe*) シラ (*Schiller*) 達の書いたものも熾に讀まれて、英國の文藝の進歩は著しいものであつた。その文運の隆盛が生んだ最も大きなデヨンスンの著述は千七百五十五年に出版した「辭書」“*English Dictionary*”である。

デヨンスンの辭書は、語學的研究の幼稚であつた時代の産物である爲に、語源の考證が行き届いてゐない。殊にチュートン語の知識が殆んど絶無であつたデヨンスンに、その方面の誤謬が少なくないのは、少しも怪しむに足らない。その代り各語の定義は可成正確であり、又抱括的であつて、普く古今の文献を涉獵した、趣味の深い詩や散文の引用文に充たされてゐる。餘り健康でもなかつたデヨンスンの手一つで、千七百四十七年から千七百五十五年まで、まる八ヶ年の星霜を閲して編纂されたものであるを思ふとき、その絶倫の精力と慘憺の苦心とに對して、後の世の語學者や文學者は深甚の敬意と感謝を献げねばならない。デヨンスンの辭書の出る二十年ばかり前に *Nathaniel Bailey* の“*An Universal Etymological English Dictionary*”の編纂があつて、多大の便宜を得たに相違ないけれども、「*ボズウェル*」に「*So stupendous a work achieved by one man, while other countries had thought such undertaking fit only for whole academies. 〆*」と激賞したのも無理もない空前の大著述であつた。デヨンスンの抱負の一端はその緒言の中に洩されてゐる。

In hope of giving longevity to that which its own nature forbids to be immortal, I have devoted this book, the labour of years, to the honour of my country, that we may no longer yield the palm of philology, without a contest, to the nations of the continent. The chief glory of every people arises from its authors; whether I shall add anything by my own writ-

ings to the reputation of English literature must be left to time : much of my life has been lost under the pressure of disease ; much has been trifled away ; and much has always been spent in provision for the day that was passing over me ; but I shall not think my employment useless or ignoble, if by my assistance foreign nations, and distant ages, gain access to the propagators of knowledge, and understand the teachers of truth ; etc.

此辭書に折々奇抜な定義のあるのは周知の事實である。スコットランド人に對して偏見のあつたデモンズは oats の定義にちでそれを書してゐる。

“ A grain which in England is generally given to horse, but in Scotland supports the people ” と皮肉つて、燕麥は馬に食はすものたる言ふことを特にシエイクスピアやスプリットの作物から例を引いてゐる。猶此辭書が普通の辭書と大分毛色の變つてゐる例を friend の言ふ語に取る。

Friend (vriend, Dutch ; freond, Saxon. This word with its derivatives, is pronounced frend, friendly : the i totally neglected). 1. One joined to another in mutual benevolence and intimacy ; opposed to foe or enemy. 2. One without hostile intentions. 3. One reconciled to another : this is put by the custom of the language somewhat irregularly in the plural number. 4. An attendant, or companion. 5. Favourer, one propitious. 6. A

familiar compellation.

とあつて、各定義に就いて聖書やシエイクスピアやドライデンやカルウやミルトンなどから一つ二つ宛例文を擧げてゐる。例へば

1. Some man is a *friend* for his own occasion, and will not abide in the day of the trouble. — (Eccles. vi. 8.)

God's benison go with you, with those

That would make good of bad, and *friend* of foes.

— (Shakespeare.)

.....

3. My son came then into my mind ; and yet my mind

Was then scarce *friends* with him.

— (Shakespeare's *King Lear*.)

If she repent, and would make me amends,

Bid her but send me hers, and we are *friends*.

と言つた調子である。

ジョンソンが "The Idler" と云ふ雑誌を出してゐた頃、九十歳の高齡に達して他界した懐しい母の爲に見つともなくない丈の葬儀を営みたいと思つたけれども、金がなかつたので一週間餘りぶつ通しに書齋に引籠り、一氣呵成に書き上げたのが "Rasselas" といふ小説である。何一つ足らぬことのない幸福な月日の下に生れたアビシニアの皇子ラセラスが、その平和なしかも單調な生活に厭いて、仲よしの妹と、それに詩人でさうして哲學者の Imiae を加へて、一行三人がその幸福な齋を逃げ出し、世の中を遍歴して幸福を求めたが、畢竟世の中は罪惡と不幸の住み家であり、完全な眞實の幸福は此世にはないことを經驗して、元の古巢の "The Happy Valley" に立ち戻るといふ筋である小説と言ひ條、謂はゞ一種の道話であつて、classic のひとつに數へられ、今日でも汎く讀まれる作物である。全體に悲調を帯びてゐるのは、父から遺傳したものだと言ふジョンソン自身の憂鬱な性質と、その辛い愁しい世渡の經驗の反映に外ならないのである。然しラセラスを書いて二年餘りの後、ジョージ三世の即位と共に一年三百磅の年金を賜ふ旨の恩命を拜受したのは、多年學界に貢献したその勞力が報ゐられたのである。千七百七十三年と言ふと、ジョンソンはもう六十の坂を四つばかり越してゐたが、ボズウエルに勧められて、スコットランドの荒地を跋渉し、まだ多く人の知らない

かつたヘブリデーズ (Hebrides) の島々への行脚を思ひ立ち、その印象記を二年の後に出版して "The Journal to the Western Isles of Scotland" と稱したが、此旅行記は同行のボズウエルが書いた旅行記の方が精致で興味が深いと言はれてゐる。ジョンソンの「詩人傳」"The Lives of the English Poets" が又二年程経つて梓に付せられたが、ゴス (Gosse) 氏の言ふやうに、是こそジョンソンの傑作で、批評家としての彼の聲價の存するところのものであるかも知れない。博識を望むのでなく、寧ろ智力の刺戟を望む人達は、獨斷的なジョンソン一流の意見に同意が出来ないまでも、我慢と辛抱があれば必ず面白く讀むことが出来ることなほ。Addison の "Accounts of the Greatest English Poets" がシェイクスピアを逸して非難があるやうに、ジョンソンの「詩人傳」にはミルトンやグレイに關する評論が餘りにあつけない。薄過ぎてゐる。クーバ (Cowper) の如き温厚な人でさへミルトンを扱つた部分に讀み及んで、その偏頗を憤り、I could thrash his old jacket till I made the pension jingle in his pocket. と教團いたさうである。それに反してボウブヤカウリ (Cowley) に對しては餘り厚過ぎてゐる。今日カウリを最も正確な詩を書いた人とは誰も考へはしないし、エトマンド・スミス (Edmund Smith) を偉大な人間と見る人もない。而もジョンソンの扱つた詩人達の大半はもう誰にも讀まれないのである。然し批評は自由であらねばならない。それが正鵠を得て居やうと居まいと深く咎むることは出来ないし、又故人に對する批評は時代と共に

變ることもある。シエイクスピアでもトルストイからは一流の戯曲家は愚か、二流にも届かない作家のやうに言ひ貶されてゐる。要するに評論はその材題の如何に據らず、偏頗であるか否かを問はず、その評論家自身の見識に依つて、斷定的に大膽に言ひ切つたところに妙味がある。而も諧謔の進つた、人間味の籠つた作家の性根が反映されたときに、その文章はいつまでも讀者を引きつける力を失はないであらう。ジョンソンの散文の文體に就いては、既に引用したところに依つて一般を察知することが出来やう。ジョンソンがミセス・ポータと結婚した年に出版した *A Voyage to Abyssinia* はリスボン (Lisbon) 生れの デニモ・ロボウ (Lobo, Jeronimo) といふ宣教師が書いたその旅行記がフランス語に抄譯されてゐたのを、ジョンソンが英譯したに過ぎないけれども、此譯文の緒言からしてジョンソン獨特の文體が覗かれるのである。所謂 *Johnsonian* とか *Johnsonese* とか呼ばれてゐるラティン系の重々しい、さうして綴の多い語を好んで使ふ癖があつた。チャブ屋の些末な事件を記すにも、重大な道德問題でも扱ふと同じ心持で筆を運ぶやうに見える。若しジョンソンに小ざかなの道話でも書かせたら、その小魚は恰も鯨のやうな物言ひをするに相違ないとは、ゴウルドスミスの評語であつたが、さういふ傾は儘にあるやうである。然しいつも同じではない、扱ふ問題に依つてその文體に多少の變化はある。" *Rassels* " の如きは極めて堅苦しい、四角四面な文體を示してゐるけれども、" *Lives of the English Poets* " になると、*ちびけた*、而も底力の籠つた文體であるアデイスン傳から例を取る。

As a teacher of wisdom, he may be confidently followed. His religion has nothing in it enthusiastick or superstitious: he appears neither weakly credulous, nor wantonly skeptical; his morality is neither dangerously lax, nor impracticably rigid. All the enchantment of fancy, and all the cogency of argument, are employed to recommend to the reader his real interest, the care of pleasing the author of his being. Truth is shown sometimes as the phantom of a vision; sometimes appears half-veiled in an allegory; sometimes attracts regard in the robes of fancy, and sometimes steps forth in the confidence of reason. She wears a thousand dresses, and in all is pleasing.

堅苦しい、學者振つた癖の抜けた、ジョンソンの成熟期の此の「詩人傳」には、詩人を兼ねた文豪の想像の豊かさを見せて、簡勁にして壯重に、屈伸自在な調子の取れた文章である。平素「文學俱樂部」" *The Literary Club* " や、個人として人に接しての談笑の間にすら、一語一句よく吟味して誤謬のなきを期したその用意が、最もよく文章の上に現されてゐるのである。茶好きでジョンソンが茶腹を張らせながら、或はむしやむしやと音を立て、貪り食ひながら、なりふりに構はず、行儀作法を無視して、食卓に向ひ、快談に耽つた文學俱樂部の會員にはバーク (Burke) やピシヨ

ツプ・パーシ (Percy) やボズウェル (Boswell) やフォックス (C. J. Fox) や並に當時畫界に覇を唱へたレムルツ (J. Reynolds) などがあつて、デヨンスンが勿論その牛耳を握つて、獨斷的なその意見は全然間違ないものとして傾聴され、尊重されたものである。さうして如何なる折にもデヨンスンが「恐らく」とか、「と思ふ」など言ふ言葉を滅多に用ゐなかつたことも、「詩人傳」その他の評論文から立證される。文壇に立つて非常に獨斷的であつたに拘らず、又その態度が粗野で、外貌が醜劣であつたに拘らず、母のやうに温く、小兒のやうに優しい心を保つてゐた。知れる限りの人から愛された。交際する限りの人から慕はれた。オクスファード大學から博士號を贈られたのは、デヨンスンが六十六歳の時であつた。老ひて益熾なデヨンスンが「詩人傳」に筆を染めたのは、一年隔いた六十八歳の時で、五年後の千七百八十一年に完成して、その傑作の一つを残したが、その翌翌年ふと中風に罹り、餘病を引き出し、殊に喘息の爲に日夜苦しめられながら、千七百八十四年も押しつまつた十二月の十三日、交友に圍繞まれながら永き眠に入り、ウエストミンスター寺院に葬られた。その葬列には殆んど朝野の知名の人士を網羅したさうである。

第五章 古典派詩風最後の追跡者及

その他の二流詩人の一團

第一節 チャーチル、ダーウインその他

デヨンスンと同時代乃至以後に於てドライデンやボウプの詩風を追跡したものは極めて尠い。古典派の詩風はチャールズ・チャーチル (Charles Churchill) を經てイラズマス・ダーウイン (Erasmus Darwin) に至り全くその光鋒を收めたのである。

チャールズ・チャーチル (Churchill) は必しも名高い詩人ではない。千七百三十一年にウエストミンスターに生れ、三十四歳でブロンニュ (Boulogne) で物故するまでの生涯の大部は、ランダンの貧乏な牧師補で暮らしたのも、十七歳で妻帯して大學にも入れずに了つた爲であつたらう。三十一歳の時、當時の俳優達を諷刺した千行餘りの「The Rosciad」を公にして、大當りに當り、續いてその翌年「Night」"A Epistle to William Hogarth" を公にし、彼が歿した千七百六十四年までに「The Conference」"The Author" "The Times" "Independence" を書いた。短日月の間にその述作は可成多かつたけれども「The Ghost」など、八音節の試みの外は悉くヒロウイック・カブリットで、ボウプやドライデンを範に取つたもののみである。「The Rosciad」は最早期の作であるに拘らず、最も秀れてゐる。きびきびとした惡口は骨髄を剝るまでではなくとも、赤眼れの痛を感じさせるほどの毒を持つてゐる。

Harvard and Davies.

Here Harvard, all serene, in the same strains,

Loves, hates, and rages, triumphs and complains :

His easy vacant face proclaim'd a heart

Which could not feel emotions, nor impart.

With him came mighty Davies. (On my life,

That Davies hath a very pretty wife !)

Statesman all over ! In plots famous grown !

He mouths a sentence as curs mouth a bone.

ボウプの流を汲んだものであることが首肯されるけれども、他の作物に至つては、彼の趣味の低級であることを曝露し、判断の正鵠を失して次第に墮落してゐる。元來人間に就いての智識に乏しく、學問も深くはなかつたので、三年の間に詩囊は殆んど空虚になつて了つたと言ふ人もある。同じ諷刺詩でありながら、ドライデンやボウプの深刻味に乏しく、パトラやスファトの強韌性を欠いてゐるけれども、無遠慮な悪口雑言や無鐵砲な空威張を一部の人間は甚ごく怖れたものである。諷刺詩人として蓋しドライデン以後の一勢力であつたらう。さりながら、懐中の温まると共に酒色に耽溺して、短かい生涯を終つたやうに、その詩の生命も極めて短かく、聽がて忘られて了つたのは寧ろ當然であつた。

チャーチルの生れた同じ年に生れて千八百二年に死んだ、イラズマス・ダービン (Erasmus Darwin) は古典派詩人の最後の一人である。

イラズマス・ダービンは彼有名なチャールズ・ダービンの祖父に當る人である。醫を業として、植物學の造詣極めて深く、又詩人としてのその住居せる Lichfield に彼の名聲はデヨンスンを凌ぐものがあつた。ダービンの知名の作は "The Botanic Garden" である。二部から成つてゐて、"The Loves of the Plants" と "The Economy of Vegetation" の名を以て、千七百八十九年と千七百九十二年との二度に出版したものである。元來リンネ (Linne) の植物組織を祖述したものであるが、ボウプのそれに較べて毫も遜色を見ない完全無缺の heroic couplets で綴られてゐるのである。また古典詩の凋落しなかつた當時にあつて、斯うするのがその學說を英國民に移植するに最も都合がよいと考へたものであらう。然し斯ういふ行き方はダービンに依つて始めて試みられたものではなかつた。約五十年ばかり以前にアイアランド人でヘンリー・ブルック (Henry Brooke) といふ人があつて "Universal Beauty" と稱する哲學的な、さうして科學的な詩を書いて公にした。此詩の第三篇目に植物界のことを詳説してゐるのから思ひつたものである。ダービンは總ての花をラティン名を用ゐて擬人し、總ての草木に人間の如き感情を與へようとした。

From giant oaks, that wave their branches dark,

To the dwarf moss that clings upon their bark,
 What beaux and beauties crowd the gaudy groves,
 And woo and win their vegetable loves!

時に頗る詩的な筆意を見せながら、問題が問題丈に概してわざとらしく無趣味であつて、最も自然なるべき自然を斯うまで極端に不自然に扱つて、餘りに人工的である、餘りに不誠實であると言ふ感じを世人の頭の奥まで滲み込ませた爲に、此後ヒロウイク・カブリットの詩形を用ふるものが全く其述を斷つことになつた。さう言ふ意味からダーヂンは古典詩 (Classic Poetry) の殘骸を歛めた棺桶に呻に最後の針を打ち込んだ形がある。常軌を逸した天才の誤用は惜しむべきものであつたが、ダーヂンが六十五歳から二ヶ年餘りを費して書いた散文の "Zoonomia, or the Laces of Organic Life" は單に科學的文學に多大の貢献をなしたのみならず、"The Botanic Garden" と共に、六十年の後にその孫のチャールズ・ダーヂンやハーバート・スペンサ (Herbert Spencer) などが唱へた進化論に對して、縦令その原理の弊見に過ぎないまでも、自然の現象に對して、その端緒を開いた功績は没すべからざるものであらう。

ダーヂンを中心とした古典派の詩人に、トマス・デイ (Thomas Day) (1748—1789) やアンナ・シユード (Anna Seward) (1747—1809) リチャード・ラヴェル・エツヂワース (Richard Lovell

Edgeworth) (1744—1817) デモン・アンドレ (John André) (1751—1780) などがあつた。デイには "The History of Sanford and Merton" といふ、教授法の改善を促した名高い教育小説の外に "The Dying Negro" といふ詩を書いて、奴隸制度の撤廢を提唱した人である。アンナ・シユードは、リッチフィールドの白鳥と呼ばれた閨秀作家であつて、父がリッチフィールドの寺院の評議員であり、又詩人であつた關係から、ダーヂンの崇拜家となり、ボズウエルのジョンソンに於けるやうに、ダーヂンの死後ダーヂン傳を書き、又 "Louisa" といふ詩的な美しい一篇の小説を著し、ソニットやその他の詩もそれぞれ公にされた。エツヂワースは閨秀小説家として知られたマリア・エツヂワース (Maria Edgeworth) の父であり、ジョン・アンドレは米國の内亂に際し、軍事擲偵として米國に赴き、捕はれて絞首の憂き目を見た人であることは周知の事實である。是等の人達は特に詩人として説く必要を見ないけれど、デイやシユードの如き詩以外に記憶さるべき作物があるし、再びその人達に説き及ぶ機会がないかも知れないので、ダーヂンと共に列挙したまでである。

第二節 ウエズリ兄弟、スマート・フォークナ、
 ビーティ、エイキンサイドその他

十八世紀後半の著名な詩人達を浪漫派及び古典派の流を趁つて記した後に、二流に置かるべき詩

人達を一括して説かう。チャールズ・ウエズリ (Charles Wesley) (1708—1788) の如き宗教的な詩人もあり、ロバート・ファガソン (Robert Ferguson) (1750—1774) の如き、ヘーンズと同じ國籍をスコットランドに有つた人もある。デニームズ・ビーレイ (James Beattie) (1735—1803) ウヰリアム・フォークナ (William Falkner) (1732—1769) やマーク・エイキンサイド (Mark Akenside) (1721—1770) の如き浪漫派に屬するものもあり、クリストファ・スマート (Christopher Smart) (1722—1770) の如き狂詩人もある。生年月の順で簡単にその作物を紹介して十八世紀後半の散文に移らう。

チャールズ・ウエズリの書いた詩は殆んど宗教的なものに限られてゐる。Westminster School を經てオクスフォード大學を出てからは、彼メソヂイスト (Methodist) 教會を始めて開いた、兄のデヨン・ウエズリと共にジョージア (Georgia) 殖民地に赴いて、印度人の中に傳導に従事したが、詩人としても學者としても、チャールズの方が兄のデヨンより一枚上であつた。チャールズの書いた詩は "Christmas Hymn", "Catholic Love" 或は "Wrestling Jacob" と言つた讚美の歌を始め、哲學を加味した宗教的なもので、量から言ふと可成の冊數に上ぼつてゐる。十七世紀のヴォーン (Van-Shan) やハーバート (Herbert) 達の詩に感興を湧かし得る人なら、ウエズリ兄弟の詩からも興味を唆られる筈であるが、科學の進歩と共に神學の研究に支障を生じ、宗教思想の衰退した現代に

有つては、ホールグレイヴ (Francis Palgrave) の「抒情詩選」"The Golden Treasury of English Lyrics" のセルボーン (Lord Selborne) の「讚美歌集」"The Book of Praise" を二つ並べて、つちを讀むかと訊かれたら、誰しも「抒情詩選」を先づ撰むに相違ない。然しウエズリ兄弟の如き親ら未開人の間に立つて布教傳導の苦い經驗を積んだ人々の、堅い信仰と深い思索が歌はれたその詩には、端的平明な言葉を以つて、怖るべき人生の事實を明示し、安住の境地を教えてゐる。例へばチャールズの "Wrestling Jacob" の七節に

My strength is gone ; my nature dies ;

I sink beneath Thy weighty hand,

Faint to revive, and fall to rise ;

I fall, and yet by faith I stand :

I stand, and will not let Thee go,

Till I Thy Name, Thy Nature know,

又言ひ、デヨンは "An Hymn for Seriousness" の末節に

Then, Saviour, then my soul receive,

Transported from the vale, to live

And reign with Thee above,
 Where faith is sweetly lost in sight,
 And hope in full supreme delight,
 And ever lasting love.

こあるべき、信仰なきものを信仰に導く手引として、理解し易くして且つ整つた美しい詩である十八世紀の前半に“*Let Dogs Delight*” & “*The Busy Bee*”の如きの道歌を書いた Isaac Watts も又讚美歌と共に併せ讀むべきものであらう。

(クリストウフアー・スマートはダラム・スクール (Durham School) からケンブリッジ大學に入り、フェロウになつた秀才であつたけれど、或る女性との内密の結婚が發覺して、フェロウを取り上げられた。四十二歳の時發狂して瘋癲病院に送られたが、正氣に戻つた折節書いた“*A Song to David*”がある爲に、“*The Iliad*”の如き諷刺詩やボウプなどを模倣した古典的の詩篇や短歌 (Epigrams) やホレイヌ (Horace) の散文譯、フェードラス (Phaedrus) の韻文譯など一束ねにした總ての作によつてよりも、スマートの名を重からしめてゐるのである。“*The Song of David*”は狂氣の去つた折節に書いたものであるから従つて、どこやら陰鬱な心の曇りが見えてゐる。同じ言葉の反覆や同じ意味の繰返しに伴ふ狂熱的表白の連續に、その狂氣の餘波を偲ばせてゐるけれども、

常に憧憬の的であつたデヴィッドの風格を先十二の形容詞を連ねて、逐次その十二の善徳の讚賞に始まつてゐる。

Great, valiant, pious, good, and clean,
 Sublime, contemplative, serene,
 Strong, constant, pleasant, wise !

 Great — from the lustre of his crown,
 From Samuel's horn and God's renown,
 Which is the people's voice ;
 For all the host, from rear to van,
 Applauded and embraced the man —
 The man of God's own choice.

 Wise — in recovery from his fall,
 Whence rose his eminence o'er all,

Of all the most reviled :

The light of Israel in his ways,

Wise are his precepts, prayer and praise

And counsel to his child.

.....

節を逐ひ節を重ねて、殆んど應接に違なきばかり、自然の現象と人生の事實を捕捉して、悉くデズ
イッドの讚美の材料たらしめてゐる。五百十六行からなる此リリックは非凡の観察力と稀有の想像
力が生んだ逸品であつて、英文學史中多く匹儔を見ざるものである。縦合その節奏に缺點が
重複に瑕瑾があり、又屢々意味の透徹を欠いた個處があつても、彼ブレイク (Blake) に見た同じ
靈覺の閃きを認めしめてゐる。スマートの死後出版された詩集からすら削除されて、全く等閑に附
せられてゐた此詩が、百十餘年の後、ブラウニング (Browning) を待つて、その著 "Parleyings
with Certain People of Importance in their Day" に眞の評価を贏ち得たのはもとよりその處であ
らう。

マーク・エイキンサイドは Newcastle の屠牛者の子で、エディンバラ及びレイデン (Leyden) の
醫學校に醫學を修めた開業醫であつた。Northampton からランダムに移つて、女王シャーロットの

侍醫になつた人である。醫者には能く文學者があるが、ジョン・アームストロング (John Armst-
rong) なども同じ醫者で、職掌に相應しい「愛の節約」"The Economy of Love" や「健康を保持
するの道」"The Art of Preserving Health" などの詩を書いたが、エイキンサイドは未だやつと二
十三になつた青年の身で哲學めいた「想像の快樂」"The Pleasures of Imagination" と言ふ、二千
餘行に上る詩を書いた。三部に分たれて、大自然や人間が造りあげた美しい物から人間の心が受け
る感動を審査し、且つ例證したものである。梓に上ばす運びになつて、書肆の手からその原稿がボウ
プの手に渡つたとき、ボウプの好きさうにもなかつた blank verse の詩形を採つてゐたにも拘らず
彼の推奨の辭を得、時好に投じて數ヶ月の間素晴らしい賣行を見たものである。詩人としてエイキ
ンサイドは此作を公にする前に "The Virtuoso" といふ詩をスペンシーリアン・スタンザ (Spen-
serian Stanza) で書いたほどの早熟であつた。「想像の快樂」に續いて "Odes on Several Subjects"
をその翌年に公にした。言葉のこなしも巧みであるし、思想も氣高く、感情も品位がある。然し生
氣に乏しく、冷たくかつ堅苦しいのは石に刻んだ立像を見るやうであるのも、古典を深く研究しな
がら、徒らにその外装に拘泥して、眞諦に觸れ得なかつたが爲であらうと言はれてゐる。"An Epis-
tle to Curio" & "Hymn to the Naiads" なども寧ろまことな感情や情熱の現はされた詩として、味
はれてゐる。

井リアム・フォークナはエディンバラの理髪師の子で、何の學問上の經歷もなく、早くから船乗りの生活に入つて、十七八歳の頃、ヴェニス行の商船に乗り込み、ギリシャのコロナ沖で難破し、幸に一命を取り止めたその體驗を歌つたものが、千七百六十二年に出版された「破船」：“*The Shipwreck*”である。高い藝術的價値を認めがたいけれども、全篇活動的氣分が漲つて居る。現代のコンラードの小説：“*The Typhoon*”や、フォークナと同じ經驗を積んだメイスフィールドの詩の：“*Dauber*”を読むやうな凄惨な記述を見ると共に、作家の感情が烈しい浪風に揉れながら動いてゐる。

.....
The fated victims shuddering cast their eyes

In wild despair ; while yet another stroke

With strong convulsion rends the solid oak :

Ah heaven ! — behold her crashing ribs divide,

She loosens, parts, and spreads in ruin o'er the tide.

多年の海上生活から航海に關する術語に精通し、的確な *Nautical terms* を挿んでゐるのもメイスフィールドに似てゐる。若しフォークナをして當時流行の *heroic couplets* に據らしめず、より自然な詩形を探らしめたなら、其寫實の筆は一層の光彩を發揮したであらう。フォークナはその後職を

海軍主計に奉じ、千七百六十九年にケイプタウン (Cape town) 附近で沈没の厄に逢つた巡洋艦 *Aurora* の全乗組員と運命を共にして了つた。此不幸な詩人の記念として、その努力の跡を偲ばせる “*Universal Marine Dictionary*” は同じ年に出版になつたものである。

デエイムズ・ビーティはローランズカーク (Laurencekirk) に生れ、アバディーンで學問を收め、小學教員や、語學校の校長を経て、母校の *Marischal College* の教授になり、論理學の講座を擔任した。散文ではヒューム (Hume) を相手にして、ヒュームの學說を難詰した “*Essay on Truth*” が名高い。グレイ (Gray) やコリンズ (Collins) の詩及びバーシ (Percy) の *ballads* など熱心に讀んで、數多詩を書いた。“*The Judgment of Paris*” や “*Lines on Churchill*” など比較的獨創的なものであるけれども、これらへ詩としての價値は乏しい。千七百七十一年に公にした「遊吟詩人」：“*The Minstrel*” は饒かな情緒と、浪漫的な趣味を表示した佳作である。中心人物たるべき若きエドゥワーズの描寫が不充分であつて、その筋道の首尾一貫を欠いてゐるといふ非難があるけれども、中古の建物や武具やその他の服裝の細かな筆に、濃厚な浪漫的な靈感を感せしめる。

Anon in view a portal's blazoned arch

Arose ; and the trumpet bid the valves emfold,

And forth an host of little warriors march

Grasping the diamond lance, and targe of gold.
 Their look was gentle, their demeanor bold,
 And green their helmets, and green their silk attire,
 And here and there, right venerably old,
 The long-robed minstrels wake the warbling wire,
 And some with mellow breath the martial pipe inspire.

spenserian stanza の扱ひも巧である。ピーテイも又行きすまつた古典主義から中古の自由に憧れ、自然に歸らうとした浪漫主義の味方の一人であつた。

バーンズと同じ國籍を有し、バーンズより九つの年長者であつたロバート・ファーガスン (Robert Fergusson) (1750—1774) はセント・アンドルース (St. Andrews) に在學當時から、屢々その詩才を認められた早熟の天才であつた。二十一歳の時 Ruddiman の週刊雜誌に載せた詩篇が、蘇國一流の詩人として文壇に重きをなさしめたが、それは彼の爲に不幸であつた。法律家の書記といふ貧乏生活から急轉して、宴會づくめの飲食が度を越え、元來纖弱の體質を根底から破壊したばかりでなく、精神にさへ異常を起して、癲癲病院で淋しい生涯を終つたのは、年齢僅に二十四歳の秋である。彼は都會生活の殷昌華美を愛したと同時に、田園生活の靜謐簡素を好んだ。彼の詩に浮やかに

陽氣な一面と、蕭々とした地味な他の一面のあるのは之がためである。“Wale of ilka Town”, “Leith Races” なつ前者に屬し、“The Farmer’s Ingle” なつ後者に屬するものである。ファーガスンの死後十五年してバーンズがその Canongate の墓を訪れ、一石をその墓の上に置いたのも、兩詩人の間に一脈の同氣相通するものがあつたからであらう。バーンズの詩の “The Holy Fair”, “The Cotter’s Saturday Night”, “To the Mouse”, “The Mountain Daisy” なつ讀んで、ファーガスンの “Hallow Fair”, “The Farmer’s Ingle”, “To the Bee”, “To the Goodspink” に比較したなら、ファーガスンのバーンズに及ばせる感化の少くないことを知るであらう。ファーガスンはラムジ (Ramsay) とバーンズの中間に来るべき蘇國詩人中錚々たるものであらう。

十八世紀の前半に在つて「ブレニム」：“Blenheim” の作者ジョン・フィリップス (John Philips) が “Cyder” に科學を詩に取り入れてゐたが、次いでウィリアム・サマズイン (William Somerville) が “Chase” を書いた。年を逐ひ科學の研究が進むと共に、同じ方面に筆を付けた詩人が折々出て居る。ジェイムズ・グレンジャー (James Grainger) (1721—1766) の “Sugar Cane” なつその一つである。アームストロングの “The Art of Preserving Health” やダーキンンの “The Botanic Garden” と共に眞の詩として見るべき價値に乏しいけれども、時代の風潮はかゝる作物を生ませずにはおかなかつたのである。

科學とは方面を變へて歴史的の詩を書いた詩人に、リチャード・グロウヴ (Richard Glover) (1712—1785) がある。商家に育ち、大學の課程は踏まず、實業家として又政治家として終始したけれども、古代ギリシヤの史書に親しみ、遂に一角のギリシヤ通となりおほせた。文筆は固より彼の餘技に過ぎなかつたけれども、“Leonidas” とその續篇の “The Athenaid” の如き驚くべき長篇の史詩があり、商業の進歩を歌つた “London, or the Progress of Commerce” がある。生硬でなければ、情熱に乏しい、それらの詩に感興を湧さない人達も、“Admiral Hostier's Ghost” といふ一篇のバラッドを忘れ得ないであらう。嘗つて一艦隊を率いて West Indies に遠征し、數千人の部下と共に熱病に冒されて死んだホウジアの亡霊をして、Porto-Bello の強襲に成功したヴァーノン (Vernon) 將軍を祝福させながら、詩人自身の愛國の精神が浮動してゐる。

“The Enthusiast” の作家、ウィリアム・ホワイトヘッド (William Whitehead) (1715—1785) は Cibber に次いで欽定詩宗に推された詩人であり、假令杓子定規に囚はれた嫌はあつても、“Variety, a Tale for Married People” の如き、その輕妙の筆致に多少の魅惑がある。然し數多の悲劇、喜劇や挽歌、尺牘類は大かた忘れられてゐる。

“Hymns in Prose for Little Children” の作者として知られたミス・バーボールド (Mrs. Barbauld) (1743—1825) にも “The Death of the Righteous” の如き名吟がある。詩は概ね平明で、而

も餘韻に富んでゐる。情熱に乏しいと言ふけれども、宗教的篤信を以つて、眞剣に人生を歌つた女性である。

カロライン・オリファント (Caroline Oliphant) (1766—1845) の如き、その生涯の大半は十九世紀に入るけれども、その詩作は若い時に限られてゐる。Nairn に嫁して Baroness Nairn の名を以ても知られてゐる。民間に傳はつた粗野な物語を材料に、上品な古典に合せた數多の歌曲——例へば “The Land O' the Leal” “What'll be King but Charlie”, “The Auld House”, “Will ye no come bac k again?”, “I will sit in my wee croo house.” などのヘーンズの詩と共に蘇國の片田舎にまで熾んに誦はれたものである。

悲劇 “Douglas” の作家ジョン・ホーム (John Home) (1722—1808) や “New Bath Guide” の著者として、又 Vers de Société に堪能であつた、クリストファー・マンステイ (Christopher Anstey) (1724—1805) やグレイ (Gray) の親友であつて、グレイの傳記 “Memoirs of Gray” を書き、又 “The English Garden” や十三の Odes やヘーメンの “Lycidas” に倣つて、ホウブを哀慕した “Musaeus” の作家ウィリアム・メイソン (William Mason) (1724—1797) や、クローブの友達であつて、クローブの傳記を綴り、“Triumphs of Temper”, “Triumphs of Music” などの詩を残したウィリアム・ヘイリー (William Hayley) (1745—1820) や、“剃刀賣ッ” “The Razor Seller” や“巡禮

「豆」"The Pilgrims and the Peas" の如き滑稽詩を始め、相手嫌はず抑捺り倒し、悪罵を浴せた
 數多の大膽不敵な談話交りの諷刺詩に、作家の野卑な人柄と低級な趣味を忌憚なく曝露したジョン
 ・ウオルコット (John Wolcott) (1738—1819) や London の Southwark の醸造家 Henry Thrale
 に嫁して Mrs. Thrale の名で、より多く知られてゐるヘスター・リンチ・ピオチ (Hester Lynch Pi-
 ozzi) (1741—1822) はジョンソン崇拜家の一人であつて、"Anecdotes of Dr. Johnson" を著し
 "The Three Warnings" など詩も書いてゐる。

第六章 十八世紀の散文

第一節 デジョンソン以外の散文家

デジョンソンが十八世紀後半の代表的文豪であることは今更説くまでもない。デジョンソンを中心と
 した彼文學俱樂部の會員や、哲學及び論理學の方面で、デイヴィッド・ヒュームやアダム・スミスや
 歴史家のキボンやロバートソンなど散文の大家が輩出してゐる。

文學俱樂部の一員で、さうしてデジョンソンに最も關係の深いジェイムズ・ボズウェル (James Boswell) から始める、ボズウェルは蘇國エーシアのオーキンレック (Auchinleck) の貴族の出である。文學を愛好し、豫て文學者達と交際を求めようとし、機會を待つてゐたが、ランダンに上ばり

或日 Covent Garden の Russel Street にあるデヴィーズと言ふ書店の主人と茶を啜つてゐた時、偶然其店に來合せたデジョンソンに紹介され、宿望を達してから、ボズウェルとデジョンソンの交情は日に月に細やかになり、影の形に添ふやうにボズウェルはデジョンソンの身邊を離れず、ボズウェルの耳目に觸れたデジョンソンの性癖や、嗜好や片言隻辭、一舉手一投足も洩さず書き止めたのが千七百九十一年に刊行された「デジョンソン傳」"The Life Johnson" である。

My next meeting with Johnson was on Friday, the 1st of July, when he and I and Dr. Goldsmith supped at the Mitre. I was before this time pretty well acquainted with Goldsmith, who was one of the brightest ornaments of the Johnsonian society. Goldsmith's respectful attachment to Johnson was then at its height; for his own literary reputation had not yet distinguished him so much as to excite a vain desire of competition with his great Master. He had increased my admiration of the goodness of Johnson's heart, by incidental remarks in the course of conversation, such as, when I mentioned Mr. Levett, whom he entertained under his roof, "He is poor and honest, which is recommendation enough to Johnson;" and when I wondered that he was very kind to a man of whom I had heard a very bad character, "He is now become miserable, and that insures the protection of Johnson."

デヨンスンやゴウルドスミスの温情が湯のやうにボズウエルの筆端から流れ出してゐる。デヨンスンと會談し、デヨンスンに質疑するのが、ボズウエルに取つては此上もない快心のことであつたが、デヨンスンばかりでなく、それらの俱樂部員の口から出た断片的な *bons mots* も一々聞き洩らなかつたのである。「デヨンスン傳」は殆んど繪に畫いたやうな、完全な個人の傳記であるばかりでなく、ゴウルドスミスその他の文人達の消息を知るにも極めて貴重な著述であつた。ヒーブリディースの島々を旅して廻つた日記 “*The Journal of a Tour to the Hebrides*” は同行のデヨンスンの日記より優れてゐると言はれてゐる。此日記の内にデヨンスンを斯う描いてゐる。

He was conscious of his superiority. He loved praise when it was brought to him; but was too proud to seek for it. He was somewhat susceptible of flattery. His mind was so full of imagery that he might have been perpetually a poet. Though his imagination might incline him to a belief of the marvellous and the mysterious, his vigorous reason examined the evidence with jealousy. He had a loud voice, and a slow deliberate utterance, which no doubt gave some additional weight to the sterling metal of his conversation. His person was large, robust, I may say approaching to the gigantic, and grown unwieldy from corpulency.

デヨンスン傳の謂はゞ補遺と見て、デヨンスンの研究には欠くべからざる書物であらう。ボズウエルは猶千七百六十五年にコルシカ (Corsica) に旅して “*An Account of Corsica*” を書いたが、兎に角にボズウエルは全く「デヨンスン傳」一卷に據つて英文學史上に不磨の名を刻みつけたものである。ボズウエルの文章は上記二つの引用にも見られるやうに簡明で平易で、その鋭い、しかも行届いた観察が、持前の愛嬌たつぷりな快辯と、機智の閃めきによつて遺憾なく表白されて、何となく親しみを感せさせずには置かない。

第二節 デヴィッド・ヒュームの史書とその哲學

ロツクやバークリ以後の大哲學者として、マコーリやカーライル以前の大歴史家として、又當代一流の批評家として、三つの方面に卓抜した地位を占めたのはデヴィッド・ヒューム (David Hume) (1711—1776) である。家族はベリックシャー (Berwickshire) の名門であつたが、ヒュームはエディンバラで生れ、その地の大學で教育を受けた。法律を履修したけれども、辯護士や裁判官で終始する考もなかつたし、次いでプリストルで商業に従事したが、商人といふ柄では勿論なかつたので、好きな哲學や文學を以つて世に立たうと決心したのは二十三歳の時であつた。フランスの La Flèche といふ小村に退隱して、倫理學や哲學の研究に没頭した。二十九歳の時、公にした有名な「人性論」 “*A Treatise on Human Nature*” は La Flèche で書いたものである。續いて千七百四十

一年と四十二年とに「人性論」と共に汎く讀まれてゐる「道德論及政治論」(Essays: Moral and Political) 二卷を出して、思想家としてヒュームの名は一時に高くなつた。然しヒュームはペリツクシーヤのナインウエルズ(Ninewells)に廣濶な耕地を有つてゐた母の農家に退いて、讀書三昧に日を送つてゐたが、友達の周旋で、千七百四十七年セント・クレイア將軍の秘書となり、又軍事上の使命を帯びて佛埃諸國に赴き、オランダやイタリア、ドイツを旅行して、千七百四十九年再びペリツクシーアに皈つて、専ら思索に沈潜した結果は、千七百五十年から五十二年に亘つて、「自然宗教に關する對話」(Dialogues on Natural Religion)「道德の原理」(Principles of Morals)及び「政談」(Political Discourses)を書いた。孰れも重要な著述であつたが、就中「政談」は自由貿易の學說を含み、經濟學の諸原則を聲明したもので、經濟學に志した學生達に多大の刺戟と利益を齎した。その後、居をエディンバラに移し、Advocate 圖書館員の椅子に就き、益々文藝史書を獵渉する機會と時間とを得て、爰處に英國史「The History of England」の大著述に着手し、千七百六十年に至つて漸く完成を見た。その翌々年大使附秘書官として、ハートフアード卿に隨ひパリに赴任し、ダレンベン(D'Alembert)やデイダロー(Diderot)やルソー(Rousseau)の如き碩學鴻儒と交遊し、二ヶ年餘り滞在の後飯英し、内務次官となり、在職更に二ヶ年にして、エディンバラに穩退し、尊敬と愛慕に圍繞されながら、安泰に餘生を樂んだ。

爾來英國の哲學者はベイクン(Bacon)以後ロツク(Locke)もベークツ(Berkeley) 等しく經驗主義に依倚して、或は觀念を説き、認識を論じたけれども、或は英國特有の思想と乖離し、或は矛盾撞着に陥つてゐた。ヒュームは經驗主義を推究し、觀念と印象の區別は明瞭なるものとして、觀念と印象の二つの起源から意志作用を推論しようとした。意志は孤立した印象と觀念の繼續であると言ひ、又原因結果の知識は經驗によるものである。經驗は二個の現象の共在或は繼起を示すにとゞまり、兩者の間には必然的關係はないとし、或は善惡の根本的差別をヒューム一流の功利主義によつて解決せんとせしごとき、その所論は頗る懷疑的であり、又破壞的であつた。又彼奇蹟なるものは、人間の經驗に背反し、かつ理性と事實に徹して有り得可らざるものであり、しかも凡ての現象を支配する不變不動の自然法に據つて立證せらるべきことを論じた「奇蹟論」(The Essay on Miracles)の如き、又ロツクの Scepticism に出發したものであつた。以上の宗教乃至哲學に關する所論は端的明澄の筆を驅つて書かれてゐるけれども、乾びた史的事實を歴史上の人物の描出と共に書き生かした「英國史」の、その委曲朗暢の文章こそ、文學としてキボンの「羅馬史」と並んで絶對の價値を有つものである。

There are few great personages in history who have been more exposed to the calumny of enemies and adulation of friends than Queen Elizabeth; and yet there is scarcely any

whose reputation has been more certainly determined by the unanimous consent of posterity. The unusual length of her administration, and the strong features of her character, were able to overcome all prejudices; and, obliging her detractors to abate much of their invectives, and her admirers somewhat of their panegyrics, have at last, in spite of political factions, and, what is more, of religious animosities, produced a uniform judgment with regard to her conduct. Her vigour, her constancy, her magnanimity, her penetration, vigilance and address, are allowed to merit the highest praises, and appear not to have been surpassed by any person that ever filled a throne. A conduct less imperious, more sincere, more indulgent to her people, would have been requisite to form a perfect character. By the force of her mind she controlled all her more active and stronger qualities, and prevent them from running into excess, her heroism was exempt from temerity, her frugality from avarice, her friendship from partiality, her active temper from turbulency and a vain ambition; she guarded not herself with equal care or equal success from lesser infirmities, the rivalry of beauty, the desire of admiration, the jealousy of love, and the sallies of anger. ヒュームは蘇國の貴族の出であり、さうして専政の主張者であつたのみならず、宗教に關して偏

見を有つてゐた爲に、批判の公正を失ひ、考證の徹底を欠きたるの譏はあるけれども、科學的正確を史家に要求しなかつた時代にあつて、ヒュームの英國史の如き組織的に秩序ある史筆は、燦然たる異彩を放つたものであつた。

ヒュームの「英國史」と讀んで、「蘇國史」に名を走せた文豪は井リアム・ロバートソン (William Robertson) (1721—1793) である。ロバートソンはエディンバラに近いボース井ック (Borthwick) に生れた。父がプレズビテリアンの牧師であつたので、大學に在つても父と同じ經路を踏むやうな學問をした。三十七歳の時、エディンバラ教區の牧師に任命され、其年の後、主として女王メアリ (Mary) とジェイムズ六世 (James VI) を扱つた「蘇國史」"The History of Scotland"を書き、その説教と共に噴々の名をなした。更に三年後の千七百六十二年に、エディンバラ大學の學長に推され、蘇國王室編史官を兼ねた。千七百六十九年と千七百七十七年とに "The History of the Reign of Charles V." と "The History of the Discovery and Colonisation of America." を刊行した。ロバートソンの文章はヒュームのそれに較べると、遙かに情熱があるけれども、著しく技巧の迹を止め、稍々鈍重の趣がある。ヒュームが寫した女王イリザバスに對應して、ロバートソンが描いた女王メアリを見よう。

To all the charms of beauty, and the utmost elegance of external form, she added those

accomplishments which render these impressions irresistible. Polite, affable, insinuating, sprightly, and capable of speaking and of writing with equal ease and dignity. Sudden, however, and violent in all her attachments; because her heart was warm and unsuspecting. Impatient of contradiction: because she had been accustomed from her infancy to be treated as a queen. No stranger, on some occasions, to dissimulation, which, in that perfidious court where she received her education, was reckoned among the necessary arts of government. Not insensible of flattery, or unconscious of that pleasure with which almost every woman beholds the influence of her own beauty. Formed with the qualities which we love, not with the talents that we admire, she was an agreeable woman rather than an illustrious queen. The vivacity of her spirit, not sufficiently tempered with sound judgment, and the warmth of her heart, which was not at all times under the restraint of discretion, betrayed her both into errors and into crime.

蘇國に生れ、蘇國を一步も踏み出さなかつたロバトスンのこの蘇國史の上には、ヒュームと同様偏倚した批判もあるに相違ない。然し女王メアリヤ、チャールズ五世の治世は、極めて浪漫的な事實に富んだ時代である。従つて記述が劇的な魅力を備へてゐる。但し史實の穿鑿に不十分な點が多

く、特に「米國史」に於いて甚しいと言はれてゐるのは、米大陸の發見や殖民時代のことは西班牙人の書き残した適確な史料に據るのが安全であるけれども、ロバトスン當時にあつては、その材料を蒐むることが困難であつたが爲であらう。兎に角に米國の成立と共に般昌を極めた西班牙帝國の歴史に筆を付けた英國の最初の史家として彼の名を記さねばならない。

第三節 エドワード・ギボンとその「ローマ衰亡史」

特色ある歴史家として残る一人は「ロウマ衰亡史」を書いたエドワード・ギボン (Edward Gibbon) (1737—1794) である。ギボンはヒュームよりも、ロバトスンよりも優れたる史家であることは言ふまでもない。單に十八世紀のみでなく、凡ての時代を通じて最大歴史家の一人であらう。

ロバトスンはヒュームより十年の年少者であつたが、ギボンはロバトスンより若きこと更に十六年であつた。ギボン家はケントの舊家で、父の浪費の爲にその世襲財産の大部分を失つたけれども、衣食に事缺く程度ではなかつたので、ギボンはウエストミンスター・スクールに入つた後も、一二の家庭教師に就くことが出来た。體質が繊弱であつたので、唯氣紛れに讀み散して、充實した學問の根底も築かずに十五歳の春を迎へて、オクスフォードのモードリン大學に入學した。十四ヶ月の在學期間には全く懶惰無爲に終つたが、これは獨りギボンの罪でもなく亦モードリン大學許りの罪でもなく當時一般にオクスフォード大學の空氣が沈滞してゐたのに歸因する。在學中ミッドルトン (Middletown)

の“Free Enquiry”やボスエ (Bossuet) の書いたものなど読んで、ローマ舊教に皈依した爲に、大學當局から睨まれて、遂に學籍の除名に駭かされた父は、ギボンにローザン (Lausanne) に送つて、カルヴァイン派の僧パヴィヤール (Pavillard) の教を受けさせた。五ヶ年滞在の間に、名のみませよ、再び新教に改宗した。ローザンの五ヶ年はギボンに取つて大なる意義あるものであつた。モードリンのだらけた生活とは打つて變り、孜孜として勉勵し、ラティンの古作家達の書いたものを片端から讀破し、フランス近代文學の研究に歩を進め、佛語で「文學研究論」“*Sur l'Etude de la Littérature*”を書いたほどである。判斷や、感情、習癖まで非英國的になつて了つた。ギボンの死後二年して刊行された“*Miscellaneous Works*”の中に含まれた自叙傳の“*Memoirs*”に斯う記してゐる。

One mischief, however, and in the eyes of my countrymen a serious and irreparable mischief, was derived from the success of my Swiss education, — I had ceased to be an Englishman. At the flexible period of youth, from the age of sixteen to twenty-one, my opinions, habits and sentiments were cast in a foreign mold; the faint and distant remembrance of England was almost obliterated; my native language was grown less familiar, and I should have cheerfully accepted the offer of a moderate independent fortune on the terms of perpe-

tual exile.

英國人で英國人離れがしたことは、ギボンに取つて「ローマ衰亡史」を書くのに公平な批判の基礎となつた。千七百五十九年に歸國し、*Hampshire Militia* の大尉としての數年の經驗も、歴史の編纂に多大の利益となつた。千七百六十三年に再び大陸の旅を思ひ立ち、フランスからスヰツァランドを経てイタリアに赴き、ローマに滞在中、或日デユビタの殿堂の廢墟の中に、瞑想に耽りながら腰を下したとき、裸足の僧達が夕の禮拜の歌を誦してゐたのを見て、その市の衰亡の跡を綴つて見ようといふ考が浮んだと、ギボン自身書いてゐる通り、千七百六十五年歸國すると同時にその事業に従事する考であつたが、障ることがあつて七年後の千七百七十二年に執筆し始め、千七百七十六年に至つて漸く「ローマ帝國衰亡史」“*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*”の第一巻を上梓した。之に對して先ヒュームが揚げた推譽と讃頌の聲は、流行社會と讀書社會に至大の反響を見た。更に五年を経過した千七百八十一年に、第二巻と第三巻が出版され、而も猶ギボンの此大著述はその半に達したに過ぎなかつた。その翌年貿易局長官の椅子を離れ、生活の變動を機として再びローザンに赴き、レマン (Lake Lemán) 湖畔に清閑の居を卜して徐に筆を執り、千七百八十七年の六月に至つて最後の三巻と共に衰亡史の完結を告げたのであつた。ギボンが此大著述に着手してから年を閲すること滿十二ヶ年である。天稟の才幹と、非凡の學識の助に據つた

のは勿論であるけれども、主として堅忍不拔、その道に精進した結果に外ならぬものであつた。先づオーガスタス (Augustus) 時代の概説に始り、中部欧州の蠻族の侵入と共に、西ローマ帝國の滅亡を招致した顛末や、異教の死滅は新しきキリスト教の生誕となり、世界文明史上に一大變遷期を劃し、ビザンタイン (Byzantine) の勢力の樹立より、千四百五十三年に於ける、コンスタンティノウプル (Constantinople) の陥落に至るまで千二百有餘年に亘る文明史である。ギボンは單なる史學の研究者でも、又單なる文學の鑑賞家でもなかつた。議會の一員として、政治界の事情に通じてゐた。Hampshire Militia の大尉として、軍事上の知識にも精はしかつた。血腥き戦亂と惨虐の事件を織りながら、啓蒙思想の推移を叙し、制度文物の變革を覓ぬるには、總ての點に於て最も適切な歴史家であつた。機微の觀察と明敏な判断はコンスタンティノウプルの敘述の筆にさへ之を覗ふことが出来る。

The harbour of Constantinople, which may be considered as an arm of the Bosphorus, obtained in a very remote period, the denomination of the Golden Horn. The curve which it describes might be compared to the horn of a stag, or as it should seem with more propriety, to that of an ox. The epithet of golden was expressive of the riches which every wind wafted from the most distant countries into the secure and capacious port of Constan-

tinople. The river Lycus, formed by the conflux of two little streams, pours into the harbour a perpetual supply of fresh water, which serves to cleanse the bottom and to invite the periodical shoals of fish to seek their retreat in that convenient recess. As the vicissitudes of tides are scarcely felt in those seas, the constant depth of the harbour allows goods to be landed on the quays without the assistance of boats; and it has been observed that, in many places, the largest vessels may rest their prows against the houses while their sterns are floating in the water. From the mouth of the Lycus to that of the harbour this arm of the Bosphorus is more than seven miles in length. The entrance is about five hundred yards broad, and a strong chain could be occasionally drawn across it to guard the port and city from the attack of an hostile navy.

「衰亡史」の計畫の餘りに大なるにギボンは心憶し、幾度か躊躇逡巡の後、筆は執りながら、最初の二三章に稿を改むること數回で、推敲選練を経てギボン独自の文體を作り出でたものである。上記引用文の如きその企畫の九分通りを果し得て、衰亡史もその終りに近く、材料の布置にも、文章の型式にも習熟し、達意を旨とした簡易平明の行文の中、字句の上にさへおのづから洗練鑄琢の迹を止てゐる。殊に數多戦闘の場面乃至人物の描寫に筆を下したとき、或は莊嚴に、或は瑰麗に、生

氣浮動して眞に迫るものがあると言ふのは無理のない批評である。ギボンの「衰亡史」は文藝史書の華であらねばならない。不斷の勵精と安坐の生活は遂にギボンの健康を傷け、五十四歳で水腫を病んで死んだ。

第四節 エドマンド・バークとフランス革命評論

同じ思慮深き人であつても、議員であつた間、ギボンが常に自重して、沈黙を守つたのに反し、屢々壇上に立つて、その侃諤の論をなした大雄辯家はエドマンド・バーク (Edmund Burke) (1729—1797) である。バークの父はダブリン (Dublin) の辯護士であつた。バットーア (Ballitore) の一宗教學校に學んで、ダブリンのトリニタイ・コレツヂに入つたのは十四歳の時である。トリニタイ在學中は英國の詩人や、ラティンのクラシックスに讀み耽つて、他日の文豪たるべき基礎を固めてゐた。史學協會 (The Historical Society) を興したのも主としてバークの力であつた。二十一歳の時ダブリンを去つて、ランダムンに出て、法學院 (The Middle Temple) に入學したが、辯護士の資格は遂に取らずに了つたが、千七百五十六年 Miss Nugens と結婚すると同時に二つの價值ある論文を發表した。一は匿名で書いた哲學論で「自然的社會の擁護」"A Vindication of Natural Society" と言ひ、ボリングブロウクの哲學を攻撃したものであつた。他の一つは美學評論であつて、「凡て崇高なるもの、美麗なるものに關せる觀念の起源の哲學的考察」"A Philosophical Inquiry into the

Origin of our Ideas on the Sublime and Beautiful" と言ふ題名であつた。三年後の千七百五十九年にドッツリ (Doddsley) といふ出版業者と "The Annual Register" の計畫を立て、爾後永くその編輯を扶助した。その千七百五十九年はバークが政界に一步を踏み入れた年で、爾來ロッキンガム卿 (Lord Rockingham) の秘書となつた。千七百六十五年衆議院議員に選ばれてから、殆んど三十餘年を議員として送つた。遂に一度も入閣はしなかつたけれども、屢々樞要の官職を襲ひ、その人格の力と政治的智識と、熱烈の辯舌とは、陰然朝野に重きをなしたものである。ノース (Lord North) の内閣の千七百七十年から千七百八十二年に亘る十二ヶ年の間に、バークは民黨の一員として、その内閣の亞米利加殖民地に對する威壓や、印度政策や、その他一般ノース内閣の施政の腐敗に關し糾弾と言はんよりは、寧ろ啓蒙的公明正大の論議を試みた。此期間の作物としては「現時の不平の原因に就いて」"Thoughts on the Causes of the Present Discontents" がある。現下の惡弊は二重内閣 (double Cabinet) の存在に歸因するとなし、下院議員が國王の昵近者であつて、その勢力とその容喙のために、下院議員を通じて民衆の眞の意見を聴くことの出来ないのを遺憾とした。米國人への課税に反対しながら、衷心米國を永く英國の配下に置かんことを希望した。"Speech on American Taxation" や "Speech on Conciliation with America" の如き政論はバークの遠謀深慮に加ふるに、憂國の精神を表白したものであつて、當路者にして、直に之を採用するの明があつたなら、國家的

乃至政治的危機を未然に防ぎ得たものもあつたのである。パークは常に敏慧な頭腦を以つて、穩健の判断を用ゐた。千七百八十八年のウォーレン・ヘステイングズ (Warren Hastings) の彈劾演説の如き、能辯中の能辯であつて、平素情味の豊かなパークとしては辛烈苛厲を極め、傍聴席にあつた閨秀小説家のフアニ・バーニ (Fanny Burney) の如き、ヘステイングズに同情を有つてゐた爲め、餘りの痛々しさにヘステイングズを偷み瞥ることもえうせず、殆どその席に居堪れなかつたと言ふことである。此有名な演説をした年は、一葦帯水のフランスの國家組織に大變動のあつた年で、その翌年 “*Reflections on the French Revolution*” を著し、フランス國民が採つた狂暴過激の手段に對しては極力之を難詰したのである。パークは專政の政治を好まなかつた。人道の味方として、寧ろ自由を謳歌した。然し保守的で且つ實際的な彼は、社會國家の秩序法規を維持せんが爲に、フランスの革命には全然反對したのである。フランスの王族、就中、弱き女性や幼けなき人達に加へられた侮辱の行爲を聞知したとき、任侠の血は燃えて火のやうに輝いたのである。

This king, to say no more of him, and this queen, and their infant children, (who once would have been the pride and hope of a great and generous people,) were then forced to abandon the sanctually of the most splendid palace in the world, which they left swimming in blood, polluted by massacre, and strewed with scattered limbs and mutilated carcasses.

Thence they were conducted into the capital of their kingdom. Two had been selected from the unprovoked, unresisted, promiscuous slaughter which was made of the gentlemen of birth and family who composed the king's body-guard. These two gentlemen, with all the parade of an execution of justice, were cruelly and publicly dragged to the block, and beheaded in the great court of the palace. Their heads were stuck upon spears, and led the procession; while the royal captives who followed in the train were slowly moved along, amidst the horrid yells, and shrilling screams, and frantic dances, and infamous contumelies, and all the unutterable abominations of the furies of hell in the abused shape of the vilest of women. After they had been made to taste, drop by drop, more than the bitterness of death, in the slow torture of a journey of twelve miles, protracted to six hours, they were, under a guard composed of those very soldiers who had thus conducted them through this famous triumph, lodged in one of the old palaces of Paris, now converted into Bastille for kings.

Is this a triumph to be consecrated at altars, to be commemorated with grateful thanksgiving, to be offered to the Divine Humanity with fervent prayer and enthusiastic ejaculation?

— These Theban and Thracian orgies, acted in France, and applauded only in the Old

Jewry, I assure you, kindle prophetic enthusiasm in the minds but of very few people in this kingdom.....

「フランス革命評論」がその年の中に十一版を重ねたのに徴しても、獨り英國のみならず、普く歐洲諸國民の注意を喚起し、君主達の間にも革命防止の氣運を漲らしめたのは事實であつた。翌千七百九十一年續いて「*The Appeal from the New to the Old Whigs*」、*The Letter to a Member of the National Assembly*」を著して、フランス革命の成行に就き、深く憂慮するところがあつたのである。千七百九十三年に至つて、フランス王室の運命の上に繁いだ一縷の望が切れたとき、滿腔の義憤は白熱化して、九十六年より九十七年にかけて、「*Thoughts on French Affairs*」及び「*Letters on a Regicide Peace*」となつて現はれた。フランス共和國は到底許しがたき弑逆を敢てして恬然顧みざる、怖るべき無神者の集合である。英國政府は「總ての害惡の母たるフランスの革命」を拒否せねばならないのみならず、斯る謬れる自由思想の國民の間に醸成せられざらんがために、極力之が抑壓に努むべき必要を力説したものであつた。若しバークの灼熱的愛國の大文字がなかつたら或は武士道の精神は一朝にして、歐洲全土より消滅し去つたかも知れない。國粹の存續を矜りとする英國のものにすら、如何なる變動を見たか豫測しがたかつたのである。バークを以て首位に置かるべき英國散文家とするのは稍々過褒の嫌があるけれども、論客として、辯者として、一代の名士

であつたのみならず、又得難き愛國の志士であつたことを拒むことは出来ないであらう。彼は「*The Regicide Peace*」を書いた同じ年の千七百九十六年に「*Letter to a Noble Lord*」を公にしてゐる。此書はバークの恩給に對し、同じ恩給を食む身のペドファード公爵が不合理な攻撃の矢箭を放つたため、嘲侮と皮肉に充たされた、極めて辛酷な反駁の鐵槌を公爵の頭上に加へたものであつて、彼フランス革命に對したほごに雄渾遒勁の筆意に乏しいけれども、暢麗精鍊の文章は、おのづから光彩の陸離たるものがある。蓋しバークの散文中、代表的名篇の一つに數ふべきものであらう。バークは千七百九十四年以來職を辭し、購へるビークンズフィールドの少許の領土に閑日月を娛んでゐた。政治的功勞に徴すればビークンズフィールド伯の榮爵をも賜はり、上院に席を置くことも難いことではなかつたであらうが、遂にそのこともなくして、所領ビークンズフィールドの小さき寺の土に化つたのは千七百九十六年の夏の始めであつた。

保守的であつたバークに對抗して、極端な急進主義を把持したものが尠なくなつた。トマス・ペイン(Thomas Paine) (1733—1809)の如きその一人であつて、屢々過激な論議を用ゐた。「常識」*Common Sense*」と稱する小冊から始めて、「時局」*Crisis*」を著はし、自然神教を標榜して「理性の時代」*The Age of Reason*」を書いたが、バークの「フランス革命評論」*Reflections*」を駁撃した「*The Rights of Man*」が最も名高い。

詩人シエリの後妻になつたメアリの母の、ノアリ・ウオルストウクラフト・ゴトキン (Mary Wollstonecraft Godwin) (1759—1797) に『*The Rights of Women*』の名著があつて、ペインの『*The Rights of Men*』と並んで、権利思想の發達の階梯を形成つてゐる。ウオルストウクラフトはランダムで生れたが、のんだくれの父を有ち、貧しい生活に苦勞を重ねた。フランスのバリで知己を結んだ米國の軍人のギルバート・イムリ (Gilbert Inlay) と戀に落ち、同棲したが、戀て他の女に乗り變へられて、法律上の結婚を無用とした彼女にも、憤りを禁め得なかつた。感情の鋭い氣性の勝つた彼女がイムリに宛てた『*Letters to Gilbert Implay*』など特色のあるものである。

ウオルストウクラフトの良人の井リアム・ゴドキン (William Godwin) (1756—1836) は十九世紀に入る文學者の一人であるけれども、ウオルストウクラフトがイムリと別れてから、ゴドキンと同棲し、シエリの妻となつたメアリを生んだ關係から一部分此處に説く。ゴドキンは『*Chorissa*』、『*The Life of Chaucer*』や『*Caleb Williams*』その他の小説を數多書いたし、論文の中では、『*フランス革命にその端緒を見出した*』、『*The Enquiry Concerning Political Justice*』が、ゴドキンの名を重からしめた快著である。『*Caleb Williams*』は殺人の罪を犯した主人と、主人の罪を知つてゐる若者の間の恐怖や迫害を書いたもので、『*The Political Justice*』に示した社會學の思想が背景となつてゐる。ゴドキンの思想はシエリやワーズワースの如き詩人にも、リットン (Bulwer Lytton) の如き小説

家にも妙からの感化を蒙らせたものである。

第五節 アダム・スミスその他の散文家

ヒュームと同じ哲學者であつて同時に散文の大家であつた、アダム・スミス (Adam Smith) (1723—1790) はファイフシャーのカークコールデイ (Kirkcaldy) に生れた。グラスゴウ大學に在つた時、フランシス・ハッチスン (Francis Hutcheson) の指導の下に三ヶ年の研鑽を積み、更にオクスフォードに笈を負ひ、歸來エディンバラから、グラスゴウに轉じ、或は修辭學に、或は論理學に、その蘊蓄を示し、二十九歳の時、先師ハッチスンの跡を承けて、論理學の講座を擔任した。千七百五十九年に上梓した『*道義感情の理論*』『*The Theory of Moral Sentiments*』は同大學に於ける講義を取り纏めたものであつて、當時流行の哲學に通俗的解釋を與へたものであつた。アダム・スミスの名はそれから十七ヶ年の後に出版された『*國民の富の性質及原因の研究*』『*The Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*』に據つて知られてゐる。當時未だ極めて幼稚な一個の科學的重要な問題を、兎に角に組織的に取り扱つた最初の經濟學者であつた。その内容を問ふには及ばない。『*國民の富*』の文章が毫も潤飾を用ゐない素朴な俗語體であるのを貴しとするのである。けれども文章そのものから文學的價値を論ずるならば『*國民の富*』よりも、寧ろ『*道義感情の理論*』の明晰にして、而も洗練されたのを推さねばならないであらう。

十七世紀のアイザク・ウォルトンに相當する十八世紀の散文家は、ギルバート・ワイト (Gilbert White) (1720—1793) である。ワイトはハンブシャーのセルボーン (Selborne) という村に生れて、七十三年の一生をその村で過した人である。ウォルトンが朝暮獨り閑寂の天地を領して、釣魚に餘念がなかつたやうに、ワイトは終始田園に起臥し、自然の愛を恣にし得た人である。あり餘る世襲財産を有しながら、遊び半分に土地の教會の准牧師を務め、間がな隙がな出歩いて、動植物の研究三昧に三十餘年を送り、驚くほど緻密で、鋭利な觀察を筆にしたものが、千七百八十九年に公にされた「セルボーンの博物學」: *The Natural History of Selborne* である。友達に書を送つた書翰體になつてゐて、悠然とした暢やかな作家自身の風采を、飾り氣のない、輕妙でさうして上品な文章に視せてゐるし、叙景の筆にウォルトンと同じ魅力がある。

Swallows and Martins, the bulk of them I mean, have forsaken us sooner this year than usual; for on Sept. the 22nd, they rendezvoused in a neighbour's walnut tree, where it seemed probable they had taken up their lodgings for the night. At the dawn of the day, which was foggy, they rose all together in infinite numbers, occasioning such a rushing from the strokes of their wings against the hazy air, as might be heard to a considerable distance; since that, no flock has appeared, only a few stragglers. Some swifts stayed late, till the

22nd of August; a rare instance! for they usually withdraw within the first week.

「セルボーンの博物學」が書翰體で記されてゐるので、序に他の二三の書翰體の作物を擧げて見よう。その一つはチスタフィールド伯の、フィリップ・ドーマー・スタンホップ (Philip Dormer Stanhope, Earl of Chesterfield) (1694—1773) の「その子に與ふるの書」: *Letters to His Son* である。チスタフィールドは多年上院議員の椅子を占めて、當時の政治及社交の兩方面に飛躍した名士であり、アイアランド總督ともなり、又は國務大臣にもなつた大人物であつたが、文學上ではジョン・スンが辭書の編纂に當つて、伯の援助を求めたとき、煮え切らないと言ふよりか、寧ろ冷淡な態度を採つた爲に、ひどくジョン・スンの感情を傷けた事實と、上記の「書翰」のお蔭で今日まで伯の名が傳へられてゐるのである。「書翰」はその妻腹の子供の爲に書いたもので、一生涯笑つたことがないと言はれたほど、嚴格な、さうして几帳面な伯自身の型そのままにその子を躑躅、紳士に耻ぢない行儀作法を教へようとしたものであつて、固より公にする考で書いたものではなかつたけれど、伯の死後間もなく出版されたものである。ジョン・スンは *The Morals of a Whore and the manners of a dancing Master*. だと痛くこき下したけれども、上品で齒切れのよい言葉使ひから、總體に推敲雕琢を経た文章であることが首肯せられ、頭腦の明晰なさうして世故に通じてゐた人の智識や、經驗が視はれてゐるのみならず、微妙な警句に至つては容易に追隨を許さぬものである。

米國殖民地と英本國の間に醸成された拮据に加ふるに、フランス革命の餘波を受けて、國民の思想に動搖を生じ、風雲轉た急なるものがあつたが、正義人道を基調としたパークの侃諤の論議に再び國民思想の平衡を保ち得たとき、千七百六十九年より千七百七十二年にかけて、ウッドフォール (Woodfall) といふ出版業者の經營に成つた "Public Advertiser" 誌上に、連続した書翰體を以つて書かれた論評が現はれた。當局の批政を非難し、公私人の弱點を摘發すること辛辣苛酷を極め、朝野をして目を敬てしめた。殊にグラフトンや、ベドフアド公爵達や、サー・シリヤム・ドレイバ (Sir William Draper) 等に加へた嘲罵諷刺は黙過しがたきまでに猛烈であつたので、當局はその匿名の主を八方物色したけれども、その目的を達し得なかつた。事實雜誌經營者のウッドフォールすら之を知らなかつたのである。或は當時陸軍省の一等書記の職にあつた Sir Philip Francis (1740—1818) の書いたものであらうと言ふ人もあるけれども、要するにその書翰は "The Letters of Junius" の名を以て傳へられてゐるばかりである。

彼「英詩史」: "A History of English Poetry" の作者、トマス・ワートン (Thomas Warton) は詩人として既に説いた。散文家としてその燃犀平明の筆を驅つて、古文學、殊に詩の評論鑑賞に一生面を開拓した功勞は忘れることが出来ない。

鴻瀚な「英法釋義」: "Commentaries on the Laws of England" を書いた法學の鉅儒サー・シリヤ

ム・ブラックストウン (Sir William Blackstone) (1723—1780) も後學の士に、歴史的に系統づけられた英國法典研究の最初の鍵を與へたばかりでなく、簡裁的確な法文の範疇を示した點に於て又屈指の散文家であらねばならない。

今日では特志の研究者の外には讀まれないけれども、神學の方面に、ジョゼフ・バトラ (Joseph Butler) (1692—1752) があつて、その名著「宗教の類似」: "The Analogy of Religion" に自然と神の屬性の類似を検考し、シリヤム・ワートン (William Warburton) (1698—1779) は "The Divine Legation of Moses" に獨斷的縱横の筆を驅り、自然神教を論難し、又神學の立場からボウプの「人間論」: "The Essay on Man" を支持して、ボウプと深交を結んだが、バトラは寧ろ十八世紀前半に組み入れらるべき神學者である。十八世紀の後半の代表的神學者はシリヤム・ペイリ (William Paley) (1743—1805) である。ペイリには哲學及び神學に關した著述が頗る多い。人間の個體及び團體に於ける行爲の原則を検査した「倫理」: "The Moral Philosophy" や、奇蹟に對するヒュームの攻撃に應へた「キリスト教の證左」: "Evidences of Christianity" や、自然界の現象の事實に倣めて、神の實在、大自在力、及び仁慈を證明した、「自然神學」: "The Natural Theology" などを著した。"The Natural Theology" が千八百二年に出版されてから、十八ヶ年の間に二十版を重ねたほど汎く讀まれた書物である。説く所は常識的であつて、概ね前人の跡を踏襲し、卓異獨創の